
スベテ恋スル少年少女

有森良太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スベテ恋スル少年少女

【Nコード】

N5560D

【作者名】

有森良太

【あらすじ】

かつては夢見た華の高校生活があまりに退屈極まりないものだと知り、平凡な主人公・南スグル<は学校生活を謳歌するために恋をしようと決心する。しかし友人の佐野アキタカに出し抜かれるばかりで、自分の恋は一向に進展しない。そんなある日にアキタカの繋がりから下級生との合コンが開かれ、そこで出会っひとりのボーイツシユな少女に恋をする。コメディーが主の学園ドラマですが、意外にシリアスな部分もあります。一話3000文字ずつ程度で更新。性描写のあるR15指定箇所：第十四話・第二十四話。

<百度恋愛>……第一話

まるで工場のようなと思う。刑務所のようなでさえある。

毎日が同じことの繰り返しで、進展がない。あるように見せかけているだけだ。実際のところ、僕はこの学校に100年間在籍している。100年2組、ミナミ・スグル。出席番号9番。身長170.5センチ、体重54キロ、視力右目1.0、左目0.7。前学期の成績、おおむね良好。ただ繰り返しされるだけだ。試験と身体検査と授業とマスターベーション……。僕は時空のひずみに巻き込まれてしまったのだ。迷路の出口は、また別の迷路の入り口にすぎない。正真正銘、100パーセントの恋愛でもない限りはそこから抜け出すことはできない。

今そう決めた。僕は恋をする。もちろん作られたものじゃない、本物の恋を。

「うるさいよ。なにぶつぶつ言ってるの？」

目を開けると、そこにはふたたびコンクリートの牢獄が姿を現す。前の席に座るアキタ力は背もたれに肘を置き、こちらに怪訝な顔を向けていた。

ときどきアキタ力の顔を見ると、損な奴だなと思うことがある。男らしいさっぱりした性格をしているのに、顔が女の子っぽいという理由で上級生にあしらわれまくっているのだ。下級生にはムカつくほど人気があるけど。

「落ち込んでるのに気づかってくれないから、実際に悩みを口に出してみた」

「あっそう。じゃあ次からは頭の中で唱えてくれないかな」

「そしたら誰も気づいてくれないじゃん」

アキタ力はため息をひとつ、世界史の教師が黒板に文字を書き連ねているのを確認してから、僕の方に身を乗り出す。

「で、なにを悩んでるって？」

アキタ力は頬杖をつき、口元を緩める。基本的には他人の世話をやくのが好きなやつなのだ。

「学校がつまらない。もう死にそう」

「おれもだよ。みんなそうたる。でもどうしようもないじゃん」

「どうして？」

「バツカ」

アキタ力はそう言うてから、自分の声が大きすぎたことに気づき、また黒板の方をちらりと確認した。しかし目を向けたのは隣の女子だけで、先生がこちらに注意を向けた様子はない。アキタ力は声を落とした。

「ここで学校辞めてみるよ。今の世の中、高校中退者なんか悲惨なもんだぞ。たかだか学校を辞めたっただけで、前科者みたいな見方までされる。就職どうすんだよ。まともなところは中退者なんかとらないぞ」

誰も彼もが就職という句を出す。なんて夢がないんだろう。

どうやらアキタ力は勘違いを起こしているらしいので、訂正してやることにした。

「別に学校を辞めたいって言ってるわけじゃないよ。ただ学校がつまらないって言うてんの」

「だからおれは我慢しろって言うてんの。そうするしかないって。

もしくは……」

「もしくは？」

「もしくは自分でもおもしろくする。って言うても、そんなうまくはいかねえけどな」

首を振り振り、アキタカはまた元のように前を向いた。おもしろくしようとして失敗した経験でもあるのだろっ。やっぱり恋でもして。

ここは千葉県立川原石高等学校。大抵の人間は「カワラ」とか「カワ高」なんて呼び方をする。最寄り駅から学校までの馬鹿げた距離なんかは、どこかの人気ライトノベル誌とそっくりだが、ここには宇宙人も未来人も超能力者もいそうにない。あるのは県大会に進めれば万々歳といういくつかの運動部と、パツとしない連中のそろった文化部。制服はこのご時勢に学ランだし、当然女子の着ている紺色の制服も言うことなく地味だ。生徒の数は大体ひと学年に160人というところか。

そりやもちろん、入学した当初はこんな冴えない学校でも希望を感じたものだ。高校生になったという自覚、これからは学園ドラマのような日々が自分を待ち受けているのだとひそかに心躍らせたあのころ。だが待っていたのはなんだろう？ ひたすら繰り返される毎日、男は部活中毒者がぐうたらかヤンキーくずれ、女共は船橋北高校の連中にしか興味を示さないし、携帯電話を持ち始めてから一年、未だに番号登録者数は20を越えていない。発信履歴と着信履

歴の半数が母親と姉というのは健全な十六歳の少年にとってはけっこう気の滅入るものだ。

『ショーシャンクの空に』という映画を観たことがあるだろうか。そこに登場する人物たちの多くは終身刑を食らったならず者たちなのだが、やがて刑務所で過ごす年数が長くなると、いわゆる施設慣れをしてしまう。あまりに長くいすぎたために、刑務所が我が家になってしまふというものだ。

例えばモーガン・フリーマン扮するレッドはこう言った。

「終身刑はまさに身の終わりだ。人間を駄目にしちまう」

まさしくそのとおりだろう。そして学校というものも、果たしてそれに近いものを持っている。七歳の子供がこれからの10年15年を考えるとしよう。つまりは小中高、それを越えての大学生活。それは永遠に近いものではないだろうか。どんなに強い志を胸に抱いていようと、途中で棄権しようと考えなかった者があるとするれば、それはさすがに嘘というものだ。アメリカの哀しき文豪、スコット・フィッツジェラルドの言葉を借りるとするなら、「追い求める者と、追い求められる者がいるだけだ。休む暇もない者と、飽いた者がいるだけだ」 要するに、この僕もなにかを始めなくちゃならないのだろう……。

「そんなに言うならなにか始めてみればいいじゃん」

下校の時刻、仰々しい筆体で「千葉県立川原石高等学校」と書かれた門柱の下に座り込みながら、また女子のスカートにちらちらと視線を送りながら、気のない感じでアキタ力はそう言った。

「例えばなにを？」

「部活とか」

「嫌だよ。めんどくさい」

部活に入っている連中が口をそろえていうことに我慢ならないものがひとつある。『就職に有利だから』。そんなものを聞くと僕はめっきりへこんでしまう。これから何十年とんざりする未来が待ち受けているのに、その半分の半分しか生きていないうちにどうして未来を決断しなくてはならないのか。

「ちつ、見えたと思ったら中に短パンはいてやがった」

アキタカはそう言うとのろくさ立ち上がり、体を伸ばして睫毛の長い怠惰な目をこちらに向けた。

「もう帰ろうぜ。なんかダレちゃった」

「目当ての日下部先輩はもういいの？」

「いいよ。どうせ見込みないんだもん」

「どうして？」

「バスケ部の三年とイイカンジなんだってさ。どうでもいいよ、もう」

しかしアキタカがどうでもいいと思っていないことはその後姿からにじみ出ていた。僕が首を振り、通学路に二人そろって歩き出すとしたそのとき、二人の女子が横合いから足並みを揃えて僕らの前に立ちはだかった。下級生だ。ひとりは純潔そのものといった感じの見目麗しい一年生で、もうひとりは異様に化粧が下手。まるで古代エジプト人の壁画から抜け出てきたみたいだ。僕は思わず半笑いになってしまった。

「なに？」

アキタカの冷やかな声が心に刺さる。こいつ、本当に下級生には冷たい。

「……あの、番号教えてもらえませんか」

もじもじしながら、純潔ガールがアキタカに言った。そのとき僕もクレオパトラと目が合った。意味のない笑いがお互いの顔に浮かぶ。おいおい、せめてもう少し人通りの少ないところでやってくれよ。

「番号？」

「ケータイの番号を……」

しまいまで言え、しまいまで。アキタカも用件はわかっているはずなのに、そこまで誘導してやらないからひどい。ドSだな。僕的に純潔少女は申し分のないルックスなのだが、こちらは僕という物体そのものが目に入らないらしい。

「ケータイの番号を、なに？」

「あの、ケータイの番号を……」

「だから番号をなに？」

このままじゃ泣き出してしまふんじゃないか？ そう思って、僕が一步あゆみ出た。

「ケータイの番号を教えてもらいたんだよ」

そんなことわかってる、という感じの目だった。三人とも。

「悪いけど、ケータイ持ってないから」

「え？」

思わず声が出てしまった。あんたケータイ持つとるでしようが。

それどころか上級生の番号を訊きまくってるでしようが。しかしそうとは言えず、アキタカの鋭い目がこちらに語りかける。おまえはなにも言うな、と。

「そうですか……」

二人が落胆している様子を見て、氷の心も少しは哀れみを感じたのか、しばらくして「そのかわり……」と切り出す。

「こいつの番号教えるよ。なにか用があるんだったら、こいつに言っ
つて」

「ええ？」

親指で軽く人を指差すな。下級生の前でこいつ呼ばわりするな。

僕は「ちよつとごめん」と下級生二人に断ってアキタカを少し離れた場所まで誘導した。

「なんでおれが番号交換しなくちゃいけないんだよ」

「え？ 別にいいじゃん」

よくねーよ。

「よくねーよ。阿呆か」

「だってさっき言ってただろうが。恋したいって」

顔が真っ赤になる。やっぱり聞いてたんじゃないか。そういうこ

とはあまり公然と言い放ってほしくないのだが。

ここは思い切ってしっかりと説明しておいた方が後のためにも得策だろう。

「おれが言ってるのはちゃんとした恋愛なの。村上春樹の書いた『ノルウェイの森』じゃないけど、100パーセントの恋愛がしたいんだよ。沸点に達するくらいの。……適当な子を選んで付き合うなんて、おれにはできん」

「おまえがなにを言ってるのかさっぱりわからんが」

「うまく言えないけど、とにかくこんな風には ああ、もういいよ。諦めた。わかったよ。でもケータイがないことなんてそのうちバレルぞ」

「別にいいよ、バレたって。誰が困るわけじゃなし」

気まずさとは常人の神経に生まれるものであって、こいつには縁のないものらしい。味方でよかった、というのは変な話だが、どうして下級生はこんな男に惚れるのだろう。あとあと苦労するだけなのに。

そんなわけで僕は下級生二人と電話番号、メール・アドレスまでを交換し、ときどきやけにテンションの高いメールが自分宛でなく届くという、まったくもって迷惑極まりない役目を担うことになった。まあほとんどの返信は僕がアキタカのふりをして送ったのだが、さすがに心が痛む。

「ハートマークは付けるなよ。勘違いされるから」

「はいはい、わかってますよ」

しかしこの僕に任せるとは愚かな男だ。二週間後には下級生全員と付き合っていることにしてやろう。

< サブタイトル：百度恋愛 > 第一話（後書き）

サブタイトルの「百度恋愛」というのは本作のタイトルとどちらにしようか迷ったものでした。

でもやっぱりこっちの方が合ってますよね。ゲームとかぶっちゃいましたけど。

<百度恋愛>……第二話

私立船橋北高等学校、通称「フナキタ」はスポーツの名門校である。日本有数の名門校だといっても差し支えないはずだ。生徒の九割五分までがなにかしらの運動部に属し、そのうちの半数がいくらかの学費免除、そして一握りがなにかにまでを免除される上、授業中は教科書の代わりにキャッチボールに筋トレと、まさにスポーツづくめの学校である。一部の生徒は入学と共に顔パスで大学まで進むことができ、あくまで噂ではあるが裏金すら支払われているというから驚きだ。

実情を知らない人間が想像するところでは、体育会系らしい規律ある私立校だと思うだろう。しかし実際のところ、生徒はやりたい放題だ。中でもひどいのはやはり特待生で、年がら年中制服のまま街をぶらぶらしている。なにせフナキタの制服を着ているだけで女が寄ってくるからすごい。カバンから練習着でもちらつかせておけばなおよしというところか。連中は授業に出なくとも出席したことになっているし、教師も学校の宝とあって手が出せない。多少の不祥事はブランドを守るためにもみ消される。

そんなわけで、フナキタでの学園生活は天国とも言える……あくまで僕の想像だが。

休み時間に女子の輪に近づいてみればわかることだが、「フナキタ」というフレーズが出てこないことはまずない。優子がこの前フナキタのサッカー部と……私も昨日野球部の竹下くんからメール入って……。こんな話を毎日のように聞かされてみて欲しい。それだけでカワ高の男子は自信を失ってしまうというものだ。

さつきから三年生が歩いていないかと渡り廊下を見下ろしているこの男を除いては、ということだが。

「よくもまあそんなに集中できるもんだね」

僕の声にはつと我に返り、アキタ力は少しだけ顔を赤らめる。

「別に……いいだろ」

「どうしてそんなに年上がいいかね。あんなにかわいい下級生がたくさんいるというのに。……もしかしてマザコン？」

「ふざける。おまえは大人の女の良さがわかってないんだよ」

もちろん、本当の大人からすれば、十七・八なんていうのは小娘だろう。しかし年下からすれば全て大人の女だからおそろしい。

「大人の女ねえ……」

気の滅入る校舎も、昼下がりはやはり気持ちのいいものだ。誰か気の利いた生徒が廊下の窓を全て開け放したのか、そこから抜けてくる春の風、新緑の匂いが校舎に満ちている。たらふく弁当を食べたあとということもあって、どこか生徒たちの目はうつとりとするようだ。隣の男はまた別のうつとりとした表情を浮かべているわけだが、それはそれとして。

「あ、西田さんだ」

アキタ力がつぶやいたので僕も渡り廊下を見下ろしてみた。そこには背の高い、髪を後ろでくくった上級生の姿がある。掲示板の前に立ち止まり、なにかを確認しているようだ。胸の大きさがここか

ら見ていても目立つ。

「おっばい先輩だな」

「黙れ。卑猥だ」

「語呂がいいと思ったんだよ。っておい」

呼び声とどかず、アキタ力は早足で階段の方へ歩いていった。しばらくすると渡り廊下に見たことのある影が登場する。やれやれまったく。

話している内容がわからずとも、はつきりとわかることが時にある。アキタカと西田さんとの会話がまさにそれだった。始めの二三言は双方とも明るく言葉を交し合っていたのだが、すぐに気詰まりになり、これという話題も見つからず不恰好に沈黙する。アキタ力はどう見ても受け身な人間だ。そんな男が経験値もないのに相手を自分の世界に導こうとして、成功するわけがない。相手がよほどの熟練した攻め手でもない限りは。ひょっとしてアキタ力が年上を求めるのも、そういったものが理由なのかもしれない。

漫画のように肩を落として彼は帰ってきた。心なしか顔が赤白い。僕は吹き出しそうになるのを必死でこらえながら、アキタ力の肩に手を置いた。

「もっと経験値をつむんだな、頑張れ若造」

「……うるせえ」

声が小さい。なんにもそこまで落ち込むことはないんじゃないか？

「帰りにチーズバーガーおごってやるよ。玉砕記念に」

「別に玉碎してねえよ。今日は先客があるんだって」

「先客？」

「フナキタのバスケット部と合コンだよ。……西田さんはもつと清い人だと思ってたのに」

なるほど。それでこの落ち込みようというわけか。

僕は咳払いをひとつ、言いたいことを頭の中で簡潔にまとめる。

「この世に絶対のルールが二つある。第一に、フナキタの制服を着てればブサイクでもてる。第二にそんなフナキタとは女を争うなかれ」

「あいつら最低だ。どうせセックスがしたいだけなんだろう」

ブブツ。まるで男にさんざん弄ばれた女の最後の捨て台詞のようだ。

「まあまあ。ほら日下部先輩がいるぞ」

僕の声にはつとしてアキタ力は窓の外をのぞき見た。すると見目麗しい日下部京子の肢体がそこにはある。まさにパーフェクトだ。背中まで伸ばした茶色がかった艶のある髪、くつきりとした目鼻立ちにくわえ、絹のように白い肌。手足は長く細い。彼女の存在があるだけで、午後の校舎が狂おしく活気づく。これほどまでに太陽の似合う女性を、僕もアキタ力も見たことがないだろう。そこには畏怖の念すら覚える。

あれほどまでに手当たり次第上級生に声をかけているアキタ力が、日下部先輩にだけはなかなか声をかけられないのもそのせいだ。大抵の男は尻込みしてしまう。悔しいことだが、彼女にはフナキタの

特待生なんかがよく似合う。本当に悔しいことだけだ。

「……あまりに美しすぎる」

感情がこもりすぎていて気色悪い。僕は奴と日下部京子のあいだに窓というフィルターを通すが、それも効果はないようだ。授業が始まると言っても聞く耳を持たない。こんな奴は放っておいて、先に教室に帰るとしよう。

担任の東野教諭はとかく人の良いことで知られている。そのせいか生徒にはなめられっぱなしだ。教師で人が良いというのは決して得なことではない。相手は簡単に言って子供だ。なにがあってもなめられるようなことがあってはならないのだ。

そんなわけで、帰りのホームルームともなると、お喋りからお菓子、果ては断りもなく電話をし出すものまでいる始末。東野教諭はそれをなんとかまとめようと一応の努力はするのだが、ひとり虚しく笑ってなにごとかをつぶやき、事務的にホームルームを終わらすのが常だ。今日もまったくそのとおりで、帰りの挨拶を終えたあとの後姿が寂しい。

「さーて、帰ろうぜ」

僕が立ち上がりかけると、アキタカは叩きつけるようにノートを机の上に置いた。

「待った。これ提出してから行こうぜ」

「そんなものひとりで行きなさい」

僕がそう言うと、アキタ力は含み笑いを浮かべた。意味ありげにこちらを見つめる。

「ふうん。いいのかな、そんなこと言つて」

「は？」

「物理の恵子先生に会えるチャンスだぞ」

南恵子先生。僕と同じ名字である彼女は僕の血縁でもなんでもないのだが、まだ若く綺麗であることで知られている。絶世の美女というわけではないのだが、身を包む見えない余裕が生徒たちに好かれている。さる男子が猛烈果敢にアタックしたことがあるのだが、それを簡単にいなしたというから凄い。とにかく一枚上手なのだ。

そんなわけで僕としても恵子先生とのお喋りは嫌いではなかったので、アキタ力の用事に付き合つてやることにした。職員室に顔を出すとまだ先生は物理室にいると言われたので、僕らはコンコンとノックをして物理室の中に入った。

背もたれのない椅子がまっすぐ縦に伸び、教壇の上からかすかに恵子先生の白衣がのぞいている。白衣姿がそそられるというのは意外にもけっこうあることで、この僕もその例外ではない。恵子先生は「あら」と一声、立ち上がつてこちらに微笑みかける。髪をかきあげる仕草がなんとも言えずぐつとくる。

「先生、これ提出しに来ました」

なんとという猫なで声か。アキタ力は年上を前にするとM体質に変わってしまうのだ。

「はい、ご苦労様。南くんはもう提出したのね」

「しました」

「二人とも去年は単位ぎりぎりだったから、今年はいまのうちにちゃんとやっておきなさい」

「了解です」

僕はそう答え、じゃあと立ち去ろうとするが、隣の男がこれしきの会話で満足するはずはない。

「ねえ、先生。今度おうちに遊び行ってもいいでしょ?」

「ダメ。先生のおうち散らかってるから」

「そんなの気にしないっすよ。なんなら片付けますし」

手の平をはらはらと振りながら先生は取り合わずに笑う。その笑いがまた素敵なのだ。

「なにがでてくるかわからないの。ひょっとすると男の人が出てくるかも」

恵子先生の心弾む笑い声とアキタカの落胆する声。よくうちの姉はアキタカがどこまで本気なのかかわからないと言っていたが、今ならはっきりと言える。この男は常に本気なのだ。

「えー、先生彼氏いないって言ってたじゃないっすかー」

「あら、そんなこと言った?」

「ひどいよう」

「南くんならうちに呼んでもいいかな。変なこと考えなさそうだから」

人を引き合いに出さないでいただきたい。アキタカは笑って僕を

指差した。

「先生やめた方がいいよ。こいつドスケベだから」

「やめい。おれは健全なだけだ」

「南くんは否定しないところがいいね。高校生はエロでけっこう」

恵子先生は生徒に好かれるのは、やはり率直に意見を述べることだろう。生徒とのあいだに壁がないのだ。

そんな風に充実した午後のひとときを送れたのはある意味でアキタ力のおかげだったので、僕は帰りにチーズバーガーをおごってやった。駅前のマクドナルドは下校時になると大体カワ高の生徒で賑わっている。

そのときちょうど携帯電話にメールが送られてきた。開いて見るまでもなく、それは下級生からのものだった。僕はメールを読み上げる。

「五月二日にみんなでカラオケに行くんですが、佐野くんも誘ってくれませんか、だと」

「あっそう」

いやいや、あっそうじゃなくて。

「どうすんだよ」

「好きにすれば」

「はい？　誘われてんのはおれじゃなくておまえだぞ。アキ」

アキタ力は不機嫌そうに眉根を寄せ、僕の携帯電話を覗き込む。

「なんでだよ。佐野くんも、って書いてあるんだろ？ ほら」

アキタカが文章を指差す。本当だ。自分で読み上げていて気づかなかった。

「つまりは南も誘われてるってことだ」

「どうしておれもなんだ？」

「同情だろ。じゃなきゃおまえみたいな冴えない奴を誘わないだろ」

「殴っていいか？」

「殴り返していいなら。まあ良かったじゃん。童貞捨てられるかもよ」

あやうくコーラを吹き出しそうになる。あまりに話が突飛だ。

「どうしてそんなことになるんだよ。段階超えすぎだろ」

「いや、そんなもんだよ。おれの初体験もそうだったし」

耳を疑った。意識が遠のき、これまでのアキタカと交わした言葉をぐるりと一周して、またマクドナルドの店内に僕が戻ってきた。

「……お、おまえセックスしたことあんの？」

「あるよ」

「なんで言わなかったんだよ」

「別に言う必要ないだろ」

なんとなく冷たい男か。未経験の男性にとってはセックスとはある意味で神聖ですらあるというのに。

「誰と？」

「三年の石倉さん」

知らない女子の名前が出てきた。この男はどこまでテリトリーを広げているんだ？

「一回だけ？」

「いや、毎週土曜日。彼女んちで」

呆れたというかなんというか。神様がこの場にいたら僕はこの男に裁きを与えてくれと懇願したことだろう。僕は穴のあくほどアキタカの顔を見つめたが、このときほどこいつがわからなかったことはない。表面上は屈託なさそうなかわいい顔をしているのだが。打ち明け話が人目を憚るものでありながら、この男の落ち着きようはなんなのだろう。まるで、ただ毎週いとこのうちに遊びに行ってるだけなんだと言わんばかりなのだ。

「それって、付き合ってたのか？」

「さあ。でも人には言うなって口止めしてはおいた」

それはそうだろう。そんなことがバレれば、上級生のいる三階も下級生のいる一階も大騒ぎだ。まさに下は洪水、上は火事といったところか。

僕は咳払いをひとつ、脱線した話をなんとか元に戻すことにした。

「まあ、それはわかった。納得はできんが。それで下級生のところには行くのか？」

「行ってもいいかな」

「よろしい。これでおれが気まずい思いをすることもない」

僕はそう言って、コーラを吸い上げながらアキタカの表情をちら

りと確認する。

正直なところ、下級生にちやほやされるかもしれないという、その可能性があるだけでも、僕としては悪くない誘いだった。もちろんそんなことを口にすればからかわれるだけなので伏せておいたが、おそらくアキタカもわかっていたのではなからうか。奴の悪魔的笑みはまさにそれを物語っていたわけだろうし。

<t・百度恋愛> ; 第三話

僕には歳の二つ離れた姉がいる。

学園ドラマ、またはその手の漫画や小説に登場する姉というのは大体おてんばか心優しい人物というものだが、僕の姉はそのどちらにも当てはまらない。一口に言ってしまうえば、あまり外に自慢できるほどの姉ではないということだ。

姉の朝子は子供のころから室内で読書ばかりにふけり、スポーツといえば中学でバドミントンを数ヶ月ばかりやったというくらいのも。いわゆるオタク体質の女だ。今は脚本家を目指し、その手の専門学校に通っているという話だが、そのわりには年がら年中うちにいる。母も手を焼いたのか、最近はずっと小言も言わなくなった。

まあそんな姉ではあるものの、少なからず僕に良い影響を与えてくれた。ひとつに読書であり、二つに二千冊はある書架に収まりきれない本たちだ。僕がまだ小さいころには朗読なんて気の利いたこともしてくれたが、物心つくころから姉とは必要以上の会話をしていない。ときどき用あってどちらかがどちらかの部屋に滞在することもあるが、話すことがなくなつて間が持たないという始末。

それが直接の原因というわけではないが、僕は高校入学とともに離れの部屋を与えてもらった。母屋の近くに建てられたアパートの一室である。祖父がバブル期に土地の値段が上がることに、入居者が増すことを見込んで建てたいわばプチバブルの塔。幼いころに遊んだ田畑は消えてしまったが、その代わりのびのび暮らせるワンルームが手に入ったというようなわけだ。

ここに彼女を呼ぶというのが、僕の高校生活最初の目標ではあったのだが、それは一年経ったいまでも果たせる見込みがない。だがそれ以外なら、というのが五月二日に望むことだ。……高校生はエロでけっこう。

「ケータイ見ながらニヤニヤしてると、気持ち悪い」

夕食のときである。僕はそれが自分に向けられたものと気づかずに携帯電話の画面を見つめ続けていたのだが、姉の視線を感じて顔を上げた。朝子は無感動に食事を口に運びながら、眼鏡の奥の冷たい瞳を、僕からテレビに移した。僕の指定席はいつもテレビが後ろにあるのでなにをやっているのか見ることはできないのだが、朝子の表情からすると面白くはなさそうだ。

顔が紅潮するのを感じながら、僕は携帯電話を折りたたんでポケットにしまう。なぜかはわからないのだが、朝子の態度にはいつもなにかしら抗えない力を感じてしまうのだ。

「なに見てたの？」

テレビに顔を向けたまま、朝子は言った。姉にはすっかりと母の性格がしみついてしまったのか、時おり見せる仕草が母親とダブる。

「別に。メール」

「誰からの？」

沈黙。この時点で僕がなにかを隠しているのはバレてしまっているのだからおそろしい。

「隠さないで言いなよ」

「関係ないでしょ、別に」

「姉として知っておきたいの。女の子でしょ、どうせ」

ギクリという擬音が出そうになる。ついには母までが参戦してきた。

「どんな子なの？」

「あんた付き合うのはいいけど、うちに連れ込むときはちゃんと言つてよ。あたし友達しょっちゅう部屋に来るんだから。隣がうるさかったら嫌だもん」

連れ込む、なんて言い方が悪い。かくいう姉も僕の部屋の隣に住んでいるのだ。例のアパートに。

「この家に連れ込まないだけましだろ」

「当たり前じゃない。おじいちゃんカンカンに怒るよ」

「ていうか」

「それでどんな子なの？」

と母は母で執拗に相手の風体を気に掛ける。

「ああ、もう。うつせえな。たしかにメールは女の子からだけど、別に付き合っていないし付き合う予定もないの。ただ今度遊ぶだけだよ」

「デート？」

「アキタカが誘ったんだよ。みんなで遊ぼうって」

なるほど、と言った感じの肯き方だ、二人とも。多少事実と異なってしまったがしょうがあるまい。説明するのが面倒すぎる。

「アキタカくん最近来ないけど、元気？」
「元気すぎるくらいね」

エビフライをぼりぼり齧りながら、朝子は「ふーん」と鼻をならす。うちの姉は決して綺麗ではないはずのだが、それでもアキタカは距離を縮めたがった。友人の姉にまで手を出すなんて分別のない奴だが、姉は姉で奴を気に入っているらしい。普段異性にそんな目で見られることが少ないからだろう。

来たる五月二日のために、やるべきことは二つあった。まず身なりを整えることだ。それから資金を調達すること。向こうに誘われたのだからおごる義理はないが、それでも建前というものがある。

ちようどいいことに、アキタカの方から休日の誘いがあった。母屋でテレビを観ていると姉が僕の名を呼んだ。二三分ふたりで話していたらしく、朝子の表情はやけに明るかった。

「おまえ電源切れてたぞ」

アキタカのこの豹変ぶりが凄い。さっきまでは猫なで声だったろうに。

「もう二百回は言ってるが、うちは電波が悪いんだよ」

「あさって暇？」

「なんで」

「遊びに行こうぜ。近くまで」

「いいよ」

「よし。じゃあ時間と場所をメールで送っとく」

がちゃん。実に簡潔な会話だ。あさっては土曜日。

あいにくの曇天がショッピング・モールから漏れる明かりを際立たせた。人々の半数は手に傘を持ち、この僕もシヨルダーバッグの中に折り畳み傘を持参している。アキタカは時間どおりに来なかった。やはりというべきか。三度電話をかけたところで、たったいま電車を下りたのだと聞かされた。

アキタカは特におしゃれでもない。制服の方が男前なくらいだ。見覚えのあるブラックジーンズに安くさいロゴの入ったTシャツ、上にはストライプのシャツを羽織っている。靴は通学用のローファ。頭には寝癖までついてる。少々いただけない格好だ。

「遅れた」

「ごめんがついてねえぞ。それよりおまえもう少しおしゃれ頑張ったら？」

僕がそう言うと、ニヒルに笑い、アキタカはヒップ・ポケットから財布を取り出した。

「今日は3万持ってきたからな。もうださいとは言わせねえ」

「おお！　なんかおごつてよ」

「嫌だ。おまえにおごる義理はない」

おいおい、あるはずだろうが。いつも人に面倒を押しつけやがって。

そんなわけで僕らは見るからに高そうな店なるべく避け、古着系もしくはサーフ系ショップで洋服を買い求めた。ショッピングと

いうのも性格があらわれるもので、妥協しがちなアキタカはいちいち試着しようとはせず、それどころか二三軒回っただけで疲れたとかなんとか言い出し始めた。奴が手に取るものも、はつきり言っただけでパツとしない感じのものばかり。僕のセンスが秀でていたとは口が裂けても言えないが、少なくともアキタカよりはましだろう。

「そんなＴシャツどこがいいの？」

心の底から出た言葉だ。アキタカは黄土色の無地のＴシャツを宙に掲げ、それを買おうかどうかと迷っていた。

「なんつーか、全体的にいいじゃん」

「嘘だろ？ ギャグで言ってるんじゃないか？」

「な、ちげえよ。普通にマジだし」

「そうか。じゃあ友達として言うけど、それすごいダサイ」

それを聞いたアキタカはムツとするが、彼にも自身のセンスには信頼がないらしく、しぶしぶとＴシャツを置いて他を回り始めた。やれやれ、仕方がないからいつしよに選んでやろう。僕としてはあんまり得はなさそうだが。

「3万のうちいくらまで使えんの？」

「2万くらいかな。なんで？」

「とりあえずさ、おまえそのジーンズだけは新しいの買った方がいいよ。今時そんなダボダボのジーンズなんて流行んねえから。ユニクロでもいいからもっと細いの買えよ」

「わかった」

「あとＴシャツ一枚か二枚だな。いや、ロンＴでもいいか」

なかなかどうして、こういうときには素直な奴である。いつもの

皮肉っぽい言葉もなりをひそめ、僕の言うとおりに動いている。静かにしていればいいとこのお坊ちゃんにも見えなくはない。いつもこうなら上級生にだって少しは見込みがあったらうに。

結局アキタカはタイトなジーンズとロングTシャツを一着ずつ、アディダスの靴を一足買って、それなりの格好に变身することができた。ショッピング・モールの男性トイレで着替えを済まし、買い物袋に元着ていた服を詰め込む。僕の方もシックな柄のカーディガンを一枚買い、ジャケットの代わりにそれを羽織った。

僕らは双方に満足した面持ちで駅まで歩いた。

「このあとどうするよ？」

「いま何時？」

「2時50分」

「エガちゃんタイムか。おれ4時になったら予定あるから、それまでゲーセンで麻雀でもしようぜ」

「4時からの用事って？」

「デート。今日は4時から優子と予定あんの」

「優子？ 誰だよ」

「この前言っただろ。石倉優子だよ。三年の」

僕は思い出して声を上げた。そういえば今日は土曜日だった。

「デートのあとは彼女んちに行くの？」

「当然」

僕は願った。どうせ雨が降るのなら、4時ちょうどに降り始めてください、と。

<t・百度恋愛>;……第四話

しかしながらそのあと雨は降らず、月曜日に学校で顔を合わすとアキタ力はめずらしく僕に感謝の念を表明した。土曜日に買った服が石倉優子に大うけだったらしい。

「手数料としてジューズ一本な」

「嫌だね。と言いたいけど、まあ今回はよしとしよう」

なぜおまえが偉そうなんだ。そんなことを思いながらも、ジューズ一本欲しいがために黙ってしまふ僕はやっぱりダメなのだろう。

ゴールデンウィーク前の月曜とあって、学校に来ていない連中もちらほらいた。そのせいか授業もどこか投げやりで、担任の東野もホームルームで無駄な努力はせず、義務を終えると教室の全員が蜘蛛の子ちらしたように帰って行った。この連休にかぎり、部活も休みという話だ。僕もさっさと教室を後にしたのだが、下駄箱の前でばったりと例の二人に出くわしてしまった。下級生だ。

「あ、南先輩」

涼しげなソプラノでそう名前を呼ばれた。下級生に先輩付けで呼ばれるというのは悪くない気分だ。

「これから帰るんですか？」

「そうだよ。二人も？」

二人は肯き、意味なく微笑みあう。ひとりの純潔少女は赤のヘアピンを無数に髪につけ、もうひとりのクレオパトラは髪を下ろして

いる。近くに立ってみると、純潔少女の背がずいぶん低いことがわかる。

「加奈子はテニス部なんですけど、今日はないからいつしよに帰るんです。……佐野先輩は今日はいっしょじゃないんですか？」

「ああ、アキタカは」

そこまで言いかけてまずいと思った。奴はいまごろ三年の石倉優子とお喋りしているころだろう。

「……アキタカは今日補習があるみたい」

「そうなんですか」

気落ちさせてしまったようだ。僕はあわてて話題を変えた。

「ねえ、ごめん。すごい今さただけど、まだ二人の名前知らないや」

「この子が池西加奈子で、私は相田夕美です」

ようやく名前が判明した。純潔少女が相田夕美で、クレオパトラが池西加奈子。

「いつもおれにメール送ってくるのが、夕美ちゃん？」

「あ、そうです」

「そっか。五月二日は二人で来るの？」

「あともうひとり……フナキタの子なんですけど」

同意を求めるように、夕美が加奈子の顔を見る。加奈子は肯いた。

「中学のころの友達なんですけど、ダメですか？」

ダメなものか。むしろチャンスが増える。

「いいよ。全然いい」

二人の顔が明るくなった。笑い声がもれる。

「じゃあ、さようなら。またメールしますね」

僕は手を挙げ、二人を見送った。思わず顔がほころぶ。アキタカめ、まったくもってうらやましい奴だ。あんな子に惚れられている上に、どうでもいいようにあしらうなんて。

「よう、待った？」

呪詛の言葉をつらつらと頭の中で並べているそのころ、諸悪の根源たる男が上機嫌に校門へとやってきた。もうほとんどの生徒は帰り、空の隅を夕暮れが侵し始めている。風にもいくらか冷気がまじってきた。

「待ったよ。死ぬほど待った」

「そうか。じゃ行こう」

「……ごめんとかないの？」

「ジューズおごっただろ。それでチャラにして」

断じてチャラではない。それにジューズで一時間半は割りに合わない。

カレンダーから四月が剥がされ、五月の人々の心は見るからに浮き立った。テレビはゴールデンウィーク用の特番を流し、行楽地

には大勢人が押しかけていた。景気良好、商売繁盛。連休の幾日かは日本中晴天という話だ。そんな中、南家は全員が家にとどまっているというからなんと目もやえない。

「うちは去年、秋の連休に伊豆へ行つたでしょ」

「ていうかあたし、別にどこも行きたくないし。うちでゆつくりしたい」

なんともはやインドアな一家である。大黒柱の父も家で寝ていられるならその方がいいと口を添える始末だ。

そんなわけで、連休の初日は家から一步も出ることなく一日を終えてしまった。いつか読むだろうと後回しにしていたJ・D・サリンジャーの短編集を流し読みし、夕方からはパソコンの前に座り続けた。姉と壁を一枚へだててネットの麻雀にまで興じた。虚しくなるところまではいかなかったにせよ、なんとも気の滅入る一日だったことは言うまでもない。

「明日の予定なんですけど、夕方くらいからでもいいですか？」

夕美からそんなメールが入ってきたのは午前零時前。むしように眠かった僕は黙殺してしまおうとも思ったが、体を起こして携帯電話をいじった。しかし口頭の方が明らかに楽だったので、思い切って電話をかけてみた。

「……はい、もしもし」

消えてしまいそうな小さな声だ。親が厳しいのかもしれない。

「こんな時間にごめん。でもこっちの方が早く済むと思ったから」

「あ、はい。いいですよ」

「明日って何時にどこに行けばいいの？」

「え、あの……先輩の都合いい時間なら、いつでも」

「おれたち別にいつでもいいよ」

電話の向こうで夕美が微笑んだのがわかる。極力相手に合わせようという心がけがなんともいい。

「じゃあ明日の夕方五時に、学校近くのシダでいいですか？」

「シダックスね。わかった。ホントこんな時間にごめん。じゃあ」

「あ、ちょっと」

僕が電話を切ろうとすると、夕美の声が止めた。

「え、なに？」

「あの、あの、南先輩は、好きな人とか、付き合ってる人とかって
いるんですか？」

「特にいないけど」

「……そうですか」

電話の向こうでまた微笑むような沈黙があった。なんともいえない
桃色の雰囲気、甲斐性のない僕はしょうこりもなく胸に浮かべ
てしまったのだが、今回ばかりは間違いでなかったらしい。そのあ
と夕美はこう続けた。

「明日はフナキタの子が来るんですけど、その子も彼氏いないんで、
もし先輩が気に入れば付き合ってあげてくれませんか？」

敬語のわりに、なんとも単刀直入に來た。おかげで僕の方がしど

るもどろになつてしまつた。

「あ、すいません。なんか」

そんな風になんとなくの雰囲気ですらられても困る。

「とにかく会つてみなくちゃわかんないな」

「ですよ。それじゃ、明日」

「うん。またね」

僕は電話を切つてからアキタカの顔を思い出した。あいつが僕のことを知ったら、まず鼻で笑うだろう。おまえの言う本物の恋なんて、どうせそんなものさ、と。……ええ、どうせそんなもんですとも。

どれほど待ちわびただろう五月二日。晩春の空は見事なまでに晴れ渡り、遠く彼方に見えるは飛行機雲。人々はつかのま苛立たい俗世間からはなれ、またそれでも物足りぬ人はあえて繁華街の奥へともぐりこんでいく。健全で童貞な十六歳にとって五月とは晴れやかでありながら同時に物憂い。短い春休みが終わり、次の長期休暇までは永遠にも等しい道のりが立ちはだかっている。そのあいだにもつけられたこの短い休暇を有意義に過ごさずしてなるものか。五月病の新人社員も人員整理を受けた中年労働者も、この日だけは長くつらい道のりを忘れることができる。

そんな中、五月病とは縁のない男が、なんの悩みもなさそうな顔でてくてくとこちらに歩み寄ってくる。やれやれせっかくの休日にといいった表情。ぽりぽりと齧っていたうまい棒の最後のひとかけらを公園のハトに投げやると、いくぶん満足した顔つきで僕に話しか

けた。

「いい天気だな。帰っていいか？」

「言葉が矛盾してるぞ。天気が良けりゃ子供は遊ぶもんだ」

「まあおまえよりは大人だけだな」

言い返せないから悔しい。童貞とおさらばできない気持ちがいっ
つにわかってたまるか。

「今日こそ自分のケータイの番号教えるよ。おれはもう疲れた」

「気が向いたら。そんで待ち合わせは何時なの？」

「五時」

「それまでやることねえじゃん」

「ああ、ないな」

僕はてっきりアキタ力が時間の約束を破るものと見て、二時間早く集合をかけておいたのだ。どうしてこんなときにだけ時間どおり来るのだろうか。まったくもってあまのじゃくな男である。

アキタ力は皮肉っぱいため息について噴水のわきに腰を下ろし、気持ち良さそうに体を伸ばした。僕も五月の陽気にやられて、その隣に腰を下ろした。とろんとした目で、アキタ力がこちらを見る。

「どうする？ 恵子先生の家でも覗きに行くか」

「それはどう考えても犯罪に思えるが」

「馬鹿め。女性の体に興味を覚えるのはしごく健全なことだ。馬鹿め」

「なにを覗こうとしてるんだ、なにを。それに馬鹿を二度も言うな。恵子先生の赤裸々な姿を覗き見しようとするおまえの方が馬鹿だ。あの人はちよつと遠くで見てるからいいんだよ。日下部先輩と同じ

ように」

アキタ力は少し驚いたような顔で僕を見た。あれ、こいつこんな顔だったつけ、とても言うように。

「……それはまあたしかにそうだな。おまえも少しはわかってきたか」

「そこで父親面するおまえがわからん」

「あれ本当かな。恵子先生に彼氏いるってやつ」

「本人は否定も肯定もしてなかったな。……いや、肯定してたのかな、ある意味あれは」

ハア、と深いため息をついてアキタ力は両手にあごを載せ、ぼんやりと公園で遊ぶ子供たちを見つめた。ためしに顔の前で手を振ってみるが、なんの反応もない。

「恵子先生ってさあ、なんであんなにかわいいのかな……。おれ、実はいちばん好きかもしれないよ。先生のこと」

男の前で猫なで声を出すのはやめてほしい。気色悪いにもほどがある。

「大人だからそう見えるだけじゃねえの？」

「そうなのかなあ。一回でいいから恵子先生と」

「その先は言わんでもよろしい」

「なんだよ。童貞のひがみか？」

「阿呆が。もういちど言う。この阿呆が」

そんな風にして救いようのない十代の会話を繰り広げていたのだが、太陽も休暇を待ちわびたのか、そそくさと西の空に退場なされた。アキタカの重い腰をひっぱり上げ、待ち合わせのシダックスまでずるずると引きずっていく。

なんとか十分前には到着することができたのだが、下級生たちはすでに集合していた。その中に見えない顔がひとり。おそらくその少女が、例のフナキタの生徒であろう。

「お待たせ」

僕がそう言うと、「こんにちわー」と声をそろえる。アキタカは僕の後ろに立って、地面の小石を蹴飛ばしている。

「いつからいたの？」

「……ええと、いつだっけ？」

と三人が顔を向け合い、夕美が代表して答える。

「30分前くらいですかね」

「そんなに早く来たんだ。ごめん、待たせて」

夕美は首を振る。

「そんなそんな。今日はこちらが無理に誘ったんですし」

ね、という風に顔を向け、下級生たちはうんと肯く。同じ中学出

身とあって、特別仲がいいらしい。そのころアキタ力はひとり勝手に、店の中へ入ってしまった。

「あ、佐野先輩、行っちゃいましたね……」

「トイレに行きたいみたいだったから」

僕はそう説明した。やれやれ、うまく取り繕う方の身にもなってほしい。

夕美は初めて見る私服にも違和感がない。アキタ力の望むような大人の女性とは対比しているが、着ている服からも育ちの良さがうかがえる。反対に、クレオパトラこと池西加奈子はなんとも言えずひどい有様だ。黒いワンピースに、黒のタイツ。黒の髪どめに黒髪と黒ずくし。その姿は西洋人形のようにも見えたが、顔だけが日本人、というより古代エジプト人。いわゆるゴスロリ系なのだろうが、よくぞ正気でその格好ができるものだと、彼女の精神の強靱さには目を見張る他ない。

もうひとりの少女に、特別な目がいかなかったと言えは嘘になる。下級生に恋のフラグを立てられた僕ははじめなのだろうか？ 彼女はたしかに、夕美が薦めるとおりかわいかった。そしてそれ以上にぐつとくる説明しようのないなにかがあった。それとも恋に期待しすぎるあまり、色眼鏡で彼女を見てしまったているのだろうか？ きりとした顔立ちに反して服装はラフで、ちょっと見ると男の子のようでもある。髪は短い。

「はじめまして」

僕の方から彼女にそう声をかけてみた。が、無視された。

「ほら、ヒナ！」

「え、ああ……はじめ、まして？」

なぜ疑問形なんだ。そんなツツコミを思わず入れそうになったが、ここはあまり深入りしない方がいいだろう。

「ごめんなさい。この子シャイなんで」

夕美が必死で謝る様子が胸に痛い。ここは年上としてなんとかまとめなければ。

「いや、別にいいよ。アキタカも中入っちゃったし、おれらも行こうか」

一万と二千年前から愛してる。八千年すぎたところからもっと恋しくなった。

そんな歌がフロアに流れている。僕と下級生たちはフロントで受付をすまし、案内された部屋に向かった。それまで待合室の椅子に座っていたアキタカは、僕が手招きすると面倒くさそうに立ち上がって後をついてきた。

永遠にも等しい気まずいエレベーターの沈黙が過ぎ去ると、一団は部屋に入り、テーブルを囲んでぐるりと席に座った。誰も何も話そうとしないし、曲を入れようともしない。ただ夕美と加奈子がこそこそなにかを言い合っているだけだ。

「誰がいちばん最初に歌う？」

とにかくこの緊張感をなんとかしたかった。そんな思いから、僕がそう言い出した。

「あ、じゃあ先輩からお願いします」

「えっ、おれ？」

うんと肯く加奈子。調子こくなクレオパトラ。

「私も聴きたい。先輩お願いします」

夕美までがそんなことを言う。そんな無茶ぶりありかよ！ と思ったが、引くわけにもいかず、大慌てで曲を探し、震える声で歌を歌った。『世界でひとつだけの花』。ベタだ、ベタすぎる。曲が終わって拍手が鳴ると、僕は精も根も尽き果てて、椅子に腰を下ろした。歌っているときにちらちらと下級生たちの顔を確認したが、誰も聴いていやしなかった。

「相変わらず音痴だな」

「うるさい」

アキタカとそんないつもの会話をしていると、部屋のドアがコンコンとノックされ、お盆を持った店員が入ってきた。ジュースのような色合いをした飲み物がコップに注がれている。

「潤くんありがとう」

「いえいえ」

夕美は店員と顔見知りらしい。店員が飲み物を置いて去ってしまったと、こちらに顔を向けて説明を加えた。

「潤くんも中学のときの同級生なんですよ。だから今日は飲み放題なんで」

なるほど。便利なもんだ。

そんなことを思いながら「カンパニー」と5人がコップを鳴らして一口飲むと、驚かされた。こいつはジュースなんかじゃない。酒だ。

「……え、これお酒？」

夕美は肯き、てへへと笑う。

「なんか今日店長いないらしいんで。だからお酒飲んでも平気かなって」

そっという問題なのか。というより明らかに計画的犯行に思えるが。

酒の力とはまったくもって偉大である。あれほどまでに謙虚だった夕美が、いちばん先に豹変した。ひととおりみんなが歌い終えたころだろうか、突然席を立て僕とアキタカのあいだに割り込むと、首を振るアキタカに遠慮なく酒を飲ませ始めた。さすがのやつも虚をつかれたか、言いなりになって酒を飲んでいる。続いて加奈子までもが恋敵に敵意を燃やし始め、酒の力も相成ってアキタカの隣に腰を下ろした。

僕の座る席がない。いや、実際はヒナとかいう女の子の隣が空いていたのだが、無駄に酒の強い僕に、その勇気はまだ芽生えてなか

った。彼女は目の前の騒ぎとは一枚壁をへだてているのか、超然と
ウーロン茶みたいなものを飲んでいる。

「……座れば？」

「え？」

ヒナは腰をほんの少し、横にずらした。たぶん座れということな
んだろう。そしてなぜタメぐち？

僕は言われるがまま、ヒナの隣に腰を下ろした。

「それ、なに飲んでるの？」

「ウーロンハイ」

まるきりおっさんの飲み物ではないか。しかしそんなことは言え
ない。

「ねーねー、お酒が進んでないよう。佐野せんぱーい」

まるでキャバクラのようだ。そうは思ったが、アキタカの酔っ払
った姿というのはこれまでに見たことがなかったので、興味はあつ
た。僕としてはやつが真性のMに目覚めることを期待しているのだ
が、両隣に延々と話しかけられ、それどころではないらしい。

「もう飲めねえって。ちょっと、変なところ、おい」

「佐野先輩だーい好き」

「私もだーい好き」

「うおおおおー！」

両隣からのハグ攻め。難攻不落の城もひといきで吹き飛ばされて

しまう。夕美の唇はいまにもアキタカの首筋につきそうになっている。加奈子の方はというと、アキタカの手を握り、その感触に浸っているみたいに見えた。

咳払いをひとつ。向こうは向こう、こっちはこっち。

せめてそんな雰囲気を作ろうと、僕は懸命に努めた。近くで見るヒナの肌は透きとおるように白い。日下部先輩とは違う、洗練されていない初々しさがかいま見える。

「あのさ、君ヒナっていう名前なの？」

「雛子」

「ふうん……そっか。名字は？」

「白石」

会話の終わり。僕は先日西田さんと話していたアキタカを思い出した。

「フナキタに通ってるんでしょ？」

僕は懸命にそれだけの言葉を絞り出した。

「うん」

「運動部に入ってるの？」

「……愛好会」

「え？」

たしかに愛好会と聞こえた。しかしフナキタには運動と名のつく部なら、大抵はありそうなものだが。

「なんの愛好会なの？」

「乗馬」

「へえ……君って一行以上の言葉を言えない人？」

ヒナはむっとしたようだった。せめてもの冗談だったのだが、夕イミングを見誤ったらしい。

「そういう皮肉、つまんない」

これにはさすがの僕も頭にきた。夕美の話と全然違うじゃないか。いや、なにも彼女はそんな話をしていたわけではないのだろうが、それにしても。おそらくは友達思いの世話好きな夕美が、ヒナとかいうこの女にも彼氏を作ってあげたいと考えた。そんなところの話だったのだろう。

僕はがっかりするよりも、怒りを感じていた。なによりも仮そのめの恋に期待していた自分が恥ずかしい。

「佐野一等兵、只今帰還されます！」

ガタツと椅子から立ち上がり、耳が痛くなるほどの大声でアキタ力が怒鳴った。

「しかし蒙古軍は今も満州に攻め入ってるでおじやります！ 急ぎ殿のご決断を！」

とうとうバグった。目があさつての方角を向いている。言ってることもわけがわからない。なんの時代だ。

気づくと夕美は壁に背をあずけて眠ってしまっている。加奈子は

自分も佐野先輩についていくとかなんとかほざいている。もうそんなに時間が経ってしまったのだろうかと腕時計に目をやると、ゆうに三時間は過ぎている。僕も酔っているようだ。時間の感覚がない。

「もう9時だよ。帰ろう」

僕はあわてて立ち上がった。こんな時間まで女の子たちを連れまわしていたとあっては、どんな処罰が下されるかわからない。もちろん原因は女たちにあるのだが、そんなことを理解してくれるほど、世間は甘くない。

「殿！ まさか、まさか敵前逃亡するつもりでありますか！ そんなことをするくらいなら、自分は、自分は腹を切って自害する他ありませんぞ！」

ええい、面倒くさい。僕は夕美を起こして背中へのせ、部屋を飛び出た。いつの間に準備を済ませていたのか、ヒナもそのあとに続く。あの二人には朝までノモンハン攻略についてでも語らっただけもらおう。

僕はエレベーターの中で大きいため息をついた。どうしても最終的に面倒なことは僕の元に転がり込んでくるらしい。エレベーターを降りるとき、ヒナがつまずいたので、僕は思わず立ち止まった。

「ふらふらじゃないか。ひとりで帰れる？」

「……帰れる」

「おれはとりあえずこの子を送ってかなきゃいけないから」

少しだけ迷ったが、仕方ない。僕はヒナに自分の携帯電話の番号を覚えておくことにした。

「なにかあつたら、かけて」

彼女も彼女なりに無理をしていたのかもしれない。そんな風には見えなかったけど。

<百度恋愛>……第六話

それから大変だった。まず夕美の家の住所がわからない。学校に電話してみるという手もあったけれど、酒を飲んでいるだけにばつが悪い。ろれつが回るかどうかだって疑わしいものだ。とにかく母親に電話するしかなかった。叱られるのが面倒だが、このさいとやかく言ってもらえない。そのあと姉の協力もあり、なんとか彼女の家を見つけ出したころには夜10時を回っていた。

「うちの子が本っ当に、すみませんでした」

母子そろって頭を下げる。僕をちらりと見る朝子の目が怖い。

夕美の父親はいかにもエリートという感じの大柄な男で、歳は四十を少し過ぎたくらい。嚴重な物腰とは裏腹に、顔は笑みを浮かべていた。

「いえいえ、今日は遅くなるって言うてましたから、うちとしたらかまわないんですよ。こちらこそご迷惑をおかけしまして」

なるほど、と僕はひとり得心した。父親にも数多くタイプがあるが、この人は娘に弱いタイプだ。

しかしうちの両親が僕に対して甘いかと言えばそれはまた別の話で、くどくどと説教を聞かされた挙句に夕食は抜き、という散々な結果になった。厄介ごとを押しつけられた上にお叱りを受けるなんて、あまりにも救われない。朝子にまで「今度なんかおごつてよね」と言われる始末。

そういえばヒナはどうしただろう。そんな風に思っただけなく

携帯電話を開くと、着信が一件残っていた。知らない番号からだ。

「……もしもし」

今にも消え入りそうな声。ヒナに違いない。

「どうしたの？」

「なにかあったら、電話してって、言ったから」

「え、なにかあったの？」

無言。

「もしもし？」

「……泊まれる？」

「は？」

「今日だけ泊めて。おねがい」

あらかじめきちんと否定しておきたいのだが、僕が彼女の宿泊について了承したことに下心は関与していない。少なくともそのときには、ということだが。ヒナの声には切々たるものがあつた。その声を聴いたとき、僕には彼女の願いを別のなにかと秤にかけることができなかった。ヒナのそんな言葉を聞いただけで、心が痛んだほどだ。

「いいよ。場所はわかる？」

「わからない」

「だよ。じゃあ迎えに行くよ。どこにいるの？」

「木下公園」

「ひとり？」

「ひとり」

「そんなところにひとりでなにやってたの？」

「迎えに来て。待ってる」

唐突に電話が切れた。僕は急いでダウン・ジャケットを着込み、文字どおり外へ飛び出した。

その夜、木下公園までの道のりを自転車でひた走りながら、僕の中では困惑と焦り、それから少しだけやましい妄想が繰り広げられていた。夜11時の住宅街はしんとしていて、なんとも物悲しい。ときどき電柱の影から猫が飛び出してハツとする。急ブレーキをかけて公園の入り口に着くと、僕は周りを見渡した。誰かがいるような気配はない。水銀灯の白々しい光に、無人のベンチが浮かび上がっているだけだ。

かじかむ手で携帯電話を取り出す。ヒナに発信してみると、遊具用の土管の中で、なにかが光った。それに続く単調なメロディー。

僕は自転車を下りて土管に歩み寄った。中を覗くと、身を丸めるようにしてヒナが座っていた。心なしか震えているようだ。

「大丈夫？」

ヒナは小刻みに震えながら、僕の方に顔を向けた。恐怖が顔に張りついている。

「どうしたの？」

「……さっき、声かけられた」

「え？」

「知らないおじさんに」

なるほど。それでこんなところに隠れていたというわけか。

僕は彼女に手を差し伸べ、土管から引き上げた。そのいじらしさに、思わず抱きしめてやりたいという衝動に駆られたが、もちろんそんなことをするわけにはいかない。僕は手を離れた。

「どうしてこんな遅くにひとりでいたの？」

顔をそむけるヒナ。なにか話せぬ事情があるのだろう。

「ま、とにかくうちに行こう。話はそれから聞くよ」

帰るあいだ、ヒナは僕の自転車の後ろに乗り、ぴつたりと頬を背中につけていた。腰に両手が回されたとき、思わずぴくりと震えてしまったのはいうまでもない。しかし動揺を悟られなくなかったのだ。頭に血が上るのを感じながらも、急いでうちまで自転車を漕いだ。めくるめく異性の感触も、緊張でそれどころではない。

問題はこれからだ。僕は母屋とは反対の方向から自転車を持ち上げてアパートの敷地に入り、音を立てないよう気を配りながら階段を上った。母屋と離れているだけあって、両親はそれほど問題ではない。問題は朝子だ。

僕はそつと玄関のドアを開けた。

「いいよ、先に入って」

僕のささやきに肯くヒナ。しかし中に入ろうとしない。なんとなく

く気まずそうな横顔を見せる。

「……変なこと、しない？」

「ええ？」

「変なことしようとしたら、帰るから」

「しないよ」

「……ありがとう」

ありがとう、か。今のところ僕にとってこれほど残酷な言葉はないな。

僕は先にヒナだけを入れ、玄関のドアを閉めた。やましい妄想がひといきに音を立てて崩れ、大きなため息が出た。こうなったらなにも気後れすることはない。僕は朝子の部屋のチャイムを押し、全てを打ち明けることにした。

「なに？」

まるで勧誘セールスかなにかを迎えるような顔。風呂あがりの朝子はバスタオルをターバンのように頭にかぶり、充血した目で僕を睨んだ。

「なんなの？ 用があるんなら早くしてよ」

「実は、その、なんというか……女の子が」

「はあ？ 女の子がなに？ またなんかやったの？」

そもそも僕はなにもやってない。しかしそう言えばまた話がこじれる。

「今部屋に来てるんだ、女の子」

「え、あの夕美ちゃんていう子が？」

「いや、それとはまた別の子が」

「……別の子？」

なんと説明すればいいのだろう。僕にだってわけがわからないのに。

「とにかく今晚だけ泊まるから。いちおう朝子には言っておいた方がいいと思って」

朝子はなんとなく慌てたようだった。まさか自分の口にした台詞が、そっくりそのまま現実になるとは思わなかったのだろう。

「それはずいぶん殊勝な考えだけど……お母さんも知ってるの？」

「まさか」

「じゃあ黙ってる。その方がいいんでしょ？」

「うん。言わないで」

「わかった。今日はずっと起きてると思うから、なにかあったら言つて。あたしは部屋で静かにしてる。……あんだ、ゴムとかそのへん大丈夫？」

朝子の表情があまりに真剣だったので、笑ってごまかしてしまうこともできなかった。血の繋がった姉弟に避妊の心配をされるといふのは、なんとも極まりの悪い話である。僕は顔を赤らめながら真面目に答えた。

「大丈夫。っていうか、それはないと思うから」

「そう。下の人には迷惑かけないようにね。じゃあ、頑張って」

朝子が部屋に戻ったあと、僕は大きな試練に立ち向かうように、

自室のドアの前で深呼吸をした。とうとう念願になった、というよ
うな晴れ晴れとした事情ではないにしろ、高校生活のひとつの目標
である、『女の子を部屋に入れる』という願いはいちおう達成され
たわけだ。ヒナは変なことをしないで、と言った。でも頭の中に浮
かぶのはその手のことばかりである。

いやいや、ダメだ。煩惱を振り払え、南スグル。嫌われたらなに
もかもおしまいなんだぞ。

<百度恋愛>……第六話（後書き）

第一章＞百度恋愛くもあと少しで終わりです。
評価・感想、気長にお待ちしています。

<百度恋愛>;.....第七話

ときどきと心臓が高鳴るのを耳にしながら、部屋に入って錠を下ろした。色目の良いアデダスの小さいスニーカーがぽつねんと一足並べてある。ヒナはカウチの上に座っていた。両膝を腕で囲い、腕の中に顔をうずめている。僕は唾をぐくりと飲み下した。

「……寒いのか？」

ヒナはかすかに首を振った。

「なにか飲む？ コーヒーでも作ろうか？」

「いい」

「でも寒いんでしょう？ そこに毛布があるから」

「近寄らないで」

僕の足は二歩目を踏み出そうというときに止まった。彼女の鋭い声に、心が痛んだ。が、ここでしっかりと先ほどのことをよりはつきり否定しておいた方がいいのだろう。それで僕の望みも完全に消え去ってしまうわけだが、浅はかに欲を抱いて、一晩中じらされるよりはずっといい。

「ねえ、別に変なことしようとか考えてないよ。確かにそりゃ男だから、なんていうか、そういう欲はあるけど、でもちゃんと境界線を引くことはできるし、その……」

ダメだ。まるで説得力がない。

「いや、なんていうか、とにかく変なこととはしない！ だからもう

少し肩の力を抜いて……というかここはおれの部屋なわけだし、まあ汚いんだけど、リラックスして……」

途中から自分でもなにを言っているのかわからなくなった。ヒナは（僕の勘違いでなければ）小さく笑い、顔を上げた。

「コーヒーちょうだい」

「あ、うん」

僕は電熱式のケトルに水を入れ、カップを二杯分用意した。そのあいだヒナはテレビの電源を入れ、見るともなくブラウン管を見ていた。

「砂糖は？」

「いらない。……ミルク、ある？」

牛乳は切らしていた。その後、彼女がブラックでもかまわないと言ったので、僕らはカウチに並んで座り、色の濃いコーヒーを飲んだ。テレビから聞こえるどつという笑い声が、二人の沈黙をより克明に浮かび上がらせる。

僕はなぜヒナが家に帰らないのか知りたかった。でもどう切り出しているのかわからない。そんな中、彼女が口を開いた。

「……いつもブラックなの？」

「うん。おれブラックしか飲めない。こういうのっておかしいのかな？」

「別に。それより早く訊けば？」

「え？」

「どうして私がうちに帰らないのか、知りたいんでしょ？」

ヒナはこちらに顔を向けた。相手を小馬鹿にするような目の奥に見覚えのないかすかな怯えが映っている。ぼつてりとした唇はわずかに開かれ、それはそのうちから漏れる数少ない言葉が、今まさに語られようとしているのだということを示唆していた。

僕は肯いて、テレビのボリュームを抑えた。

「なにか深い事情があるみたいだけど……」

「別にそういうわけじゃない」

「じゃあなんだろう。親が厳しい、とか？」

「うち、お父さんもお母さんもない。今はお兄ちゃんと暮らしてる」

「そうなんだ。……その、ご両親は亡くなっちゃったの？」

ヒナはそれには答えなかった。

「じゃあ、お兄ちゃんが厳しいの？」

「少し」

「なら連絡だけしといた方がいいんじゃない？ 心配してるよ、きつと」

僕の言葉は彼女の気に召さなかったようだった。元のように両膝を腕で囲い、その中に顔をうずめてしまう。そのとき僕はあることに気がついた。もしかして自分が相手にしているのは、まだほんの子供なのかもしれない、と。

「じゃあおれが掛けるよ。それならいい？」

ヒナは首を振った。

「お兄ちゃんが怖いの？」

「……別に」

「そっか。寝る前にシャワーは浴びる？」

彼女は肯いた。

「じゃあ用意してくる。待ってて」

そう言い残して立ち上がり、部屋を出ようとするそのとき、ヒナがなにごとかをつぶやいた。

「……迷惑はかけないから」

「え？」

「君に迷惑はかけないから」

ヒナがシャワーを浴びているあいだ、僕は朝子の部屋のチャイムを鳴らし、どうにかしてヒナの家の電話番号を調べてくれと頼んだ。そのためには事情をすべて明かさなければならなかったのだが、このさい仕方あるまい。

「どうしてそんな子をうちに入れたの？」

「しょうがねえだろうがよ。この時間に女の子ひとりじゃ危ないし」

「もう。わかったから、ちょっと待ってて」

「早くしてよ。風呂から出たらまずいから」

「もう。わかった」

元フナキタ生の何人かに連絡が取れ、白石という名前を出したところ、その名前なら心あたりがある、と全員が口をそろえた。どう

やらヒナの兄貴は野球の特待生ということらしい。それも最上級にあたるSランクの。僕に任せるとなにか問題が起きるとでも思ったのか、朝子自ら白石邸に電話を掛けた。すぐ迎えに来るということだった。

「サンキュー。助かった」

「今度DSのソフト買ってよね」

これで今月いくらの出費だろう。どう考えても小づかいでは間に合わん。

そうつと部屋に戻ると、ちょうどヒナがシャワーを浴び終えたところだった。バスタオルで髪を吹くばさっという音が、風呂場から聞こえる。僕はそのまま何気なくカウチに座ろうとしたのだが、声がした。

「……どこに行ってたの？」

今さら隠しても仕方あるまい。僕は覚悟を決めた。

「今お兄さんが向かってるよ。すぐに来るって」

物音がぴたりと止んだ。続いてタオルが床に落ちる、ばさっという音。

「裏切り者」

「でも、こうしなきゃ君が怒られるよ。おれがなにかされる分には別にいいんだ。お兄さんにもおれが誘ったって説明するし」

乱暴に風呂場のドアが開いた。ヒナはしっかりと服を着て僕の前につつか歩み寄ると、きつい平手打ちをお見舞いした。目の覚めるようなビンタだ。僕は金魚のように口をぱくぱくさせた。

「なに格好つけてんの。格好悪い」

「いや、よかれと思って……っていうか、痛い」

パチン！ さらにもう一発。彼女の目には涙が浮かんでいた。

「初めて会った人に、そこまで心配されたくない！」

まさにそのとき、激しく階段を上る音が部屋にまで聞こえてきた。連続して鳴る、ノックとチャイム。ヒナの体は硬直し、その表情には怯えが張りついていった。僕はあわてて玄関の戸を開いた。

そこに立っていたのは、色の黒い、背の高いがっしりとした体躯の青年だった。ちよつと見ると格闘家のようにもある。彼は蟻でも見るように僕を見下ろすと、凄まじい形相で睨みつけた。

「おまえか、この野郎！」

なにが起こったのかわからなかった。僕は2メートル離れた壁に突き飛ばされ、次の瞬間にはその場にうずくまっていた。暴力と呼ぶよりは、衝撃と呼ぶにふさわしい。続いて薄い意識の中、ヒナの叫び声が聞こえた。

「こんな時間までなにやってるんだと思ったら……こいつ！ おれがどれだけ心配したかわかってんのか！ おい、雛子！」

「やめて、お兄ちゃん！ やめて！」

男には立ち上がらなければいけないときがある……そう言うのは簡単だ。もし相手が熊だったら大抵の人は死んだふりか逃げることを選択するだろう。もし相手がライオンでもやはり同じ選択をするのではなからうか？

けれど不運にも相手はそのどちらでもない。僕は壁に手をつけてふらふらと立ち上がった。

「やめろよ。このでくの坊」

ヒナの兄貴はぴたりと手を止めた。兄妹の目が僕に刺さる。

「なに？」

「おれが雛子を無理やり誘ったんだよ。少しは空気を読め、阿呆。うんこみてえな顔色しやがって。糞へボピッチャー。かかってこいよ」

僕は相手の豪腕にぴたりとカウンターを合わせ、見事にKOした。

……と、できることならそう言いたかったが、現実はそうではない。一瞬だけ視界に姿を現した巨大な拳。僕は部屋の端から端まで吹っ飛ばされ、見事に顎と鼻をつぶされた。体が粉々になるかと思った。人に聞いた話や、テレビで観るのはまるで違う。屈辱と圧倒的な恐怖が波のように押し寄せ、それまでの憎悪や反抗心なんてものはいともたやすく飲み込まれてしまった。

もしも僕ひとりだったなら、到底その一撃のあとで立ち上がることはしなかっただろう。気づくと僕は雄たけびを上げながら突進していた。

もみくちやになりながら、僕は必死に相手の腰にまわりついた。僕の頭をもぎ離そうと、ヒナの兄貴は凄まじい力で押したが、いかんせん力の入る体勢ではない。膝蹴りが顔の横をかすめたそのとき、ここぞとばかりに僕は相手を押し倒した。そのあとはもうわけがわからない。腕をめちゃくちゃに振り回した。

「あんたらなにやってんの！」

鶴の一声、朝子の声で目を覚ました。僕はヒナの兄貴の胸に顔をうずめていた。次の瞬間、強烈な膝が腹に入り、僕は床の上でもがき苦しんだ。

「今警察を呼んだから。あんた特待生なんですよ？ もうおしまいだね」

これは朝子に聞いた話になるが、ヒナの兄貴の顔はみるみる青くなっただけ。

「始めたのはそっちだろ！」

「なに言ってるの？ うちの弟はあんたの妹に頼まれて泊まらせてあげたんだよ。ガキのくせに親を気取ってんじゃないよ」

どうしたら朝子の口からこんな啖呵が飛び出すのだろう。まるで『極道の妻たち』からそっくり抜け出てきたかのようだ。

なにか言わなくてはと思ったそのとき、頬に柔らかい感触があることに気づいた。僕はヒナの太ももに頭を載せ、肩を抱かれていた。彼女の涙が、僕の鼻に落ちた。

「ごめん……お兄さんにバレちゃった。朝子の馬鹿のせいで」

ヒナは首を振った。女の子が泣いているのを見ると、心が痛んだ。

「出てって。妹さんが心配なら今日はあたしの部屋に泊めるから」

ヒナの兄貴は妹と朝子を交互に見た。それから黙って部屋をあとにした。

「なにかあったら、許さないからな」

「お好きにどうぞ。学校を辞めたいのであれば」

「なに？」

振り返るヒナの兄貴に、朝子は無情にドアを閉め、躊躇なく錠を下ろす。朝子は僕を見下ろす位置に立つと、突然しゃがんでデコピンを食らわせた。

「いってえ……」

「うるさい。この阿呆」

僕は床に肘をついて、体を起こした。体中ありとあらゆる場所が激しく痛む。

「本当に警察呼んだの？」

「まさか。嘘に決まってるでしょ」

僕はほつと胸を撫で下ろした。もしも警察を呼ばれたとなれば、兄貴の暴力を誘発した僕にだって責任はある。これ以上ヒナを自分のせいで悲しませたくはなかった。

朝子はややあってヒナを見据えた。

「あなた、名前は？」

「……白石雛子」

「こっち来て」

朝子はヒナの手を引き、部屋から連れ出した。戻ってきたときには朝子ひとりになっていた。手に救急箱を持っている。

「今こっそり母屋から持ってきたから、ほら」

と朝子は僕の前に救急箱を置いた。

「自分でやんの？」

「当たり前でしょ。じゃあね」

「え？」

「あの子、雛子ちゃんは今日うちに泊めるから」

「え、ちよつと」

呼び声とどかず、朝子は部屋を出て行った。僕は糸が切れたように床に大の字になり、変哲のない天井を見上げながら今日一日について回想した。思わずため息が出る。まさしく「人生最悪の日」と呼ぶにふさわしい。……できればそうであってくれ、と僕も思うわけだが。

次の日に僕は高熱を出した。おそらく殴られたせいだろう。

そのせいでゴールデン・ウィーク残りの4日のうち、実に3日もあいだ、ちゃんちゃんこを着こんで鼻水を流し続けるという結果

に至った。間違いなく人生で最も無駄な連休、それどころか誰からも電話一本かかってこない。夕美からもヒナからも、アキタ力からさえも。

「それだけの存在ってことでしょ。はい、残念」

残念のこもった粥など胃に入れたくない。が、そんなわがままを言っていると朝子は僕の看病を放り出しかねないので黙っておいた。姉はどう風向きが変わったのか、ここ最近僕に興味を示し始めているようだった。飽きずに僕の看病を続け、読みたい本があると言えば買ってきてくれた。……まあそれも僕のお金ではあるが。

「おいしい？」

僕は肯いた。ようやく舌に感覚が戻り始めている。

「あのさ、ひとつ気になるんだけど、姉貴あのと白石さんとうしたの？」

「雛子ちゃん？ 別に普通だったけど」

「二人でなにやってたの、って」

「なにも。布団敷いてあげて、ここでおやすみって。起きたらまだ寝てて、あたし本読みながら待ってたんだもん。よっぽど疲れてたんじゃない？」

朝子の言うとおりでろう。着信があった時間と僕が掛けなおした時間までは、ゆうに一時間ばかりある。そのあいだ街中をさまよっていたのではなからうか。

「生意気じゃなかった？」

「全然。ていうか礼儀正しすぎてあたしの方が恐縮しちゃったし」

そんな馬鹿な、とは思ったが、朝子のあの啖呵を聞いたあとではそれも仕方あるまい。根はいい子なのだろう。ただそれを表面上にうまく出せないというだけで。

「でも電話くらいあってもいいのになあ……」

「電波が悪いせいじゃなくて？ あ、ねえ、あたし思ったんだけど、そっいえばあんたケータイの料金払ってないんじゃない？」

青天の霹靂、なんていう言葉は大げさにしか過ぎないと思っただが、思わず米が口から零れた。払ってねーや、そっいえば。あまりにお金がなさすぎて。

「やっぱり払ってなかったんでしょ」

「うん。払ってなかった」

「それで、払うお金はあるの？」

あろうはずがない。カラオケ代だって結局は僕が立て替えたのだから。

「ない。確実にない」

「……ふうん」

はかりごとを窺わせる、朝子の含み笑い。僕はパン、と気持ちよく両手を合わせて姉に懇願した。

「どうか、どうかお金をお貸しください。利子はちゃんとお払いします」

「うちは高いよ。それでもいいなら」

「ちなみに、その、どれくらい……」

「10日で五割」

それではまるきり闇金融である。僕のぎょつとした顔を見て朝子は大笑いした。

「うそうそ。そんな顔しないでよ。ケータイ代くらい利息なしで貸してあげるって」

恩に着ます。そんなわけでゴールデンウィーク最終日、僕は朝子に借りた金で携帯電話の料金を支払った。3日も休養をとった甲斐あって、体の傷はほぼ回復していた。残るは心の傷であるが、こちらはまだなんとも言えない。とにかくまた学校が始まるわけだ。憂鬱で退屈で億劫で、それでいて少しばかり恋しいあの生活が。

<百度恋愛>……第七話（後書き）

これにて第一章＞百度恋愛＜完了です。

思った以上に多くの方に読んでもらえているようで嬉しい限りです。
これからもよろしく願いします（、（

&1t;ファースト・キス>;.....第八話（前書き）

第二章スタート！

意外にもPCからの閲覧が多いようで感謝です。

<ファースト・キス>……第八話

まるで工場のようなと思う。刑務所のようなでさえある。

毎日が同じことの繰り返しで、進展がない。あるように見せかけているだけだ。実際のところ、僕はこの学校に100年間在籍している。100年2組、ミナミ・スグル。出席番号9番。身長170・5センチ、体重54キロ、視力右目1・0、左目0・7。前学期の成績、おおむね良好。ただ繰り返しされるだけだ。試験と身体検査と授業とマスターベーション……。

だがしかし、どれほど実のない生活であっても時は過ぎる。人間は歳を食う。ほんの少し前まではエロ本の表紙を飾る女の子のパンチラで十分満足したものだ、今ではエロDVDからMP3プレイヤーまで欲しがるという始末。周りはニンテンドーDS、デジタルカメラ、最新型携帯端末、恋し恋焦がれあふ彼氏彼女……そんなものに囲まれているというのに、僕が手に持っているものと言え、100年も昔に書かれた古典小説　夏目漱石著『坊ちゃん』。これはこれで素晴らしい小説なのだが、それにしても。

「おまえ電話繋がらなかったぞ」

いつかも聞いたような台詞。登校してくるなりふやけた顔で人の前に顔を出すアキタはなんの悩みもなさそうに見える。

「ジョン・レノンポール・マッカートニーに向けて『ハウ・ドゥ・ユー・スリープ』っていう曲を歌った。これはマッカートニーの目が大きいいから、そんなお目々をしててちゃんと眠れるのかっていう仲間うちのジョークから作られたんだそうだ」

「なにそれ。おまえの話は毎度つまらんな」

ドスン、と前の席に座り、首をポキポキ鳴らす。僕は連休中気がかりに思っていたことを尋ねてみた。

「そつえばさ、おまえあのあとどうしたの？」

「え、なにが？」

とアキタカはこちらに振り向く。その顔はなにもわかっていなさそうだ。

「なにがじゃなくて。ほら、カラオケのあと」

「え？」

「え、じゃなくて。あのあとどうしたのかって」

アキタカの目がめずらしく泳ぐ。口を開きかけるがなにも出てこない。

「……それがさ、わかんねえんだよ。あのあとどうなったのか」

「は？」

「おれなにしてた？ よく覚えてなくて」

まさかという驚きが僕を見舞った。もしも想像するところそのままになれば、それはそれで笑い話と昇華されるのだが、まだいささかの疑問が残る。

「起きたらどこにいたの？」

「普通に家にいたよ。どうやって帰ってきたのか覚えてないけど」

「へえ……女の子は？」

「女の子？ 何の話よ」

「阿呆。そこまで忘れてんのかよ。ほら、一緒にカラオケ入っただ

る、三人で。そんでおまえだけあの子と残ったじゃん。あの黒い服着た、化粧の濃い1コ下と」

アキタカは首をかしげ、記憶を探る風だったが、動作の途中でパツと目を見開いた。なにか思い出したらしい。

「……そういえば、あのあとでわけのわかんないメールが入ってた」「なんて?」

「知らないアドレスからなんだけど、これからもよろしく、みたいな変なメール」

「なんていうアドレス?」

僕とアキタカはお互いに携帯電話を取り出し、アドレスを読み上げた。そのスペルが初めから終わりまでまったく同じだったのは言うまでもない。加奈子からのメールだ。

僕はアキタカの携帯電話を取り上げ、送られてきたメールを読み上げた。

「今日は色々ありがとうございました。佐野先輩とは初めてだったからちよつと緊張しちゃった。これからは明隆って読んでもいいかな? 末永くよろしく」

以上。冒頭から結末までが、毒々しいまでのハートマークで埋め尽くされている。アキタカの顔から血の気が引いていくのが見てわかった。

「おまえなにしたの?」

「……わからん」

「佐野先輩とは初めて、っていうのは?」

「……わからん」

僕はアキタカの心を推し量った。いかに普段人の気をうかがわない奴がいざこうなってみても、いつもの分まで仕返しをしてやろうという気にはなれない。やはり見ていて不憫である。奴はげっそりした顔で呆然と窓の外を見ていた。

「今日必ず来るぞ。とりあえず顔を見に」

「……だろうな」

合掌。かける言葉も見つからない。僕らはめずらしく黙りこんで、静かに担任の東野が入ってくるのを待った。ホームルーム中に幾度となくため息が聞こえてきたのは説明するまでもない。

クレオパトラならぬ、使徒襲来の恐怖からか、アキタカは午前で学校を早退した。この僕にまで何も言わずに帰ったというから徹底している。それとも話す気力すらなかったか。

昼休みの終わるころ、夕美が二年廊下に姿を現した。あの夜の酔っ払った様子とは似ても似つかない謙虚さで、きよろきよろと辺りを見回していた。僕が声をかけると、こちらが飛び上がってしまうほどの大声で謝りだした。

「本当にすみませんでした！」

その声で廊下にたむろする生徒たちが一斉にこちらを見た。こんなところで詫びをするのはやめて欲しい。僕にも世間体というものがある。

「いいよ。とにかく向こうへ……」

「私、何でもしますんで！ 本当にごめんなさい！」

「と、とにかく向こうで」

泣き出されでもしたら、えらいことになる。僕は夕美の背中に手を置き、校舎と繋がった体育館の方へ歩き出した。格好の餌が投げ込まれたとばかり、廊下でお喋りに精を出す女子生徒たちは、僕らが通り過ぎて間もなく話題を変える。……え、あの二人って付き合ってたんだ……まさか。南が相手じゃショボすぎるでしょ。相手は一年の相田さんだもん……あの超かわいい子？ やるじゃん、南……。

南はやりません。聞きたくないことまで聞こえてしまったが、夕美の評価は二年のあいだでも悪くなさそうだ。僕らは体育館が一望できる客席に座り、周りに人がいないことを確認してから話し始めた。体育館では弁当を食べ終えた三年生がバスケをしている。体育館は三年生のもの、というのがこの学校でのしきたりらしい。

夕美は客席の上に手を合わせて頭を下げた。

「ごめんなさい！」

「ていうか、そんな謝ることもないし。別に気にしてないから」

「でも、でも、本当に迷惑かけて……」

「いいよ、ホントに」

「すいません……その顔のアザ、もしかして……」

僕は自分の顔を撫でた。やはりまだ多少は残っているようだ。

「うん。思いつきやられたからね」

「……次の日にヒナから聞きました。全部私の責任です」

「そんなことないって。全部どころかひとつもないよ。お兄さんの怒る気持ちだってよくわかるし」

夕美はうつむいて何も言わない。そのすぐあとに、涙が筋になって零れた。こういうとき男はどうしたらいいのだろうか？ 傍から見れば僕が泣かしているようにしか見えない。

僕があたふたしていると、夕美が顔を上げて僕を見つめた。その瞳は涙に濡れてはいるが、どこことなく切なげである。

「……南先輩は、どうしてそんなに優しいんですか？」
「優しい？」

こくりと肯く夕美。さつと絵の具を塗ったように、涙のあとに髪が張りついている。

「だって、だって普通は怒りますもん……殴られたんですよ？ 南先輩は何も悪くないのに」

「まあそうだけども……」
「どうして怒らないんですか？」

そんな質問をされても困る。ただ怒るに値する理由がないだけなのだが。

「怒ったってしょうがないよ。あんなったのは誰のせいでもないから」

「そうですけど……」
「ないがしろにされるのは嫌だけど、みんなそういう風におれを見てるわけでもないからさ。アキタ力はまあ例外としても」

沈黙。ややあつて、夕美はビニール皮の財布を取り出した。

「あの、とりあえずカラオケ代だけでも……」
「いいよ。大した額でもないし」

どうしてそう格好つけたがるのかと自分でも不思議に思いながら、僕は夕美の金を断った。まあ彼女に涙させた詫びと思えばいいだろう……そう自分を納得させるほかない。

「じゃあ、そういうことで」

僕が立ち上がろうとしかけると、夕美が引き止めるような目を僕に向けた。

「……あの、最後にひとつお話があるんですけど」
「なに？」

「あの、私……佐野先輩のこと、諦めます」
「そっか。でもどうして？」

夕美は唇をぎゅっと結び、目線を横に逸らした。また泣き出してしまいそうだったので、僕はあわてて会話をつむいだ。

「ていうか、あいつは年上好きだからさ、あんまり下級生には合わないと思う」

「……好きになったって言ったら、ダメですよね？」
「え？」

「……南先輩のこと、好きになったって言ったら、どうします？」

なんのことやらわからなかった。こんなことを言うとは冗談だと思う人もいるかもしれないが、そのとき僕が思ったのは、「南先輩と

は誰のことだろう?」ということだった。その南先輩とやらが自分だと理解するまでには丸々10秒はかかったろう。10秒ならすぐだと思いかもしれないが、それだって時と場合による。理解のあとに混乱がやってきたのは言うまでもない。

「ああ、うん……ええ?」

夕美が顔を赤らめる。僕だって相当なものだったとは思うが。

「好きになるって……お、おれのことを?」

こくりと肯く夕美。僕の心臓が破裂せんばかりに激しく収縮する。なにがどうなったらそうなるのか、こちらとすればわけがわからない。

「ちょ、ちょっと待った。とりあえずこの話は保留することにしよう。一時の気の迷いっていうのもあるし、さっきから三年がちらちらこっち見てるし」

「……ごめんなさい」

「いや、謝ることでもないんだけどさ……」

そのとき折りよく、昼休み終了を報せるチャイムが校内に鳴り響いた。僕はこの場を去る口実が出来たことにほっと息をついて、夕美と体育館を後にした。別れ際の二年廊下で、彼女が振り返ったそのとき、目に痛ましいまでの切なさが見てとれた。男なら誰でもこんな子を守りたくなるだろう、そんな風に思わせる視線だった。

<ファースト・キス>……第九話

そのあと、授業を受けながら延々と繰り返された淡い期待と放心状態。女の子に好きと言われたのはもちろん初めてのことである。彼女の気持ちを信じようと努める熱情と、女心なんて信じるなという冷静さのあいだに挟まれ、一日の課目を終えたころにはぐったりとしていた。

こんな状態で良し悪しの判断がつくものか。帰りのホームルーム中、そうすっぱり心を決め、教室を出ようとしたところで校内アナウンスが流れた。

「2年2組、南スグル君。物理の南先生がお呼びです。ホームルームが終わり次第、至急物理室まで来てください。繰り返します。2年2組、南スグル君」

はてな。教室の戸口で足を止めると、クラスメイトたちがこちらを見ている。特にやましいことはないはずのだが、アナウンスで名前を呼ばれるというのはあまり気持ちのいいものではない。それにここまで南を連呼されたとあっては、恵子先生だってなんだか落ち着かないだろう。そそくさと教室を出て、言われるがまま物理室に向かった。

「失礼します」

そう一声、物理室に入ると、生徒用の椅子に腰掛けて恵子先生が書類に向かっている。先生はこちらに背を向けたまま、隣の席を指差した。座れということらしい。

「これ、どういうこと?」

ひらりと僕の前に広げられた二枚の模造紙。二枚とも力学についてのレポートなのだが、よく見てみると内容があまりに酷似している。名前の欄には「南優流」、「佐野明隆」と書かれている。……あの阿呆、そっくりそのままレポートを写すやつがどこにいる。

「あの、それは……ですね、えっと……」

「どっちが写したの？ 佐野くんでしょ、どうせ」

「まあ、はい」

やはり安易な逃げ口上が通じるような相手ではない。恵子先生はため息をひとつ、縁なし眼鏡をそっと机の上に置き、髪を片方の耳にかけて僕を見据えた。

「いつもこんなことしてるの？」

「いや、いつもってわけじゃないんですけど、たまーに……」

ゴチン！ 反論の余地なく、恵子先生から脳天チョップが僕に下される。決して強い痛みではないのだが、なによりつらいのはそのあとだ。恵子先生は咎めるような目でじっと僕を見据え、数秒のあいだ沈黙する。大概の人間ならば一度これを体験すれば、この人の前でもうインチキはすまいと心を決めるだろう。普段優しいだけに、厳しい先生の顔を見ると心が締めつけられるようだ。

僕は先生と目を合わすことに耐えられなくなり、視線を伏した。

「なにか言うことは？」

「……すいません」

はつきり言って、僕は恵子先生が好きだ。他の教師の誰よりも、

という意味ではあるが。そんな先生は怒ったあと、生徒に対してすぐに帰れとは言わない。ちゃんと相手の固まった心をほぐしてやり、最後には背中を押して教室から出す。彼女と話していると、物理の教師より心理学に関する仕事に就くべきではないのかと、いつもそう感じてしまうのだが。

先生は僕の肩に手を置き、姿勢をぴんと張らせた。制服の第二ボタンをはめ、足を揃えさせる。

「今回だけは見逃すことにします。でも次はないからね」

「はい。ありがとうございます」

「それともうひとつ」

恵子先生はそう言うのと、ぐいっところちらに顔を寄せ、僕の目を正面から見据えた。大人の香水の匂いが、生々しく鼻腔を刺激する。

「……あなた、この前下級生と合コンしたんだって？」

心臓が止まるかと思った。僕の顔色を見て、恵子先生がやっぱりという風にため息をつく。

「まったくもう。先生、南くんはそんな子じゃないと思ってたのにな」

「いや、違うんですよ。これには色々と事情がありまして……」

「隠したくないからはっきり言うけど、これは下級生の口から直接聞いたの。でもだからって、怒ったりしちゃダメだからね。私だって内緒にしとくって約束したんだから」

こんな告げ口するのはクレオパトラに違いない。あの晩、アキタ力となにがあったか知らないが、それを誰かに自慢したくて仕方

なかったのだろう。しかしいくら生徒に近いとはいえ、学校の職員にまで軽々しく話してしまうなんて、ため息をつきたいのはむしろ僕の方だ。

「怒ったりはもちろんしませんけど　ていうか、どのあたりまで聞いたんでしょ？」

「どのあたりって、なにかやましいことでもしたの？」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

なんと説明したらいいのだろう。あまり全てを打ち明けたくはなかったのだが、この際仕方あるまい。せめて自分の誤解だけは解いておかなくては。

そんなわけで、恵子先生の顔をうかがいつつではあるものの、僕は始めから終わりまでを逐一先生に報告した。もちろん酒を飲んだということは省いて。先生は途中で笑いだし、ところどころに突っ込みを入れたのだが、顛末を聞き終えたところには哀しい目で僕を見ていた。

「かわいそうに。どこを殴られたの？」

僕は口の端のあたりと、額を指差した。先生の柔らかい手が伸び、傷跡に触れた。

「南くんってお肌つるつる」

「……そこですか」

「冗談。でも先生からひとつ忠告しておく、そのヒナちゃんっていう子にはもう会わない方がいいかもね」

「どうしてですか？」

「だって、南くんはまたお兄さんといざこざがあっても困らないの

？」

もちろん困る。しかしどういいうわけかそこまでは考えていなかった。例の一件は偶発的に起きた突発的な事故だと、僕の中で勝手に決めつけてしまっていたのだ。

「そこまで考えてなかった、っていう顔だけど、くれぐれも気をつけてね。お兄さんだって特待生だから、暴力を振るったりは極力しないだろうけど……一度前科があるわけだから。なにかあったら私に言いなさい。これでも少しは相談に乗れると思うから」

会話の終わりを示唆する、恵子先生の絶対的な慈しみの笑顔。その表情が見ただけでも殴られた甲斐があるうというものだ。

僕は席を立ち、失礼しましたと一声、物理室を去ろうとしたのだが、戸口で振り返り、思い切ってやけっぱちに例のことを尋ねてみた。

「先生」

「なあに？」

「……その、先生は彼氏とかいるんすかね？」

先生は静かに笑う。その質問自体がおかしかったというより、タイミング的におかしかったのだろう。

「どうしても教えて欲しいの？」

「はい、その、なるべくなら……」

「他の生徒に言わない？」

「言いません。断じて」

「佐野くんにも？」

「あいつには絶対に言いません。例え拷問を受けようとも」
「そっか。なら教えてあげる」

実はあなたのことが好きなのよ、南くん　そんな妄想をたくましくしながらも、とうとう事の核心に触れることができる、僕の心臓は高鳴っていた。恵子先生は僕に向かって手招きした。

「耳を貸して」

しんとした物理室、先生の告白を待ちながら、僕は言われたとおりに耳を貸した。

「私ね……実は、東野先生とお付き合いしてるの」

先生の吐息に身震いしながら、同時にハッとした。僕の表情に驚愕が浮かび上がった。

「東野って……うちの担任の？」

こくりと肯く恵子先生。そんな馬鹿な。

「そう、東野先生。まだ半年くらいしかお付き合いしてないけど」

アキタカが聞いたら気を絶っているのではなからうか。あの冴えない担任教師と、この可憐極まる恵子先生がお付き合いをしていると知ったら。

「いちおう確認とききますけど、「冗談とかじゃないですよね？」

「あら、どうして？」

「いや、なんていうか、こんな言い方したらアレですけど、釣り合

いがとれていないような……」

先生は声を上げて笑った。僕ら力ワ高の男子生徒にしてみれば決して笑いごとではないのだが。

「どうしてそんな風に思うの？ 東野先生ってすごくいい人なんだから」

「それはわかりますけど……」

「私らしくない？ でもしょうがないの。好きになっちゃったから」

一瞬だけ、東野教諭への強烈な嫉妬が僕を見舞った。でも恵子先生の幸せそうな表情を見たとき、それは止んだ。いつでも少し物憂げな表情の恵子先生が、これほどまでに底抜けな明るさを見せているのだ。悔しいけれど、そんなことは僕の包容力ではできそうもない。

& l t ; ファースト・キス & g t ; ; …… 第九話（後書き）

作者多忙のため、次話の投稿まで少し時間がかかりそうです。
楽しみに待っていてくれる方、本当に申し訳ありません。

&1t・ファースト・キス> ; 第十話（前書き）

長らくお待たせをいたしました。相変わらず多忙ですが、尽力して必ずや完結させようと思います。

ひとりとぼとぼと下校しながら、どうしても東野教諭と恵子先生を並べて頭に描くことができずにいた。正直なところ、僕はけつこう落ち込んでいたわけだ。あんなことを聞くべきじゃなかったとは思っていた。とりあえずバカの声でも聞いて気を紛らわそうと思い立ち、アキタカの番号を探っている途中、ちょうど電話がかかってきた。未登録の番号だったが、どこか見覚えのあるナンバー。

「もしもし」

答えはなかった。しかし電話の向こうからかすかに雑音が聞こえる。ただ相手が長い時間黙っているのだ。

「あの、もしもし?」

「……ごめん」

「え、誰?」

「声聴いて、わかって」

あ、と思わず声を上げた。電話の相手はヒナに違いない。

「どうしたの?」

「別に。ただこの前のこと……謝ろうと思っただけ」

「気にしてないよ。そのことなら」

「今どこにいるの?」

「学校から帰ってるけど」

次の言葉を模索しているのか、それともなにかをためらっているのか、長い沈黙があった。車の走行音だけが電話越しに聞こえる。

「……会えない？」

「え？」

「浅間神社で待ってる」

「いいけど、ちょっと待って。切らないで」

「なに？」

「なんていうかき、一方的に電話を切ったりするの止めて欲しいんだ。そういうのって、ちょっと傷つくから」

しんしんと雪が降るように、音もなく沈黙が下りる。ヒナの息づかいだけがかすかに耳に届く。

「……わかった。じゃあね」

「うん。すぐ行くよ。じゃあね」

社までの長い階段を上りきると、五月の美しい夕暮れが神社の木々を朱色に染めていた。太陽を背に受け、木々は黒いシルエツトだけを無数に浮かべている。そのあいだから漏れる赤い光を見つめるように、ヒナは賽銭箱の前に立って街の方を眺めていた。カラスが小さな群れを作って、電線から電線へと移動する。

その情景はなにかしら胸に迫るものがあつた。そのせいで僕はヒナに声をかけるのをためらったのかもしれない。でも彼女がこちらを振り返ったので、僕の中の寂寞感みたいなものも、そのときふと消えた。

「……いつからいたの？」

と言ったヒナの目には、少しだけ咎めるような鋭さがあつた。

「今だよ。ほんのちよつと前」

「そう」

「とにかく座らない？」

ヒナはこくりと肯き、賽銭箱の前にある短い階段に腰を下ろした。僕が隣に座ると、髪で顔を隠すようにヒナが斜め前を向いた。早朝の月に似た、ヒナの白い耳が黒髪の中にくつきりと姿を現す。

「……この前のこと、ごめん」

「いいよ。それより、あのあとはどうなったの？」

「別に」

「でもお兄さんは怒らなかった？」

「……あれから、会ってない」

「え、どうして？」

ヒナはブレザーの胸ポケットから一枚の紙きれを取り出した。そこには殴るような文字でなにか記されている。

「おまえは俺を裏切った。ひとりで反省しろ」

そう読めた。僕は紙きれを元のように四枚に折り、彼女に手渡した。

「なんていうか……厳格な人だね。本当におれのひとつ上？」

ヒナは深く息を吸い込んだ。背けていた顔を少しでも僕の方に向ける。彼女の口からなにかが語られようとしているのだと、僕にも感じる事ができた。

「ずっとお兄ちゃんが親代わりだったから」

彼女はそう語りだした。

「……私が小学生のころに、うちのお父さんとお母さんが離婚してからはずっとね。私たちはお父さんの方に引き取られたんだけど、とてもじゃないけどお父さんは私たちの面倒を進んで見てくれるような人じゃなかった。それで中学校のころに家出をして、親戚の叔父さんの家で面倒を見てもらった。お兄ちゃんは野球がうまかったから、フナキタへ入るときに事情を説明して、ほとんどお金のかからないようにしてもらったの。それでも足りない分は奨学金でまかなってもらって」

「じゃあお父さんは今どうしてるの？」

ヒナは神社の黒ずんだ土を見据えた。それからかすかに首を振る。

「……知らない。家出したあと、お兄ちゃんが報告に行ったら、家はもぬけのからだったって」

「そうなんだ」

「君には知っておいてもらいたかった。誤解されなくなかったから」

わけもなく、僕の胸を虚無感が襲った。ヒナのお兄さんがどれほど彼女を想っているか、僕にでも理解することができたからだ。それは失恋にも似た痛みだった。こんなときにはなんとさえいいたろう？ 安っぽい常套句ばかりが頭に浮かび、声にならぬままためらいの空気として吐き出される。ぬくぬくと温かい環境で暮らしてきた僕には、「つらい思いをしたんだね」というその一言もはばかられるように思えたからだ。

おかげで二分ばかりそろって黙り込んでしまふことになった。だから急に電話が鳴ったとき、沈黙から逃れられたことに少しだけほっとした。

「もしもし？　今どこにいる？　買い物頼みたいんだけど」

電話の画面を見ると着信は母親だったが、声は朝子だ。こうして自分の通話料を少しでも節約しようとしているところがなんともずるがしこい。

「無理。今はちょっと用あるの」

「なに、用って？　どうせアキタ力君でしょ」

「違うってば」

「じゃあなに？　あ、わかった。雛子ちゃんだ」

言葉に詰まった。どうしてそんなに勘が鋭いのか。

「とにかく今は無理なんだってば。ていうか自分で買いに行けよ」「墓穴を掘ったな。雛子ちゃんと訊かれて否定しないということは、隣にいるってことだね、ずばり。いいから二人で来なよ。お母さんが今日はすき焼きにするっていうから」

すき焼き……下校時の腹を空かした高校生にとって、これほど魅力を感じるものはない。

「お肉だけないみたいだから二人で買ってきて。ちゃんとすき焼き用のお肉を買ってくんのよ。バイバーイ」

なんとも強引に電話は切れた。僕はハアとため息をついて、とりあえずヒナに事情を説明することにした。

「なんかね、今からうちですき焼きやるんだって。それで雛子ちゃんも来ないかって朝子が言っただけど……」

「いいよ」

「え、マジっすか？」

頬を赤らめ、ヒナが元のように顔を背ける。

「……すき焼き、好きだから」

<ファースト・キス>……第十一話

そんなわけで僕らは近くのスーパーで焼き用の肉を買い求めた。果たして財布の中においくらあったものかとひやひやしたが、なんとかヒナには金を借りずに事足りた。女の子といっしょに自分の家の方角へ歩を進めるといのは、なんとも不思議な心持ちである。あのときはセックスのことしか考えられなかったけれど、今は違う。それよりも家族がきちんとしたところを見せられるかということの方が心配だ。

会話につまづき、冷たい沈黙が流れると僕はそのことについて考えた。父親はまだこの時間には帰って来ないので安心ではあるけれど、問題は朝子と母親だ。あの二人はまったくもって油断ならぬ。せめて僕らの仲について突っ込んだところを訊いてこなければいいのだが。

「……なに、考えてるの？」

難しい顔をしていたせいか、ヒナがそう言った。どきりとしながら、僕は冷静さを保とうと努めた。

「え、いや別に」

「……また変なこと、考えてたの？」

「考えてないよ。今回は」

「じゃあやっぱり前回は考えてたんだ」

どうしてこう僕は、年がら年中墓穴を掘ってばかりいるのだろう。たまには埋めるといふ作業もしてみてはどうなのか。

「ええ？ ていうかそれは、その、不可抗力とていうかなんというか……」

しどろもどろになった僕を見て、ヒナは笑う。その笑みはまるで子供に還ったようになんともあどけない。

「なんか……君っておもしろいね」

これは褒められているのか、それとも小馬鹿にされているだけなのか。

ヒナは口元を緩めながらこちらを向く。小さく尖った鼻筋に、絵筆の先をさつと走らせたような、くつきりとした二重瞼。その表情はなんの憶測もなく描かれた水彩画のように明るく、どこまでも晴れ晴れとしている。

「なにか話して」

と聞いているこちらの心が弾むような声で彼女は言った。

「なにを話すの？」

「それを君が考えるの。私は聞いてるだけ」

「ええ、なんかずるくない？」

「ずるくない。私はさっき話したもの」

僕は意識を集中させた。彼女を喜ばせるような話があったかどうか自信はないけれど、それでも退屈させない話をしたい。想像して欲しいのは、飛び込み台の上から勢いよく両足を離し、深く水の奥までもぐるところ。

話題を見つけるまでにおよそ一分くらいはかかっただろう。今にも口からこぼれ落ちそうな言葉たちを押しとどめ、一度頭の中で小説風に整理してみる。こうすることで話の面白味もいくらかは増すかもしれない。

「大して面白くないかもしれないけど、それでもいい？」

ヒナはこくりと肯く。しかしその目は愉快的話を求めるように輝いている。

「うーんとね……子供のころ、池に落ちて溺れかけたことがあってさ、近所の人が総出で引き上げてくれたことがあるんだよ。釣りをしててね。物置から親父の釣竿と長靴と、それといっぱいポケットのついたズボンまで拝借して。でも全然釣れなかったんだ。今考えると海釣り用の餌を投げてたんだから釣れるはずもないんだけどさ」

「それで？」

「それでもしばらくは釣り糸を垂らしてじっと待ってたんだよ。夏のよく晴れた日で、座ってるだけなのに汗をびっしょり掻いてた。で、そのうち待つものにも飽きてきて、水遊びを始めたんだ。そしてら苔で滑ってドボンだよ。一瞬なにが起きたのかわからなかった。青空がパツと姿をあらわして、次の瞬間には水の中で足掻いてた。対岸にいた釣り人が気づくまででっこのかかったと思う。その人はおじいさんだったから、すぐ近所の人たちを呼んで来てくれて、おれは大人たちに引き上げられたんだけど、そのとき履いてたズボンは親父のだったからブカブカで」

「……まさか、脱げちゃったの？」

「そう。しかもパンツまでいつしよに。大人たちに混ざって同じ学校の女子なんかもいて、あのときはもう学校に行けないって思った。まさしく人生最悪の日だったね」

ヒナは笑いをこらえているみたいだった。肩を震わせて顔を僕から背ける。

「けっこう面白い話でしょ？」

「……気の毒すぎて笑えない」

「でも笑ってるじゃん」

僕らは顔を向き合わせ、ひとたび目を合わせるとそろって大笑いした。よくわからないけれど、僕と彼女のあいだにあった壁みたいなものはこのとき初めて崩壊したんじゃないかと思う。これまでにヒナのそんな表情を見たことはなかったから。

玄関の前で唾をぐくりと飲み込む。後ろを振り向いてヒナの表情を確認してみるが、それほど緊張した様子はない。というか緊張しているのは僕だけなのかもしれない。おそらくそうだ。なら僕もただすき焼きを楽しめばいいじゃないか。それをどうしてこんなに深呼吸ばかりしなければならぬのか。

「……どうしたの？」

ヒナの不思議そうな顔に、僕は精一杯の笑顔を浮かべる。

「いや、なんでもない。さあ上がって」

ただいまーと一声、おかえりーと返す声。居間から母と姉が騒がしく玄関まで出迎え、ヒナを歓迎する。朝子が言っていたとおり、人前での彼女は礼儀正しかった。はじめまして、と僕の母に向かい丁寧に頭を下げ、どうぞと言われるまで靴を脱ごうともしない。あたふたしたのはむしろ母と姉の方だろう。それよりも朝子は母親にヒナのことをどう説明したんだろう？

そう思い、朝子の服をつまんでこっそり尋ねてみた。

「ねえ、お母さんにはこの前のこと言っていないよね？」

「言うわけないでしょ。雛子ちゃんは一応あんたの彼女ってことにしていたから」

僕の彼女……いやいやそれも十分に困るんですけど。

いらんことを聞いてしまったおかげで、一同が座についたときには心臓が破裂しそうになっていた。うちの母親ならなにを訊いてきたっておかしくない。もしも二人の進展について訊かれたりなんかしたら、僕はなんと答えればいいのだろう。さすがにこんなところでビンタを食らうわけはないにしても、ヒナに対して罰が悪いではないか。

「ところでちゃんとお肉は買ってきたんでしょうね」

朝子の声でハッと我に返り、僕は通学用バッグの中からすき焼き用の特上肉を取り出した。

「ほら、これでいいんですよ」

「ずいぶん高いお肉買ってきたのね」

とは母の声。なぜか朝子は笑っている。

「まあまあお母さん、いいじゃんいいじゃん。今日はお客さんもいることだし。雛子ちゃんお米は食べる？」

「いただきます」

「雛子ちゃんは食べるって。あんたは？」

「うん。ちょうだい」

「オッケー」と声を躍らせ、朝子は炊飯ジャーから茶碗に米をよそう。母親は毎度のことにしても、朝子が馬鹿に明るいのはどうしてだろう？　ときどき僕とヒナを代わる代わる見ては、ひとりこそこそと笑っている。冴えない弟が女の子を連れてきたというのがそんなに楽しいのだろうか……なんという嫌味な性分だろう。

「ところでお肉のお金まだ貰ってないんだけど」

僕がそう切り出すと、余裕の笑みを浮かべて朝子がこちらを見る。

「あら、そういえばあたしもDSのソフト買ってもらってなかった気がするけど」

「それとこれとは話が別じゃ……」

「今日のお肉はさしづめ担保ってとこね。ごちそうさま」

そんなの詐欺だ。と思ったが、ヒナがいる手前、反論することもできない。おそらく朝子はそこまで計算に入れているのだろう。なんという極悪な姉か。

「いただきますーす」

と短い合唱のあと、哀れな父を抜きにした晚餐が始まりを告げた。ヒナはやはり多少気を使っているのか、あまり箸をすすめようとし

ない。朝子が気を配ってヒナの分もよそってやり、それから初めて手をつける。

「雛子ちゃんが好き嫌いないの？」

とニコニコしながら母が尋ねる。

「特にありません」

「じゃあこの子とは大違いね。まったくスグルは小さいころから好き嫌いばかりするんだから」

おほほほほ、と上機嫌に笑いながら、母の視線はヒナばかりに注がれている。単純な母のことだから、彼女を将来の娘とでも見て取っているのだろう。

なんとか話を別のルートにずらすと、僕は話題を練った。

「白石さんは乗馬部に入ってるんだってさ。そうだよな？」

「……部じゃなくて愛好会」

「え、ああそうだったっけ？ うん、とにかくそういうことらしい」

僕のテンパリ気味な紹介を聞いて、母と姉は「へえ」と声をもらす。朝子は箸の先を噛みながら興味深げに尋ねる。

「じゃあ学校に馬がいるんだ」

「そうです。一頭だけですけど」

「へー。かわいいでしょ？」

「大人しい馬なんです。もう歳だから病気にもかかりやすくって…」

「じゃあ乗ることはできないの？」

と僕は訊いてみた。

「できるけど、体が心配だから」

「乗らないの？」

ヒナは肯く。

「……だから乗馬とは言えないからもしれないんですけど」
「でも立派じゃないの。普通飼えないでしょう、馬なんて」

ともかくも母はヒナを気に入ったようだ。一度こうなると、相手がどんなことを言おうとプラスに考えてしまうからおそろしい。

「スグルも部活に入ったらいいじゃない。お母さん応援するから」

「嫌だよ。めんどくさい」

「ほらまた。最近の子はすぐにメンドクサイって言うんだから」

自分の息子まで、最近の子＜呼ばわりするのはいくらなんでもよそよそしい。それに最近の子はMP3プレイヤーのひとつやふたつは持っているはずだが。

「それより新しいケータイ買ってよ。これも古すぎ」

「だめよ、まだ使えるんだから。欲しいって言えはなんでも手に入ると思われたら困るもの」

そのとおりとばかり、朝子が母の隣でうんうんと肯く。この姉にだけは同意する権利もないと思うのだが。

「雛子ちゃんだってそうでしょう？　おうちはどこなの？」

「実家は群馬にあります」

「じゃあひとり暮らしなの、その歳で？」

目を丸くして、朝子が話に割って入る。

「兄と住んでいます」

「へー」

と似たような声を揃える母子。こんなとき、ふと僕は二十年後の朝子を想像してしまう。いくら時代に変化された節はあるもの、きっと母とそれほど変わらない風体になっていることだろう。

「偉いわねえ。ほんと誰かとは大違い」

「誰かにも見習って欲しいよねえ、お母さん」

「そうね、ほんとに」

そろってこっちを見るのは止めてほしい。それを見て雛子までがくすくすと笑う。

「でも私は南くんがうらやましいです。なんだか毎日楽しそうで」

楽しいのは二人だけだろう。玩具がわりにされるのも毎日ではさすがに疲れるではないか。

「すぐ飽きちゃうけどね。スグルはボキャブラリー少ないから」
「うるさい」

「こんなので良かったらいつでもいらっしやいね、雛子ちゃん」

「いいんですか？」

「もちろん。なんならお父さんの分あげちゃうから。おほほほほ」

おほほほほ、あはははは……やれやれ、頑張ろつぜ親父。この家で男が生きるには辛いものがあるけれど。

<ファースト・キス>……第十二話

ともかくそのように晩餐も終わり、母が総じてなにも訊き出さなかったのはありがたかった。そのあとでヒナは僕の部屋にやってきた。母が父を駅まで向かえに行くとき、家のそばまで送ってもらうそうである。

僕はいつものようにコーヒーを入れた。あの晩のように二杯分。

カウチに並んで座り、そこで図ったように沈黙が訪れた。あまりにも不自然な空白。なにも話題が思いつかない。お互いのこれまでは違った部分を見せたことで、どちらも少し気恥ずかしくなってしまうたんだと思う。部屋は花火が終わったあとのように閑散として見えた。

彼女はおもむろに、僕の肩に自分の頭を載せた。「えっ」という小さな声がでる。でもヒナは動こうとはしない。その温かな重みを説明することはできそうにない。僕の心臓は破裂しそうになっていた。

「ごめん……おれの部屋、なんにもすることなくて」

それだけの言葉をなんとか搾り出した。

「いいよ。こうしてるだけで」

ヒナはかすれるほどの小さな声でそう言った。どういうわけか、カップを持つ自分の手が震えだす。コーヒーの味もわからない。実はアキタカと朝子がクローゼットの中に潜んでいて、僕の行動を見

ながら笑いをこらえているんじゃないかという妄想に囚われる。どくんどくんどくん。生唾を飲み込む巨大な音が体中を反響する。

「……なんて呼べばいい？」

なにも写っていない真っ黒なブラウン管を見つめながら、唐突にヒナがそう言った。

「え？」

「名前。いつも君としか呼んでなかったから」

「なんでもいいよ、別に。白石さんの好きで」

「それ、やめて。さんとかちゃんとかつけられると、気持ち悪い」

そう言ったときのヒナの顔にほんのり赤みがさして見えた。彼女の髪の毛の香りに、意識が遠のいていく。

「……じゃあ、ヒナって呼ぶよ」

僕の声は震えていたんじゃないだろうか。頭がぼんやりとして、恥ずかしさに顔を背けたくなる。たかだか名前を呼ぶだけでこんなにまでうろたえてしまうとは。まだまだ修行が足りない。

「ヒナはおれのことなんて呼ぶの？」

「……やっぱりまだ君にしとく」

「ずるい」

「ずるくない」

それから長い沈黙があった。心臓の激しい鼓動だけが部屋に響き渡る。緊張のおかげで、どのくらいの時間が経ったかわからない。ヒナは僕の言葉を待っていた。でもあと一步の勇気が、どうしても

生まれてこない。

告白……そんな大それたこと、僕にできるのか？

「……朝子がさ、うちのオカンにおれたち付き合ってるって言うちやっただって」

「そうなんだ」

行け、行け、という心の声が僕を急き立てる。

「だからさ、その……なんて言ったらいいか……」
「なに？」

息が乱れ、ヒナの唇はわずかばかり開かれていた。そんなものを見せられては、唇と唇が重ねあうところを想像しないわけにはいかない。ほとんど衝動的にキスがしたくなる。僕は少年漫画に登場する鈍感な主人公とは違う。彼女が僕に多少の想いを寄せているくらいはわかる。

「だから……ヒナがよければだけど」

それからあとは自分でもなにを言おうとしたのかわからない。完全なるブラックアウトだ。強烈な歯と歯のぶつかり合い、そのあとに続く柔らかい唇の感触、生温かい息、絡まりあう舌と舌、濁流のように押し寄せる欲情、僕は完全に我を忘れていた。どうしてこんな流れになってしまったのかもわからない。ただ熱に浮かされているとしか形容できない。

ヒナの両手が僕の背中に回る。僕はもっと近くに彼女を抱き寄せた。

「……痛い」

「ごめん」

ふたたび紡がれる唇と唇。今度は優しくゆっくりと、より深くまで……。

アパートの階段に誰かの足音を聞きつけたとき、冷えた意識がずどんと部屋に落ちた。僕は瞬時に目を見開く。あわてて立ち上がり、僕は玄関のドアを開けた。

「なに？」

見下ろすと、朝子が階段を上っている。外はもう真っ暗だ。

「雛子ちゃんを呼びにきたの。あんたこそなに？」

「じゃあいま呼んで」

振り返ると、すでにヒナは玄関に座って靴を履いていた。顔を背けたまま僕をすり抜け、朝子に向かって一礼する。

「下りておいで。車で送るから」

「ありがとうございます」

階段を下りる途中、ヒナはためらいがちにこちらに振り向いた。

「……また、連絡するから」

僕は肯いた。

部屋に戻ってから、しばらくは玄関に立ち尽くしていた。例えようのない喜び、浮ついた心。ほとんど放心状態と言ってもいい。ときおりニヤリとひとりで笑ってみせる。高校二年生にて初めてのキス。いくぶん遅咲きではあるが、僕はひとつの境界を乗り越えたわけだ。

次の日になっても、放心状態は続いた。はたから見れば相当気持ちの悪いやつになっていただろう。少しでも気を緩めると笑みがこぼれてしまう。そんな僕にアキタ力が反応しないわけはなく、当然のように疑いの目を向ける。

「おまえなんかいいことあったんだろ」

そう言った奴の顔はげっそりとしている。こちらはなにがあったか訊くまでもない。

「まあ誰かさんよりはいい感じかな。酔って下級生に手を出すような人よりは」

アキタ力の顔に死相が出ている。少し前なら僕がどんなことを言おうとそれ以上の皮肉を返してきた男であっただけに、この変貌は少し気の毒だ。

「……いや、冗談だよ？」

「まあ、本当にそのとおりですから……ハハ、自分どうせダメっすから……」

「いつからそんなキャラになったんだよ。親が泣くぞ」

「あのあとやっぱりしちゃったらしいんだ」

「しちゃったって……あれを？」

弱々しく肯くアキタカ。こんなときはなんと言えればいいんだらう？

「まあ初めてじゃなかったただ良かったんじゃないか？　ぎりぎり
ブスではないような気がしないでもないし」

「フォローになってねえぞ、ド阿呆」

「あ、元気を取り戻した」

文字どおり、アキタカが明るい表情を見せる。というよりは開き直ったというか、悪だくみを模索しているときの表情と言った方が正しいか。人が変わったように今度はゆったりと椅子に座り、葉巻を吹かす姿を真似る。

「いいんだ、もう別に。ひとりセフレが増えただけだって思えば」

なんとという奴だろう。しかしここまでプラス思考に人生を進められるというのは、ある意味才能のひとつなのかもしれない。

「……いつか女に刺されるぞ。極悪人め」

「棚橋じゃねーんだから。ていうかおまえこそなにがあつたんだよ」

話すべきかどうか迷った。誰にも言うなよ、と釘を刺しておいてから、こそつと例の事実を伝えることにした。

「実はファーストキスをね、ちょっと……」

言ってるうちに恥ずかしくなってきた。アキタカが如才なく冷やかしを送る。

「ファーストキスう？ おまえいつたいいくつだよ」

「今年で十七になりました……」

「今までキスもしたことなかったのか。可愛いそうなやつだ」

頭の上に行くアキタカの笑い声で、胸がムカムカしてきた。普通の健全な十七歳はそんなもんじゃないのだろうか。

「うるさいわ。ほいほい誰とでも枕をいっしょにするような男に言われたくはない」

「まあまあ。そんで誰としたの？」

「覚えてるかな。この前のカラオケにいた子だよ。ヒナっていう「ふーん。あの子か」

見るからに覚えていない顔だ。覚えていたとしても、誰かと混同しているんじゃないだろうか。

「……で、どういう流れでそうなったわけ？」

あまり細かいところまで話したくはなかったので、大ざっぱな筋だけを明かした。アキタカは途中途中に「ほほう」、「へえ」と驚くような冷やかすような相づちを交え、興味深げに僕の顔をのぞき込んだ。

「もったいねえなあ。最後までしちやえばよかったのに」

「……あのな、おれの部屋はとなりが姉貴なんだぞ？」

「関係ないっしょ。□おさえてればいいじゃん」

やれやれまったく。この男には常識というものが存在しないらしい。

「まあそついうことだから……とりあえず報告はしたぞ。くれぐれも誰かに言ったりしないように！」

はい、と返事はいいが、信用しきれない。ほんと、こいつだけは。

<・傷つきやすいココロ>・……第十二話（前書き）

思い切ってタイトル変えました。

「True Love Story」 「すべて恋する少年少女」

言い忘れたが、僕にもフナキタには友人がいる。それほど深い付き合いはないが、何度かは友だちのついでで遊んだことがあるという街でばったり出くわしてしまったりすると多少話題に困る関係の男子だ。彼は 横田ジョースケは、たしかにフナキタに通いはしているものの、運動全般がからきし駄目で、百メートルは女子の平均にすら追いつかない。そんな彼がなぜフナキタに入学したのか知る由はないが、やはり女子が目当てなのだろうというのがもっぱらの見解なわけで。

そんな男子を総じて、女たちは「フナ虫」とか呼ぶそうだ。ひどいものである。

「おまえバイトしない？ 時給950円」

彼から突然そんな電話が掛かってきたのは梅雨入りする少し前のこと。

「はい？ 数年ぶりに電話を掛けてきたと思ったら、いきなりなんだよ」

「いやー困ってんのよ」

「なにが？」

「なにがって人手が足らんの。うちのばあちゃんが畑をこつそり駐車場に変えちゃったんだけど、管理する人がいなくて困ってるわけ」

「ふーん。自分でやったらいいじゃんか」

「おれは金あるから別にする意味ないもん」

一度でいいからそんな言葉を口してみたいものだ。今までとんと

興味がなかったが、こいつの家はボンボンなのかもしれない。

「それは僕が金を持つてなさそうに見えるってことか？」

「ちがうって。ただ南なら暇かなーと思ってさ」

「あんまり変わらないと思うが」

「とにかくさーマジで困ってんの。もし暇なら来てよ。めっちゃくちや楽なバイトだし。座ってるだけ」

「時給いくらって言ったっけ？」

「950円」

「……千円になんない？」

「無理無理。それでも高校生で950円ってかなり良い方だぜ？」

たしかにそのとおりだ。断る理由はひとつとしてない。

そんなわけで6月2週目の土曜日、朝10時に国道沿いの駐車場にてジョースケと待ち合わせた。彼と会うのは実に2年半ぶりだったが、そのぼてつとした体型がそうそう変わるわけもない。背は僕よりも3センチほど高いらしいのだが、横幅のあるせいか小さく見える。口は両頬の肉に押されて、赤ん坊のようだ。カラッとした緑色のポロシャツを着て、これから本格的な梅雨に入るというのに、肌はむらなく日焼けしている。その体軀はとても高校生とは思えない。まるでプロゴルファーみたいだ。

「よっ、久しぶり」

とジョースケは手を挙げる。

「久しぶり。どこのジャンボ尾崎かと思ったよ」

「誰がジャンボだよ　先週グアムに行ってきたんだ」

「へえ……って学校は？」
「休んだ」

ジョースケはそう言ってから僕をまじまじと見る。

「南は変わんねえなあ。少しは肉つけろよ」

「君こそ肉をそぎなさいな」

「おれはいいの。別に気にしてないし」

と言って手をひらひらと振る。どうやら体型について本人はまったくコンプレックスがないらしい。案内するから、と言って両腕を横に振りながら歩き、僕はそのあとについていった。

駐車場はひたすらにだだっ広い。思わず「うおっ」と声が漏れる。停まっている車の台数こそまばらだが、ゆうに三百台は入りそうだ。

ジョースケは手でひさしを作り、方々を見渡した。指までフルンクフルトみたいに脂肪をまとっている。彼は国道の方を指差した。

「そこにバスターミナルが出来るから、今後大もうけできるんだってさ。おれも詳しいことはよく知らないんだけど」

「本当に楽しんだらうね？」

「それは保証する。なんたって、車が来なけりやすることないからな」

ラッシュは朝と夕方、いちばん暇なのは昼だそうだ。土日は家族連れが多いが、平日ほど忙しくはないそう。常時2人の人間が窓口にいなくてはいけならしい。

「あとで紹介するけど、あそこにいるのがバイトの二人だから」

言われた方に目を向けると、そこには初老の男性と若い男がひとりいる。どちらもなんだか疲れた顔で、あまり生氣というものが感じられない。話では若者がジョースケのいところで、もうひとりとは定年退職して年金をもらうまで働きたいというおじさんだそうだ。

「うーっす」

オーナーみたいな顔でジョースケが事務所に入ると、二人は思わず立ち上がった。僕と同じ年の人間が社会的権力を持っているのを見ると、なんだかうまく飲み込めない気持ちになる。学校ではそんなに目立つ存在でもなかったのに。

「新しく入る人。南くん」

ジョースケが僕の背を叩き、僕はちょっとあわてて頭を下げた。はじめまして、よろしく、という声が頭の上を通り過ぎる。

「ジョースケの知り合い？」

そう尋ねたのはいとこの方だ。

「うん、そうそう。南、この人がヨシくん、あっちが石田さんだから」

と簡単に紹介を終えてしまうと、じゃあ頼んだよ、とジョースケはいずこやらに消えてしまった。前にいるヨシくとやはらは、僕を値踏みするような目でちらちら見ている。石田さんというおじさんは、僕に対して特に興味がないのか、事務的に仕事の手順を説明した。ひとつひとつの言葉を区切り、ゆっくりと話す。

「まず出勤してきたら、ここにあるタイムカードを押して、制服に着替えて、窓口の椅子に座る。お客さんが入ってきたら、駐車券を発券して、手渡す　以上。わかった？」
「はい」

と僕は答えた。それ以外になにか答えがあるだろうか？

とにかくジョースケの言うとおり、駐車場の仕事というのは退屈以外のなにものでもない。朝のラッシュはもう過ぎ去ってしまったようで、あとは家族連ればかり。土曜ということもあり、大概の人間に慌てた様子は見られない。小さな音で流れるラジオが眠気を誘うし、他の二人は必要以上の言葉をほとんど交わさない。

時計を見るたびにぐったりした。そろそろ一時間が経過したかなと思うと、実際は15分しか時計の針は進んでいない。壊れているんじゃないかと思うほどだ。ジョースケのいとは僕にわりと歳も近いはずなのだが、一向に話しかけてくる様子もない。なんだか暗そうな人に見える。ひげはボーボーだし、髪は長い。とてもサービス業に関わる人間の風体ではない。

それでも僕は思い切って声をかけてみることにした。とにかく耐え難いまでの退屈なのだ。

「……あの、いつもこんな感じなんですか？」
「え？」

とドロンとした目でこちらに顔を向ける。歳はたぶんハタチかそこらだろう。

「なんていうか、すごく暇だなあとか思っちゃいまして」
「うん」

沈黙。

「名前、なんだっけ？」

「あ、南です」

「下の名前は？」

「スグル」

「なんて呼ばれてんの、普段は」

「そうっすね……まあ大体が南とかスグルとか……」

「まんまか」

「はい」

多少は興味を抱いてもらえたことにほっとしながら、それほど緊張する必要もないんじゃないかと思えてきた。おそらくはみんな暇つぶし半分で金を稼ぎに来ているのだろう。客が来ないあいだ、石田さんは新聞を読み続けているし、ヨシくんは漫画を読み続けている。この僕も次回は小説でも持つてくることにしよう。

<t・傷つきやすいココロ>t・、……第十四話（前書き）

タイトルをカタカナにしてみました。
もう変えません……多分。

バイトが終わったあと、僕はヒナに電話を掛けた。このごろは、なにか小さくとも話題があれば電話を掛けるようにしている。彼女の方でも用がなくても電話が掛かってくる。でもこれが>付き合ってる<ということになるかと問われると、僕にもよくわからない。思い切って切り出してみようかといつも思うのだが、違うと言われるのが怖くて言い出せずにいるようなわけで。

「実はバイトを始めるんだ。ってか、もう始まつてる」

「なんのバイト？」

「駐車場の……なんていうんだろう、見張り？」

「……見張りは違うんじゃない？」

「うん。ともかく楽なバイト。今日もすることなくてぼうつとしてた」

「お金を貯めて、なにかしたいの？」

「いや、特にそういうわけでもないんだけどさ。ほら、朝子とかにも金返さなくちゃいけないし」

「君は将来、なにがしたいの？」

いきなり話が変わってしまった。ご存知のとおり、ヒナにはこういう質問を遠慮なくぶつけてくるところがある。でも彼女自身には悪気があるわけではなく、ただ純粹に疑問を感じるだけなのだろう。

「将来ね。どうしたらいいんだろうか」

「夢はないの？」

なんだかぎくりとさせられる。僕はなんとか話の筋を別へ向けるよう努力した。

「ヒナはなにになりたいの？」

「私は獣医になりたい」

「初めて聞いた。そうなんだ」

「うん」

数秒のあいだ、僕は沈黙する。最近では、会話がなくなることにもそれほど気まずさを感じなくなっていた。彼女は普通の人間とはどこか少しだけ違うのだと僕は思い始めている。無理して自分を取り繕ったり、他人のペースに合わせたりするような器用な人間ではないのだ。少なくとも。

僕はヒナに会いたくてたまらなくなってきた。彼女の声の一言一音を耳に入れるたび、心臓と連動しているみたいにドクドクと高鳴った。僕はこらえきれずに彼女を誘った。

「……今から会えるかな？」

「どこで？」

「この前の神社は？」

「いいよ」

僕は腕時計を確認した。これからだと、それほど長く会っている時間はなさそうだ。

「六時までに行くよ。でもお兄さんは怒らない？ 大丈夫？」

「お兄ちゃんは……あれからずっと帰って来てないから」

僕は言葉を失った。ほとぼりが冷めるということが、あの兄にはないのだろうか。

「……わかった。それについてはまた後でちよつと話そう。とにかく待ってるよ」

風が出ていた。湿気を孕んだ、どこことなく不吉な風だ。予報では曇りとなっていたが、雨の降りそうな気配。人気のない社では木々がざわめき、頭上では黒い雲がさかんに流れている。階段を上りきると、賽銭箱の前にヒナがぼつんと座っている。まだ制服を着たままだ。それまでうなだれるように両腕に顔をうずめていたのだが、僕の足音を聞きつけて顔を上げた。

僕は隣に腰を下ろし、先ほどのことを尋ねてみた。

「お兄さんは、あれからなんの連絡もなし？」

彼女はうなずいた。その目はどこもなくうつろに見える。

「一度決めたら、それを簡単に崩したりはしない人だから」「そうだろうね」

僕はなにかいい方法がないものかと頭をひねらせた。でもどんな考えも浮かばなかった。正直なところ、今すぐ彼女をこの腕に抱きたいと、そればかりが頭の中を満たしていたからだ。

つらそうな顔をして、ヒナはなにかの言葉を口にしかけた。でもそれは言葉にはならず、ためらいの息として吐き出された。やがて彼女はなにも言わず、僕の胸に顔をおしつけた。僕もなにも言わず、彼女の背中に腕を回した。

「お兄さんはきっと、ヒナのことを誰よりも愛してるんだろうね」

「どうしてそう思うの？」

「だって、じゃなければそんなに怒ったりしないもの」

ヒナの柔らかい肌の感触で頭の中がいつぱいになり、しばらく彼女が泣いていることに気がつかなかった。僕ははっとしたけれど、気づいたところでどう言葉を掛けていいものかわからなかった。兄が出ていったことで、きっと彼女もつらい思いを抱え込んでいたのだろう。誰よりも僕自身がそれをいちばんに察してあげなければならなかったのに。

「泣いていいよ、いくらでも」

僕がそう言つて、彼女は初めて笑った。泣き顔を見せたくないのか、顔を上げなかったけれど、笑った振動が僕のお腹に伝わる。温かい吐息が僕の胸に広がる。

「……言つてて恥ずかしくならない？」

そう言われて、初めて恥ずかしさというものが込み上げる。どうやら抱擁力というのは身に着けようとして備わるものでもないらしい。

「恥ずかしいけど、好きだから」

「もう少し恥ずかしがったら？」

言葉自体は皮肉っぽいけれど、その声に責めるような調子は見られない。その証拠に、ヒナの腕が僕の背中にまわり、強く締めつけた。僕は長いあいだ、本当に長いあいだ抱き合っていた。他のことはなにも考えられなかった。

しばらくして雨が降り出さなければ、僕らは永遠に抱き合っていたかもしれない。というか、それが可能であるならば、本当にそうしたはずだ。

「濡れちゃう」

と僕はつぶやいた。けれどヒナは僕から離れようとしなかった。

「本堂に入って、少し雨宿りしよう」

「怒られない？」

「平気だよ。誰も来ない」

掛け金を外し、僕はいちおう中をのぞいた。人の気配はないが、なんだか薄気味悪い。床に敷いてある畳だけが新しく、他に調度品と呼べそうなものはなにもない。ただのがらんどうだ。それでも濡れてしまうよりはましだからと、僕は彼女の手を引いて中に入った。

「なんだか悪いことしてる気分」

僕もそんな気持ちだった。でもそれ以上に、恋する相手と二人きりというシチュエーションが、僕の胸を高鳴らせていた。部屋のすみっこに並んで座り、僕は唇が届きそうなくらいまで彼女をぐつと抱き寄せた。

ヒナは一度顔をそむけ、それからゆっくりとこちらを向いた。柔らかな唇の感触に、僕の息は乱れた。

「好きなんだ」

「……私も」

消え入るような声で彼女は言った。僕は心臓が破裂しそうになっていた。

「私も、なに？」

「……好き」

もついちど唇を重ね合わせ、舌と舌を絡み合わせた。遠い雷が、くぐもった雨音の上を走った。夕立独特の、包み込まれるような霏沱気がそこにはある。むっとする空気の中、右も左もわからぬ無明の闇の中、僕らはただひたすらに相手を求めた。

彼女の胸に手を伸ばしたいという欲望が、すでに抑制の効かないものになっている。ブラウスのリボンが僕の首筋をくすぐり、それを払いのけるふりをして、紐をほどいた。彼女は一瞬だけ抵抗のようなものを見せた。でも僕の手がブラウスの襟をくぐると、ヒナは体の力を抜いた。

「いいの？」

そのまま手を伸ばしてしまうこともできたけれど、僕は結局そう訊いた。彼女を傷つけてしまうことがなにより怖かったからだ。

ヒナはまっすぐに僕を見据えた。それは不実な恋人を責めるようでもあったし、どうしようか真剣に迷っているみたいでもあった。そのままとても長い時間がすぎた気がする。ただ雨の音だけが、沈黙を埋めるように本堂を包んだ。

やがて彼女は、こくんとだけ肯いた。

ふたたび唇が紡がれたとき、僕は彼女の胸元に手を伸ばした。その柔らかな感触に頭がくらつく。僕の指先が乳首に触れると、ヒナはぴくんと体を震わせた。僕は彼女の体をゆっくりと床に寝かせ、ブラウスを完全に取っ払ってしまふ。薄闇の中に、彼女のほっそりとした鎖骨と白い胸が浮かび上がる。僕はゆっくりと首筋を舐め、円を描いて乳房を愛撫し、桜色の乳首を舌先でなぞる。まるで他人の体に移ってしまったようだ。現実味がない。

僕は彼女のスカートの中に手を入れた。するとヒナはあわてて僕の手をつかみ、訴えるように言った。

「待って。お願い」

僕は肯いた。そしてヒナの体を起こし、壁に背をあずけて見るともなく反対の壁を見つめた。手が震えている。自分の体に移ったなにかの感触が、まだ体にリアルに残っている。本当に僕の手がヒナの胸に触れたのか？ 本当に僕の舌が 信じられない。

僕は本当に困惑していたんだと思う。ほんの数秒のことだけれど、僕の脳みそは信じがたい被害妄想を容認した。この部屋にいるのは本当は自分ひとりで、今までのなにもかもはすべて妄想だったのだと。

落とし穴にも似たそんな白昼夢のせいで、部屋が沈黙に包まれていることに気づくのにならなく時間がかった。僕らは長いあいだ言葉を変えなかった。まるで二人のあいだにあった大切ななにかが失われてしまったとも言つように。

静寂を埋めるように、雨音が一段と強さを増していく。まさにそのとき雷が鳴り、ヒナの青ざめた顔が絵の具をさつと引いたように

暗闇の中に浮かび上がった。その瞳は涙を浮かべていた。

「……………どうして？」

それはおそらく僕の声だった。彼女はなにも答えなかったし、まだ僕をまっすぐに見据えていた。どういうわけか胸がえぐられる思いだった。

僕はヒナの涙を指先でぬぐい、彼女の体を抱き寄せた。しかしそこからやはりなにかが失われていた。親密味といった言葉では括れない、大切ななにかが。そしてその特殊な喪失感は決して僕にだけ芽生えていたわけではない。それは僕にもわかつているし、ヒナにもわかつている。

僕らはなにかに穢されていた。幼く清い心についた初めての穢れだ。

なにか言いたかった。なにか言わなくてはならなかった。慰めになる一言、ごまかす一言、励ます一言を。ただ実際には僕も穢れを感じていたし、それも彼女はわかつていた。だからどちらとも口を開かなかったのだ。互いを思うあまり、その痛みがわかるあまりに。

よそよそしい抱擁は、沈黙と同じように長く続いた。やがて僕の口から出た言葉は、思いとは裏腹のものだった。

「そろそろ……………帰ろうか」

気づくと雨は止んでいた。軒先からぽたぽたと垂れる雨粒が羊歯を打ち、林の中で鳥が甲高い声を上げた。きつと雨が上がったこと

を喜んでいるのだろう。彼女はひとりで歩き出し、僕はそのあとを追った。階段で別れるとき、口の中でさよならを言った。その声が彼女に伝わっていないことは明白だった。なにしろヒナは、はるか先の通りを曲がるまで一度もこちらに振り向かなかったのだから。

七月第一週、梅雨にもかかわらずお天気マークが一週間ずらりと並ぶ。そして初めての給料日だ。しかるべき準備　つまりは気分を高揚させる音楽、ルトヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの「交響曲第九番第二楽章」を聴きながら、僕はゆっくりと給料袋を開いた。それは僕が生まれて初めて手に入れた、本当の意味でのお金だ。

とまあ大げさなことを言ってしまうとそうなるのだが、ともかく十一日間の勤務で六万円弱のお金を手にすることができた。楽して稼ぐのが利口だとは思わない。けれど小説を読んでいるだけでお金が入るのであれば、まあ今のうちにはそれに越したこともないだろうと思うわけで。

あの日から、僕とヒナは連絡を取り合っていなかった。多分、それは間違ったことなんだろう。僕はあのあとすぐにでも、彼女に電話するなりメールを送るなりしなければならなかったのだ。一日経てば、また明日でもと思う。三日経てば、来週にでもと思う。そうして人は徐々に離れて行く……そうわかっていながら、どうして電話しないんだろう？　おそらく僕は自分が傷つくことを恐れているんだと思う。

そんな僕を朝子が怪しまないわけではない。そう思って食事の時間をさりげなくずらしていたのだが、とうとう土曜の朝にかち合ってしまった。なんとも察しの良い姉である。僕が自分を避けていることをとうに知っていたらしく、出かけたと母に偽らせておいて、僕が食卓につくなり、猫のように俊敏に母屋に入ってきた。

「お母さん、おはよう。……あら、あんたもいたのね」

「いちゃ悪いかよ」

と僕が返す。朝子は気持ちの悪いくらい愛想の良い顔をして、僕の真向かいに座った。

「さーて、じゃあどうして最近あたしを避けるのか、その理由を教えてもらおうかしら？」

「別に避けてねーし」

「嘘つき。なにかあたしに後ろめたいことがあるんでしょ？ 雛子ちゃんのこととか」

ここまで来ると、もう超能力が備わっているとしか思えない。その能力をもつと世の中のことに使えばいいのに。

僕はため息をひとつつき、後ろにいた母をちょっと見やった。ここで本当のことを話すには、いささか抵抗がある。僕は朝子に向かってかがみこみ、ささやき声で言った。

「……あとで部屋に行って話すよ。ここじゃちょっとなんだから」

「なによ。そんなに深刻なの？」

「まーね」

「あんたバカじゃないの？」

ビンタが飛んで来なかったただけマシと言っべきかどうか、僕が事の次第を話し終えるなり、すつと息を吸い込み、朝子は物凄い剣幕でそう怒鳴った。

「じゃあ自分が代わってみろよ」

「本当に代わりたいたい。そうできるならね」

なにか反論したかったが、ひとつもそれらしい言葉は見つからなかった。じゃあ僕はどうすればよかったんだ？

「要するにあんたは自分が惨めな気分になるのが嫌だっただけ。自分がかわいくて、自分が傷つくのが怖くてそうしたの。雛子ちゃんのことなんかこれっぽっちも考えずにね」

「考えてるよ。毎日考えてる」

「だーからー、あんたが考えてるのはどうやって自分が傷つかずに彼女と仲直りできるかどうかってことなの。それくらい自分でわかんないの？」

「仲直りっていうか、別にケンカしたわけじゃないんだけど……」

「ケンカの方がまだマシね。あんたもしここでなにもしなかったら、もう二度と雛子ちゃんに会えないかもよ」

僕は言葉を失った。脅しを真に受けたとかそういうことでなく、朝子の言葉には少なからず真実味が備わっていたからだ。時間が解決してくれる。そんな仄めかしや気休めを頼りにしていた僕にとつては強烈な一言だった。

「それもあんたはね、自分が雛子ちゃんを傷つけたことにはこれっぽっちも罪悪感を感じてない。向こうはあんたを傷つけたと思い込んで泣いてんのよ？ その涙のわけがどうして理解できないの、このグズ」

「ひどい言われようだ」

「あつたりまえでしょ。弟じゃなかったら病院送りにしてるわ」

カウチソファから前のめりになって僕を見据えていた朝子は、そ

う言い切ると鼻を鳴らして顔を背けた。それからすつくと立ち上がり、実に姿勢よく玄関の方へと歩いていった。

「……そんでおれはどうしたらいいの？」

「好きにすれば。あたしが姉として言うべきことはすべて言ったんだし、あとは自分で考えなさい。……それから貸してる分は給料袋から引かせてもらいましたから」

「ええ？ あれ？」

朝子がぐるりと振り返る。その顔にはもはやお決まりの小悪魔的な笑みが浮かんでいる。

「あたしがなにも知らないと思ったたら大間違い。アキタカ君からの電話もないのにあんたが毎度々々週末に出かけるわけないじゃない。あんたもあたしになにか隠し事をするなら、もう少しやり方つてものを覚えるべきね。おあいにくさま」

玄関口にひらひらと振った手をのぞかせて、ドアがボタンと閉じた。あわてて給料袋の中をのぞいて見ると、労働力にして約17時間ほどのお金が抜き取られている。思わず壁に向かって「鬼ババ」と叫びそうになったが、冗談にしても今は相手の気が立っているのやめておいた。

というか僕自身、朝子にはつきり言われることを望んでいたのかもしれない。もしかしたら僕はいちばんしてはいけないことをしてるんじゃないだろうか、とそんな不安があったからだ。でもなんて言えばいいんだろう？ 謝ればいいってものじゃない。だからと言って、慰めるものでも、笑い飛ばせるようなことでもない。

こういうとき、言葉って不便だ。本当に。

<・傷つきやすいココロ>;……第十六話

一晩経つても考えはまとまらなかった。何度もヒナに電話をかけようとして、寸前で思いとどまった。朝子の言うとおりだ、僕は傷つくのを恐れている。彼女にさよならを言われるのが怖くてしょうがない。しかもその半分だって、自分の中の自尊心みたいなものが失われるのを恐れているのだ。僕はどうしようもないやつだ。

「また暗い顔して。顔に苔ができてるぞ」

苔ができるのではなく、痩けるのだ。そんなつつこみすら面倒になる今日この頃。ひとつだけ言えるのは、この声の主にはとても青少年の悩みは理解できないし、誰がなんと言ったって理解してみようとも思わないだろうということ。

「……まあ、梅雨だからな」

「そうだよ。苔なんか生やしてないで、もっと周りを見る。そこらじゅう濡れてて」

「それ以上は言わせん」

「じゃあツヤツヤしてて」

「ああもう。今日はおまえにかまってる気分じゃないんだよ。誰か他の人んとこ行ってくんない？」

「勘違いすんな。かまってるのはおれの方だ。それに前の席なんだからしょうがねえだろうが」

地獄より深いため息が出る。確かにアキタカ存在は精神的に気休めにはなる。けれどそのせいでまた結論を延ばそうとしてしまう僕がいるわけで。

「保健室でも行こうかな……胃が痛くなりそうだから」

「いいのかな？ 次は恵子先生とのラブラブレクチャーだというのに」

「だからなに？」

僕の開き直りに、アキタ力は驚愕を超えて怒りすら覚えたような顔をする。

「ハア？ おまえこそなに？ この退屈なカリキュラムの中で、あの恵子先生とお喋りできるせつかくの貴重な時間を逃してもいいってのかよ」

「あのなあ、忘れたのか？ あの人には」

そこまで言いかけてハツとした。恵子先生に彼氏がいることを知っているのは全校でおそらく僕だけなのだ。しかもその彼氏が、たった今黒板の前で小さく何事かをつぶやき続けている東野教諭だとは、アキタ力はもちろんのこと全男子生徒は夢にも思っまい。朝子だったら僕の不自然に中途半端なセリフで、事の次第のほとんどを感じてしまっていただろう。相手がアキタ力なら大丈夫だと思うのだが……。

「忘れるもんかい。あの人には胸がある。ちなみにおれのスカウターはレベルEを表示している」

バカでよかった。本当によかった。

「……っっておまえとふざけてる暇はないんだよ。こっちは考えごとがあるんだから」

「じゃあ言ってみろよ。キスの次はなんだ？ 今度は妊娠させたか？」

「身もふたもない言い方はよしやがれ。それにちよつと声が大きい」

「別にいいじゃん。もうみんな知ってるんだし」

「は？ なにがだよ」

「おれがおまえに代わって自慢しといてやったから、キスのこと。ありがたく思えよ」

オレガオマエニカワツテジマンシトイテヤツタカラ、キスノコト。

バカはよくない。本当によくない。

「おまつ……嘘だろ？」

「いやいや、ほんと。ちゃんとチェーンメールも作つといてやったから」

その瞬間、教室の天井が崩れ落ち、僕は瓦礫の下で咆哮をあげた。

「……おまえチェンソーで上半身と下半身をバギーにされたいのか？ それとも気円斬で体を真つ二つにされたいのか？」

「それどっちも同じだろうが」

「ボケで言ってるんじゃない。マジで言ってるんだ。おまえはなぜそういうことをする？ あれほど人には言っなときつく言っておいたのに」

「え、だってあれフリでしょ？」

なぜ普通高校に通う普通の男子高校生がリアルでNSCさながらのバラエティに生きなければならんだ。たぶんそのことを一から十まで説明したところで、この男には嘔吐と放送禁止用語がNGということ以外はなにひとつして理解できないのだろう。

「おれに言えることはひとつ。たった今お前はひとりの友を失った」
「待て、待ってくれケンシロウ」

「おまえはもう死んでいる」

あ、あべし！　と言ったかどうかは知らないが、僕はアキタ力には一瞥もくれずに手を挙げ、良心の塊である東野教諭に体調不良を訴え、さっさと保健室へと向かった。

ちなみに我が校の保健室の先生は、よくドラマやアニメに登場するような見目麗しい色気ある女医などでは全然なく、「おばあちゃんのパッケージから抜け出てきたかのような中年女性である。本来、保健室の先生ほど生徒の体調について疑り深い目を向ける者はないはずなのだが、彼女はこちらがまだ言いわけがましいことを口にする前からすでに診断書に適当な文を記し始めているからありがたいことこの上ない。だがその優しさからか、保健室登校を助長しているとの意見も多い。

「暖かいからっておなか出して寝ちゃだめよ」

そう言っ僕に布団をかけてくれる。先生、あなたの優しさがなにより温かいです。

どんな悩みにも、いずれ眠りはやってくる。しかし目をつぶっていても苦悩から目をそらすことはできないのか、ゆりかごのように半覚醒とレム睡眠が繰り返される。意識が混濁し、時間の経過が不明瞭になる。

……鐘が鳴り、廊下が騒がしくなる……誰かが保健室に勢いよく飛び込んできて、意味のないことを大声でまくし立てる……鐘が鳴り、廊下が静まり返る……誰かが静かに入ってきて、聞き取れない

声で先生と会話する……僕の隣のベッドに寝かせられ、聞こえた咳で女子だとわかる……先生が保健室を留守にしよう……僕と彼女だけが残される……長い沈黙に、二人の息づかいだけが聞こえる……僕の心臓は意味もなく高鳴る……いや、意味があつて高鳴っている……二人のあいだにあるものは、薄い白のカーテンだけ……。

「……南先輩、ですよね？」

淡い夢が消え去り、黒ひげ危機一髪のような驚きの現実が突如として姿を現した。おかげで僕は口の中に溜まっていたよだれを喉につまらせ、密かにあえいだ。まさかこんなところで、しかもこんなシチュエーションで夕美と鉢合わせてしまうなんて。

「勝手に診断書を見ちゃいました。すみません」

「いや、いいけど……風邪？」

「生理痛です。さっき突然始まっちゃって」

そういうことはもう少し恥じらって言うべきだと思うが。しかしまあ男の僕からそんなことを忠告するべきではないのだろう。

「そっか。じゃあゆっくり休んだ方がいいね」

「……お話できませんか。少しだけ」

「ど、どんなことだろう？」

「南先輩、ヒナと付き合ってるんですよ。キスしたって、そう聞きました」

アキタカへの比類なき怒りがふたたび湧き起こってきた。奴には人を修羅場にする呪いの力でもあるんじゃないだろうか。それにしてもカーテン一枚をへだてるだけで、これほど彼女の言葉に重みが増すとは。

「……うん、したよ」

僕が口ごもりながらそう答えると、夕美は楽しげに笑った。もちろん表面上は、ということだが。

「私、自分がフラれたってことはよくわかってるんです。そりや泣きましたし、ちよっぴり自信も失いました。私ってダメですよ、ほんと。佐野先輩だって加奈子に取られちゃうし、南先輩もヒナのものになっちゃうし……あーあ、もったかわいく生まれてくればなあ」

彼女が涙し始めたことはよくわかった。そしてそれを必死に隠そうとする姿は、あまりにも痛々しく健気に見えた。僕は自分がなにをしようとしているかもよくわかっていた。なにをしてやりたいかということも。

「あ、そうだ。南先輩さっそく私と浮気しちゃいます？ ほら、やっぱり恋愛ってそういうのも楽しいじゃないですか。あ、でも私みたいなブスじゃ嫌ですよ。ていうか引いちゃいました？ 引いちゃいましたよね？ それじゃ、そろそろ教室戻ってきます。これ以上南先輩に嫌われ」

僕はカーテンを引き、彼女の体を抱き寄せた。夕美は小さな悲鳴と共に不恰好にベッドとベッドのあいだにくず折れ、僕はそれでも強引に彼女の体を抱き寄せた。

「痛い……」

「ごめん。本当にごめん。でもひとつだけ言いたいんだけど、君は十分かわいいし、僕を好きになるなんてもったいないって思う。言

いわけや仄めかしじゃなくて、本当にそう思ってる。だから……」

彼女の小さな手が僕の口をふさいだ。夕美はあらためて僕のベッドに腰を下ろす。目と目が合い、彼女の両手が僕の腰に回る。その温かい吐息が、僕の耳を撫でる。

「もう大丈夫です。でもひとつだけお願いしていいですか？」

僕はうなずいた。

「……私とキス、してください」

&1t・傷つきやすいコロロ>t・、……第十七話（前書き）

ようやくすべてのプロットが完成！

今さらで大変申し訳ないのだが、僕のファースト・キスの相手は白石雛子ではない。あまりにも遠い記憶のことなのですっかりと失念していたが、初めてキスを体験したのは小学校に上がる少し前のことだ。大人びているといえば大人びているのかもしれない。それは十年経って今なお特別なキスだ。

彼女の名前は渡辺サヤ。僕の家のはす向かいに住み、母子家庭だった。しかし不思議なことに彼女の母親には会った記憶がないし、話した覚えもない。いったいどうやって彼女と知り合ったのかも今になるとよくわからない。あれだけ近くに住んでいながら、学校だっけというわけが別々だったのだ。おそらくは近所の公園かどこかで意気投合し、そのまま親しくなっていたのだらうと思う。

サヤちゃんは明るく、背が高く、それでいて天使のようにかわいらしい子だった。古い記憶だから、多少あいまいに色づけされているかもしれないが、その出会いは僕にとって衝撃だった。なにしろ異性とまともに言葉を交わすことすら初めてだったのに、その相手がとても見目麗しいときているのだから。

サヤちゃんはフォレスト・ガンブにとってのジェニー・カランであり、幼き僕にとって女性の理想となりつつあった。正確には、大人になっていく過程で幾度となく彼女を思い浮かべ、彼女を無意識のうちにひとつの座標としたのだ。だから恋心を知らぬ当時の僕にとって、サヤちゃん存在は手の届かない場所に置かれた近未来の

玩具のようなものでしかなかった。そんなものを自分が手にすることができるとは微塵も考えなかった。

よって彼女から発せられる自然な好意にも到底気がつかなかったわけ。そんなある日、僕の部屋のベッドで（彼女の部屋には普段決して上がることができなかった）トランポリンごっこをしていて、僕はサヤちゃんを怪我させてしまった。冗談で押したつもりが、彼女は片足をベッドから踏み外してしまったのである。

サヤちゃんは必死で涙をこらえていたけれど、僕は自分が取り返しつかないことをしてしまったとわかった。でもごめんという言葉がうまくでなかったと記憶している。それまでの楽しかった親密な空気は消えうせ、世界中がしんとしてしまったようだった。僕はベッドの上で呆然と立ち尽くし、彼女は涙をすすするような音を出した。

「……ううん、平気平気」

首を振りながら、彼女はそう言った。でも全然平気じゃない。誰あろう僕自身が傷ついてしまっていたのだから。

僕は怪我した彼女を家まで送った。まだ昼を少し過ぎたくらいの時間だったけれど、とてもこれからまた同じように遊ぶことはできないと知っていた。サヤちゃんは僕に気をつかって懸命にとりめのないことを話し続けていたけれど、僕の方はぼんやりと相づちを打つくらいのことしかできなかった。

彼女を家の玄関まで送り、ひとりぼっちになってしまうと、寂しさよりも惨めな気分になった。胸をぎゅっと絞られるような、立っているのもつらい心境だ。帰り道に僕はすすり泣いた。鼻水をだら

だらと垂らしながら、それでも嗚咽を懸命に抑えて。

それから僕たちが遊ぶことはなくなった。どちらも互いの家のチャームを鳴らそうとはせず、それぞれの同姓の友だちと、また元のように遊ぶようになった。でも近くに住んでいるのだし、一生顔を合わさないというわけにはもちろんいかないから、ある日に僕らは公園で再会してしまった。

サヤちゃんの姿を目にすると、僕の心臓は高鳴った。向こうがこちらに気づき、目と目が合うと、より鼓動が強くなった。サヤちゃんは一步か二歩、じりじりと後ずさりすると、両手で顔をおおい、わっと泣き出した。彼女を取り囲んだ女の子たちはわけがわからないという風に、「サヤちゃんどうしたの？」を繰り返した。

でも彼女はなにも説明しなかった。その姿を見て、僕の胸はこれ以上ないほどにぎゅっと押された。

その日の夜のことだ。僕はわけを説明して母と連れ立ち、サヤちゃんの家のチャームを鳴らした。母はサヤちゃんのおばさん（やはり顔は覚えていない）となにかを話し、僕は背中を押されるような感じで、二階にあるサヤちゃんの部屋へ通された。そのとき僕が考えていたのは、彼女に向かってどういう風に謝ろうかということだった。緊張がピークに達し、後ろから聞こえてくる母やおばさんの声が現実味を欠いて頭にわんわんと響いた。ドアをノックする。サヤちゃんの小さな返答が聞こえ、僕は部屋の中に足を踏み入れた。

サヤちゃんはどんな部屋に住んでいるんだろう？ そんな風にときどき考えることのあった僕は、その夢のような部屋に息を呑んだ。茶畑を思わせるグリーンの絨毯、ふわつとしたクリーニング屋の前でかく香り。室内のあちこちにクマやキツネのぬいぐるみが飾られ、

たくさんフリルのついたドレスや、子供らしからぬシックな洋服がクローゼットに収まっている。小さなふかふかのベッドにはピンク・レースの天蓋がついており、枕のすぐ上に、写真が山ほど飾られていた。

サヤちゃんはベッドに腰掛け、僕に背中を向けていた。足をぶらぶらさせているのか体を少し揺らし、なにかに向かって屈んでいる。僕はなにかの言葉　おそらくは謝罪の言葉を口にしながら、彼女の方へ歩み寄った。そのうちに、小さな音色が聞こえてきた。オルゴールだ。近づいてみると、彼女がオルゴールに耳をつけていることがわかった。

僕が呆然と彼女の後ろに立ち尽くしていると、サヤちゃんは顔を上げて僕を見た。哀しそうな、それでいてむずがっているような顔だ。それから自分の座っている隣をちよつと見て、「座っていいよ」と言った。僕は言われたとおり彼女の隣に腰を下ろした。オルゴールが奏でていたのは、「エリーゼのために」だった。

長い沈黙。そのうちにオルゴールはゆっくりと力尽き、深い静寂が訪れた。彼女はまた涙をすすった。でも今度は泣いているわけではなかった。僕の方に思い切って顔を向け、その表情をうかがった。そのとき僕は決心して、サヤちゃんにごめんと言った。

他にもなにか言ったかもしれないが、今はよく覚えてない。とにかく彼女は、それで天使の笑顔を取り戻した。恥ずかしそうに微笑みながら、僕の手を握り、そして口にキスをした。その後、僕が何度その感触を思い出そうと心がけたことだろう。でもあまりに一瞬のことだったし、そういう思い出に限って人はよく思い出せなかったりするものなんじゃないだろうか。

とにかくそういう風にして、また僕らのあいだに友情が戻った。

でもそれからしばらくして、サヤちゃんは遠くに引っ越してしまい、僕もやがては家族と一緒にそこを離れた。数度の手紙のやりとりはあったが、それも長くは続かなかった。送られてくる手紙には必ず何枚かの写真と、手書きの絵が添えられていて、そのうちのいくつかは今でも僕の学習机に大事にしまっておいてある。

誰にでもやはり、忘れられない土地というものがある。中学校の夏にひとりでその地を訪れ、高層マンションが立っているのを見て驚かされた。公園は遊具こそ新しく造りかえられたが、敷地は今でもそのまま残されている。僕はマンションの金網を乗り越え、そこで半時間ほど内省にふけた。それが僕とサヤちゃんの最後の思い出だ。

というわけでいささか説明が長くなってしまったが、ヒナとのキスが僕の初めてというわけではない。浮かれた心が落ち着きを見せたとき、ふとサヤちゃんのことを頭に思い浮かんだのだ。誰かとしたキスのことをいちいち勘定しているなんて、アキタ力が知ったら一笑にふされることだろう。僕だって十年後にはそんなものを勘定していいかもしれない。けれど少年期を語る上では決して外せないポイントでもある。改めて訂正させてもらえるなら、初めてがサヤちゃん、二度目がヒナ、そして三人目の相手が相田夕美ということになる。

<・傷つきやすいココロ>・……第十八話（前書き）

第三章をキリよく終わらせようとして、少し短くなってしまいました。
すみません。

<傷つきやすいココロ>;……第十八話

どんな言いわけを並べてみても他人には理解してもらえないということが、人生には往々にして存在する。そういう場合、常識のある人間であれば、初めから言いわけをせずに、黙って相手の非難に耐えるだろう。ずるがしこい人間はうまくごまかすとか、誰か他人のせいにしてしまうかもしれない。でも自分をごまかせるかというと、案外そううまくもない。というかそんなことをまかり通してしまう人間はどう考えたってまともな神経の持ち主ではない。ドストエフスキー風に言うなら、根っからの卑劣漢というところだろう。

さて、そんなわけで、僕は罪の意識よりもそんな自問自答を繰り返している。なにが正しくてなにが間違っているかなんて、所詮明確な線引きはない。できることならそんなものは考えずにいたい。けれどこんな風にならない駐車場の景色を何時間と見せられていると、嫌でも頭に思い浮かぶ。一度思い浮かんでしまえば、本を読むことにも集中できなくなる。誰か話し相手が必要だ。誰か、自分以外のまともな話し相手が。

「……それでおれに話した、とそういうことが……」

ヨシくんは顔に戸惑いを浮かべてはいたものの、ちよっぴりと頬を赤く染めた。普段他人に相談事を持ちかけられることが少ないからだろう。もしかすると嬉しかったのかもしれない。

「でも誰にも言わないで下さいね、ほんと」

「うん、大丈夫。口は堅い」

「自分でも結論というか、どうしたらいいかってことはわかってる

んです。……でも身動きとれなくて」

「うーん、なるほど……なるほどなるほど……」

「背中を押して欲しいとか、間を取り持って欲しいっていうわけじゃないんです。ただこの気持ちを誰かにわかってほしかったっていうか」

たぶん、あくまで推論ではあるが、ヨシくんも頭の中では朝子と同じようなことを思ったのだろう。「それは逃げだ」とか「男らしくない」とか、そういうことを。しかしバイトで退屈な勤務時間を共有するにあたって気がついたのだが、彼は見た目とは裏腹に心優しい人物である。とてもそういうことを他人に向かって正直に口には出せないのだろう。

そんな葛藤が彼の心のうちであつたのかなかったのか、諦めに近いため息を吐いて、彼は一言こう言い放った。

「……青春だな」

「ええ、青春ですね」

僕もこう言つた。それから束の間の沈黙を挟んで、僕らはぶつと吹き出した。

「うちの妹もさ、まあこいつがおれに似ても似つかないくらい美人なんだけど、そのせいか年中オトコをとつかえひつかえ。たぶん南の言うような悩みもないんだろうな。たまにここにも来るんだけどさ……」

「妹さんいたんですね」

「ていうかうち四人兄弟」

「へえ」

「しかもおれ長男」

「おわっ、マジっすか？」

「マジマジ。まあその妹だけは腹違いなんだけどね」

そう言つとヨシくんは煙草に火を点け、哀愁深げに煙を吐いた。

「……まあ人には色々あるんだよね。おれにも南にも、誰にでもさ」

僕はその夜、勇気を振り絞つてヒナに電話をかけた。ほとんどやけっぱちで発信ボタンを押すと、途端にそれまで考えていた言いわけは混乱の渦に飲み込まれてしまった。でもそんな言いわけを考える必要など始めからなかったのだ。彼女の携帯電話はすでに解約されていたのだから。

オカケニナツタバンゴウハ、ゲンザイツカワレテオリマセン。

ベッドに潜り込んでからずっと後悔し続けていた。ようやく後悔し始めたと、そう言つてもいいかもしれない。でもそれを過ぎると、今度は悔しさが込み上げてきた。こんなに彼女のことについて悩んでいたのに、当の本人は僕のことなどあっさりと忘れてしまったように思えたからだ。実際はそうじゃないかもしれない。でもそのとき僕は、この苦しみから早く解放されたかった。そのためにいちばん楽で手っ取り早い方法は、彼女を浅はかで子供じみた女と軽蔑することであつた。

&l t・電話を切る前にサヨナラを&g t・……第十九話（前書き）

お待たせしました……すみませんo r z

&1t・電話を切る前にサヨナラを> ; …… 第十九話

一学期のうち、いちばん長く苛立たしいのが七月だと僕は思う。察しのいい方ならわかると思うが、さて七月の終わりからなにが始まるだろうか。そう、トーゼン夏休みだ。毎年毎年似たような自堕落な長期休暇を過ごし、あつと気がついたころには九月がもうそこまで迫ってきている。水着やバカンス、浴衣に夏祭り、そんな幻想もいつの間にやら儚く消え去り、後に残るは宿題の山。……ああ、無情。

だがしかし今年こそはと意気込むことに意味がある。そこに夏休みのすべてが詰まっていると言っても過言ではない。ひとつ確かなことは、ちゃんと事前に色々と計画しておくことだ。

「……というわけで今から色々決めておきたいわけなんだが」

めずらしく熱弁をふるう僕を見て、アキタ力はいつも以上になんだか気のない顔をしている。こういう温度差って、どちらにとっても迷惑極まりない。

「いーじゃん別に。夏休み入ってからで。……ていうかなぜ童貞のおまえなんかと夏休みをいっしょに過ごさなくちゃならねーんだ」

ちょっと待て。童貞は余計だ。

「じゃあ君は誰とどうして過ごすんだね？ まさかあの下級生」

「あーあー聞こえない聞こえないー」

自分の醜態をさらすのには多少の抵抗があるらしい。人の秘密は

あれほど嬉々として周囲にバラまくせに。

「じゃあ上級生か？ あ、なんだっけ、名前は忘れちゃったけども。毎週土曜に遊びに行ってるっていう」

「あーあれならもう別れた」

「ええ、なんで？」

「会いたい会いたいってしつこいからフッてやった。めんどくせーんだよ、あの女」

開いた口がふさがらないとはこのことだ。あれほど足しげく通っていたというのに、気に入らなくなると簡単にポイするとは。

「……おまえ将来ろくな大人にならんぞ」

「ろくな大人にならないように、今のうちにろくでもないことをし尽くしとくんだよ」

説得力があるのだからいいのだか。同姓に対してはいい加減なところもあるにせよ、常識ある付き合いができるくせに、なぜ異性にはこれほどサバサバと冷徹になれるのだろう。

僕がそんなことに頭を悩ませているのもおかまいなしに、アキタ力は物憂げなため息をついて窓の方に振り返った。やつがこういう顔をするときに口にする言葉は大体見当がつく。

「……恵子先生は夏休みをどうして過ごすんだろっな。やっぱりと夏の情事とかあるのかなあ？ 大人だもんなあ」

「誰に向かって話しかけてるんだ、おまえは」

「おれもけっこう大人になったと思うんだけど……ハア。やっぱり恵子先生を抱くにはもう少し男を磨かねばならんのだろうか」

昼休みの生暖かい風がふわりとアキタカの前髪を撫でる。校庭からは心の琴線に触れる女子たちのにぎわい。あ、とアキタカの短い一声のあと、僕の目にも日下部京子が映った。目に新しいボーイッシュなショートヘアが、それはそれで胸にどきりとくる。

「へえ。日下部先輩、髪切ったんだ」

「……チャンス」

「は？ なにがやねん」

「女が髪を切る、それすなわち男にフラれた証」

「一昔前のマンガじゃねえんだから。掘北真希とかいるし、そういうの影響だろ、っておい」

いつかどこかで見た光景。僕が話し終える前にアキタカは教室を飛び出した。どこに向かったのかはもはや言うまでもない。三十秒と経たないうちに窓の下に見たことのある頭かたちが登場する。

しかし日下部京子が属する、あの見目麗しい女子グループにひとりで突っ込んでいく気だろうか。いくら馬鹿でも羞恥心くらいは持ち合わせていて欲しいと真剣にそう願う。そういうのはバラエティ番組でちよつと見るからおもしろいのだ。現実世界で始終そんなことをしていても、本人は元より周りの人間の神経が持たない。

しかしそこはさすがのアキタカである。上級生にあれほど尻尾を振っていただけあって、交友があるらしいグループのひとりがやつに声をかけた。その上級生の存在は僕でも知っている。いかにも気が強そうなギャルで、その超級ミニスカートは我が高のパンチラ製造機の名を欲しいままにしている。

「お、アッキーじゃん。ひとりでなにやってんの？」

「いや、ちよつと、あの……」

思わぬ下級生女の登場で、女子たちはかすかにざわめいた。女のひそひそ声というのは、時としてわざと周囲に聞こえるように発しているとは思えないことがある。アキタカがどきまぎながらグールプの輪に加わると、「誰？」とか「私知ってる」とかいう声が漏れた。認めたくはないが、そこに「かわいい」という声も含まれていたことをここに書き記さねばならないだろう。

「あ、つーかアンタ、優子の電話シカトしてるらしいじゃん。なにやってんの？」

試合開始早々からの強烈なボディブロー。アキタカの顔が青ざめたのがここから見ていてもよくわかる。これだから女の情報網を甘くみてはいけないのだ。女というのは、ひとりが秘密を知っていたら十人が知っているものと思わなくてはいけない。十人に憎まれたら、女すべてが敵だと思わなくてはならない。

「いやーそのーそれは……なんていうか、意見の相違があつて。ハハハ」

「ハハハじゃねーだろ。ま、別にいいけどちゃんと連絡しなよ。ていうか、そんでなにしにきたの？」

「あ、日下部先輩が髪切つたんだなあと思って。なんか理由があるのかなあ、なんて思つて」

「え？」

突然話を振られ、透きとおるような声で困惑の声をもらす日下部京子。

「別に理由なんかはないよ。ただのイメチェン」

「……あ、そうっすか」

おいおい、そんなに落胆しなくても。

「優子の次は京ちゃん狙ってんのかよ、コイツは」

「いやーもしかしたら彼氏と別れたのかなーとか思っただってしたらチャンスじゃないっすか」

「ていうか、あたしカレシいないし」

日下部先輩の一言に、うんうんという感じでうなずく取り巻き。アキタ力はみるうちに明るい表情を取り戻し、女子たちに向かってひとつ歩み寄った。

「ま、マジっすか？　じゃあ番号教えてもらっても……」

「ただし、アンタには興味ないって。残念」

そんな一刺しのあと、校庭中に響く笑い声。日下部京子本人でさえ笑っている。終わったな、アキタ力。さあ、さっさとこっちへ戻ってきなさい。お兄さんが心ゆくまで慰めてやるから。

<電話を切る前にサヨナラを>;……第二十話

その日の夜に起こった出来事はあまりにも唐突であり、あまりにも脈絡を欠いているもののように思えた。きつと誰だってそう思うはずだ。

僕は携帯電話を手にし、部屋の安物カウチに半ば寝転がるように座りながら、夕美とのメールを続けていた。僕が事実上ヒナと別れてしまったことを、彼女はまだ知らないはずだ。ヒナは自分からそんなことを夕美に話したりはしないだろうし、夕美だって僕のことを尋ねたりしたくはないだろう。……いや、あえて尋ねるかもしれない。もしかしたら夕美もすべてを知っていて、こうして僕に毎日何通ものメールを送ってくるのかもしれない。

どちらもありえる。というか、別にどちらでもかまわない。

僕の中のヒナは、その顔を思い浮かべてみても、今ではなんだからうまくいかない。古い写真のように、ところどころが曖昧にぼやけ、いっしょにわかちあった胸の高鳴りもそれと共に薄れている。もっとシヨックを受けるものだと思っていたけど、現実はそのでもない。

僕は夕美に惹かれ始めていた。彼女は快活で育ちもよく、なににより一途だ。それゆえに傷つきやすく、また可憐でもある。僕みたいな冴えない男子が彼女の守り人になれるのであれば、それは光栄の至りというところだろう。

「来週遊びに行ってもいいですか？　もう変なことお願いしたりしないんで」

たぶん、彼女が真実を知らないとしてもだが、夕美は僕とヒナのあいだになにかがあったことを悟っているのだろ。でなければ友達達の彼氏の家に遊びに行きたいなんて軽々しく口にする娘じゃない。

「いいよ。……って言うても、うちですることほとんどないけどね」

そんなメールを返信したまさにそのときのことだ。玄関のチャイムが鳴り、そのあとに静かなノックが数回続いた。だったらチャイムを鳴らす意味あるのか？ と脳内突っ込みを入れながら、僕はそれに応答する声を上げた。時計を見ると9時を回っている。こんな時間にやってくる人間は朝子以外にない。

……ハズなのだが、そこに立っていたのはまさに壁だ。Ｔシャツとジーンズを着た壁。袖から突き出た二本の腕からは蛇のような血管が浮き出ている。その顔を見上げると、前回の恐怖がまざまざと蘇った。

だがその表情は前回のような怒りに染まっではない。彼は僕に對して顔をそむけたまま、その場に仁王立ちしている。

「……こ、こんばんは」

僕のそんな声が聞こえたのか聞こえなかったのか、ヒナの兄は部屋奥をちらりと覗いた。

「雛子……いるか？」

「え、いないですよ」

「そうか」

沈黙。僕らが静止しているのをいいことに、一匹の蚊が部屋の中

に侵入するのが視界の端をかすめた。

「連絡……してるんだろうな？」

僕はなにも答えられなかった。今にでも襟首をつかまれると思った。でもヒナの兄が口にした言葉は、全然予想と違うものだった。

「……この前、悪かったな」

「え？」

彼を見ると、その浅黒い顔に少しだけ赤みがさしている。

「まさかそのために来たんですか？ その、この前のことを謝るために？」

彼はなにも答えなかった。というより適当な言葉が出なかったのか、口を半ば開きかけたものの、声はなかった。

「別に気にしてないですよ。というか、お兄さんが勘違いするのも無理はないですし……その、雛子さんから僕も色々聞きまして……親代わりのお兄さんが妹を心配するのは当たり前になって」

「悪かった。謝る。ごめん」

「いやいや、ほんとにいいんです。ほんとに」

僕と同様に、彼もいくらかほっとしたようだった。お互いに相手を感じするような空気が生まれ始めていた。でもそのすぐあとに、彼の表情はふたたび落ち着きを失った。

「……それで、今日はお姉さんは？」

「ああ、朝子なら隣にいますよ。呼んできますよ？」

「いやいや、呼ばなくていい。ただおれが悪かったと言ってたと伝えてくれれば……」

まさにそのときだ。折悪しく隣の部屋のドアが開き、だらしのない格好の朝子が歯ブラシをくわえたまま登場した。風呂上りなのか、タオルを頭に巻き、顔は真っ赤に火照っている。

「ほへ？ あんらのおろもらひ？」

たぶん、「あんたのお友だち？」と訊こうとしたのだろう。眼鏡をかけていないせいで、ヒナの兄と気づかないらしい。

「いや、お友達っていうか……」

そこで僕の言葉を遮り、ヒナの兄は唐突に謝罪の念を述べた。なにを思ったのか知らないが、とてつもない大声を上げて。

「先日はすみませんでした！ 弟さんに手を挙げたばかりでなく、お姉さんにも乱暴な口を聞いてしまい、大変に申し訳なく思っています！」

もしも漫画なら、ここで朝子の髪は一本残らず逆立っていたことだろう。彼が叫び終わると、きょとんとした顔で朝子は僕と彼のあいだを見つめた。くわえていた歯ブラシが口からぼろりと落ちるのと同時に、朝子は自我を取り戻した。

「……あ、誰かと思ったらこの前の」

「はい、先日は失礼をいたしました！」

まるで軍隊だ。こんな大男が僕の姉に誠心誠意誤っている姿とい

うのは、なんだか妙な光景である。さすがの朝子も動揺を隠せない。

「わ、わかったわかった。悪いと思ってるのはわかるけど、もうちょつと静かにしてくれる？　ここ住宅街だし」

「……あ、すみません」

仕切りなおしとばかり、そこで朝子がひとつ咳払いを交える。

「で、あのことならあたしもスグルも事情はわかってるし、そんなに根に持っていないから安心しなよ」

彼は大きくため息をついた。よっぽど思いつめていたらしい。

「ていうかどうやって来たの？　車かなんか？」

「いや、自分は走ってきました」

僕と朝子は吹き出した。僕はちよつと遠慮したけど。

「あんた普通に話すとなかなかおもしろいね。……で、気が済んだらもう帰りなよ。送ってあげられないのは悪いけど」

「あ、はい」

でも彼はその場を立ち去ろうとはしなかった。齒で下唇をかみ締め、それまで背けていた顔を朝子に向けた。

「……今日はもうひとつ、もうひとつ言わなくちゃいけないことがあるんです」

「なに？　言ってみなよ」

「実はその……ええと、なんていうか……クソ……」

彼は息を乱しながら、顔を紅潮させ始めた。拳を固く握り、手の甲にたくましい血管が浮かぶ。なんだか穏便でない空気に、僕と朝子はひるみながら目を合わせた。

「……クソ……言っつて決めたのに……」

「な、なんだったらもういつかいうちに帰って考えてくれば？　なんだか知らないけど……ねえ、スグル？」

こんなときだけ人に助けを求めるのはやめてくれ。悪いが力にはなれん。

「おれは……おれは前回の一件で、あなたのことが好きになってしまいました……言いたいことは、それだけです……」

「ええ？」

僕は思わず声をあげた。そのとき朝子はというと、そういうとき女がするような、声にならない驚きの表情を浮かべていた。

&1t・電話を切る前にサヨナラを>t;……第二十一話（前書き）

連載からもう一年が経とうとしています。

まだまだ先を書かなければならないのに、時の流れはまったく早いものです。

世の中には目にしてはならない一幕というものが存在する。時として探究心、知識欲求とは、投げやりにこちらの気分を高鳴らせておいて、いざという間際にさつとどこかへ消えてしまう。

かわいいところで言えば、サンタを父親だと見破ってしまうこと。えげつのない点で言えば、僕らがどうやって生まれてきたかということ。人は往々に知りたくないものほど知りたがる傾向がある。そんな馬鹿な、と否定する声もあるだろうが、知識欲を充たしたあとには、往々にしてこの声上がるものだ。

「……見なきゃよかった」

「あーあ、知らなきゃよかった」

最近の出来事で言えば、恵子先生の交際相手がそれだ。相手が生身の人間であり、まっとうな大人であれば、二人はそれ相応の行為をすでに済ましている。まったくもって信じがたい／信じたくない事実ではあるけれども、二人はセックスをしているのだ。

そして僕はまたしても見たくなかった一幕を目にしてしまうことになる。そしてそういうことが起きるときには、必ずなにがしかの予感が存在することを進んで認めなくてはならない。例えばいつもは通らない道を通ったり、遅くまで学校に残りすぎたりすると、危険に遭遇する確率は格段にアップする。いくらため息をつこうと、目にしてしまった光景を忘れることはできない。

そんなわけで、今さらなにを言っても後の祭りなのだが、僕はその日、桃太郎電鉄の最新版を手にし、その上ミスタードーナツの土産まで持って、アキタカの家に向かい歩いていった。やれやれまったく、どうしてそんな気を起こしたものが、自分自身でもよくわからない。いくら僕とアキタカの家がそれほど離れていないとはいえ、田舎の小学生じゃないんだから、普通は事前に連絡くらい入れるものだろう。

チャイムを押してから答えがあるまで、二三分はかかったらと思う。家の中に誰がいることは話し声や物音でわかっていたから、僕は玄関の前に立ち尽くしていた。

「はい」

その声のアキタカのものであることに間違いはない。でもそこには、いつもの奴からはあまり聞かれない警戒心のこもった響きがあった。

「オース。南だけど」

「だ、誰？」

「だから南だって。スグルだよ」

それから意味のない沈黙が五秒ばかり続いた。

「おい。遊びに来ただけど。アキタカ？」

「ちよつ、いま無理。ちよつと待って」

無理なのか、それともちよつと待てばいいものなのか。そんな疑問を口にする間もなく、アキタカが階段を大慌てで上る音が聞こえ

てきた。なにやら立て込んでいるらしい。仕方なく僕は玄関から二三歩あとずさりし、壁のバスケット・ゴールに向かってエア・フリースローを決めた。

まさにそのときのことだった。宙に放った透明なボールの先、二階の窓にちらりと女の後姿が見えた。しかも裸の女の後姿が。彼女はカーテンが少し開いていることに気づいていないのか、そのまま誰か、おそらくはアキタカと話している。そしてその女がさつとこちらに振り向いたとき、見たくもない乳房と共に見たくもない池西加奈子の顔が見えた。目と目が合い、互いにはつという一瞬があり、カーテンがぴしゃりと閉じられる。僕はスローを放った状態のまま、ぼかんと口を開けていた。意外ときれいなおっぱいだっただけは、誰にも言わず墓まで持っていこうと思う。

僕がそのまま茫然自失で立ち尽くしていること一分。やがて二人の激しい口論が家の外まで漏れ出し、池西加奈子が玄関から飛び出してきた。僕とはいっさい目を合わさず、逃げるように通りを曲がって消えてしまう。目には涙を浮かべているようだった。

アキタカはそのあとで玄関からひょっこり顔を出すと、辺りをきよろきよろ見回したあとで、僕に向かってなんとともばつの悪い苦笑いを浮かべた。僕の方でも薄気味悪い笑みを浮かべていたんじゃないかと思う。こういうときは一体なんと言ったらいいものなのか。

「……わりいな。待たせて」

「いや、いいけど。大丈夫なの？」

「ああ、うん。大丈夫、大丈夫」

全然大丈夫でないことはよく承知していたけれど、僕は黙って家の中に上がり、加奈子についての話題はその日一言も持ち出さなか

った。まあおかげで半時間くらいは気まずい思いをすることにもな
ってしまったのだが、僕もアキタカもばつが悪かったし、結局は時
間と共に暗黙の了解としてその問題は片づけられることになった。

おそらくアキタカは本当に池西加奈子をセックスフレンドに仕立
て上げてしまったのだろう。事実を冗談にするのは面白いが、冗談
が事実になるのは意外と笑えない。もし人格というものが多種多様
な着ぐるみであるとするのなら、決して人前でそれを脱いではいけ
ないのだ。仮にすっかりとそのことを忘れたら、知らぬうちにとん
でもない大恥を搔くんじゃないかと、僕は常々不安に思ってしまう
わけで。

夏休みの始まる三日前、僕はバイトのシフト表とにらめっこをしながら、夏休みの（あくまで架空の）予定を練っていた。始めの二日間は夕美が僕の部屋に遊びに来ることになっている。二日間というのがまさに重要だ。それは半日ずつの二日間なのか、それとも丸々48時間なのか、それを知るのは彼女自身でしかない。……とまあそんな妄想もあり、さつきからペンをくるくると回すばかりで一向に予定表に筆が加わらない。

「毎年毎年ホント懲りないねえ。予定なんか立てたって実行できないんだからやめときなつて」

「うっさい」

とは反論しつつも、予定表を投げ出し、こうして朝子の部屋でコーヒーを飲んでしまっているわけで。

「それ飲んだら帰つてよ。あたしもう寝るんだから」

我が姉は化粧台の前で髪をとかし終えたと眼鏡をかけ、ベッドに腰掛けた。知らぬ間に髪にパーマをかけたらしく、以前のアラレちゃんスタイルから一転、なんだか大人びて見える。それどころか顔にデスラーみたいなパツクまでしている。

「なんだよ。冷てえな。そんなデビルマンみたいな顔して」

「古いね、あんだ。せめてピッコロでしょ」

ボケ倒しですか、キリないんですけど。

「姉貴こそ、夏だからって浮ついてるじゃん」

「誰が？ あたしが？」

心外とばかり、朝子が身を乗り出して自らを指差す。

「そうだよ。もう付き合ってるんでしょ、あの人と？」

「バカ、なに言ってるの。まだ保留中」

なんとということか。朝子も偉くなったものである。将来有望、ドラフト候補に上がることはまず間違いなしという雛子の兄を相手に、生まれてこの方大した羨望を浴びたこともない我が姉が手綱を握っているとは。

「ま、嫌いじゃないことは確かだけどね。ただ若いし、ちょっと熱くなりやすいっていうか、まともに付き合ったら疲れちゃいそうなのよ。独占欲も強そうだし。だからアノ手の子はこっちが主導権を握ってやらなきゃだめなわけ」

髪の手を指でくるくるとねじりながら朝子は言う。まるであらゆる恋愛を経験してきたかのような口ぶりだ。どうせアラフォー系雑誌かなにかの受け売りだろうけど。

「ふーん。そんなもんかなあ」

と僕は頭の後ろで手を組み、天井を見上げる。

「ところであんたはどうなの？」

「え、なにが？」

「なにがって、雛子ちゃん」

眼鏡の奥の朝子の目がきらりと冷たく光る。僕が返答にもたついていると、朝子がふつと笑いをもらす。

「このあたしが気づかないでも思ってた？ あんたが別れたことなんてとづくに知ってる。だってあんた、ぴたりと雛子ちゃんのこと話さなくなるんだもん」

「バレてるだろうとは思ってたけど、やっぱりバレてたわけか」

「ちよつとがっかりしたけどね。でもあたしはなんにも言わない。これ以上首つつこむとあたしも責任を感じざるおえなくなっちゃうから。要するにさ、あんたと雛子ちゃん自分たちの距離をうまく見つけ出せなかったんだよね」

僕はコーヒーを一口すすり、その神妙な言葉づかいに朝子の顔をマグカップのふちからちよつとのぞき見た。

「なんだよ、距離って」

「恋愛っていうのはね、距離がいちばん大事なの。相手に近寄りすぎてダメだし、遠くてもダメ。お互いがいちばんリラックスでき、ちよつぱり刺激のある距離を探すのが理想だけど、その距離はいつも一定ってわけじゃないから、いいときもあるし、悪いときもある。ただ離れすぎちゃったり、逆に近寄りすぎちゃったりすると、もう修復がきかなくなったりする。十代のうちは近寄りすぎちゃうことが多いのかな、歳を取ると今度は反対に離れすぎる。恋愛のブ口はその距離のブレを楽しむっていうけど、あたしにもまだわかんない。これは別に恋愛に限ったことじゃなくて、家族でも友達たちでも同じことなんだけどさ」

それは真実だった。恋が愛に基づいているかどうかは別としても。

「……説得力がありすぎてにわかに姉貴の言葉とは信じがたいんだ

けれども」

「そりや全部が全部あたしの考えってわけじゃないもん」

「っーか恋愛のブロってなんだよ。山本モナ？」

「あんなのただの蟻地獄でしょうが。それでもあたしはけっこうその手の相談される方なんだから。恋愛のテクニクは案外相談されて身につくってこともあんのよ。色んな恋のあり方を客観視できるわけだしね」

「おみそれしました」

「満足したならもう寝てよ。夜更かしはお肌に悪いんだから。出るとき電気消して出てってよね」

へいへい。

友だちってなんだろう？ 時々そう考える。

いつも一緒にいるから友だちなのか、友だちだからいつも一緒にいるのか。分かり合えているから友だちなのか、分かり合いたいと望むから友だちなのか。うるさいことを言われずに済むから友だちなのか、時には真剣に意見をぶつけ合えるから友だちなのか。

まあそれぞれタイプはあるだろう。けれど、たぶん僕は事なかれ主義の方だ。もめごとに発展するくらいならいくらでも口をつぐんでいるし、面倒なことにはできるだけ関わり合いたくない。例えばヒナの兄貴のときのように半ば否応なく関わりあってしまったとしても、なるべくその先は考えないように努めている。およそ十代というものは自ら進んでトラブルに足を踏み入れる輩も多いが、僕にそのけはまるでない。なさすぎると言っていいほどに。

だから僕はアキタカといえるだろう。奴には自分しか見えていない。他人を干渉しない主義というわけではなく、ただ単純に興味がないのだ。そしてそういう人間のそばにいたときに、僕はいちばんほっとできる。

第三者であることに、僕は安心をおぼえていた。

アキタカを通じて自分の好奇心を満たそうとしていた。けれどそんなまやかしがいつまでも続くはずはない。なぜなら僕はアキタカと同じ十六歳の少年なわけだし、実際のところ第三者でもなんでもない。だから恋をしたいなんて言い出したのだ。遠くから見ているだけでは我慢できず、それを手に取って味わってみたいと思ったのだ。

僕は弱い人間だと思う。僕はヒナを利用したのだ。自分の好奇心を満たすためにだけに彼女を利用し、面倒になりそうな気配を感じてすぐに逃げ去った卑怯な男。でもどうしたらいい？ 自分の弱さに立ち向かうなんて、今の僕にはできそうないない。

「アキってさ、つらいとか思ったりしないの？」

学校に通う道すがら、僕はアキタカの横顔を見ながらそう尋ねた。

「つらいってなにが？」

「だってさ、色んな女子に声かけてるだろ？ そしたら当然悪い噂とかも立つしさ、それがつらく感じたりはしないのになって」

「気にしないね、全然」

「あ、さいですか」

愚問とばかり、アキタカはフンと鼻を鳴らす。

「おまえはまだおれって男をわかってないな」

「わかっていないというか、わかりたくないだけなんだが」

「まあ聞け。なぜ女がおれの悪口を言うと思う？　それはな、相手にされなくて悔しかったり、寂しかったりするからなんだよ。そしてそういう女たちの歯ぎしりが、おれをさらに高みへと運んでくれる」

「待て。つつこみどころが多すぎて少々時間がかかりそうだ」

「ほんととはみんなおれのが好きなんだな。だからかまって欲しくてわざと悪口なんか言ったりすんだよ。その証拠に優子なんてさんざんおれの悪口言いふらしておきながら電話でやりなおしたいとか言っただぜ？」

「ふーん。して答えは？」

「だが断る。この佐野明隆の最も好きなことのひとつは、自分で魅力的だと思っている女にNOと断ってやることだ」

「……それが言いたいだけだろ」

「まあつまり女なんてのは浅はかなプライド持ってる奴ばかりだから、人前では強がっちゃうんだな。だからなんもん気にする必要ないわけ」

「うーむ。納得しかけている自分が怖い」

「ま、君も童貞を卒業したらわかるさ。はっはっは」

そう高笑いを響かせてアキタカは僕の肩をポンポンと叩く。しかし言っていることに多少の理はありそうだ。

「……で、夏休みの予定はやっぱりその手のことで埋まってるわけ？」

「まあボチボチとね。スグルは夏休みに一億回オナニーするんだっけ？」

「できねーよ！　無理だろ！」

「といったところで笑点おひらき。また来週」

「流れねーぞ！ おなじみのテーマ曲なんて流れねーからな！」

友だちってなんだろう？ いや、ホント。

夏休み前日の学校というのはとりもなおさず旅行支度のようなものである。「であるからして」を口癖とする我が校長のありがたき訓示を耳にしても、生徒たちは心ここにあらずといった感じが教室に戻る道すがら、がやがやといつも以上に騒がしい。浮かれる気分はこの僕をもつてしても例外ではない。気にしないよう努めても、ついつい夕美のいる一年生の階に目がいつてしまう。

「なーんか悪だくみしてない？」

突然、両肩にそつと柔らかい手が置かれ、僕は思わず立ち止まった。振り向くと、そこには天女のような恵子先生の笑みがあつた。今日はいつもの白衣ではなく、ストライプのスーツを華麗にまとっている。

「え？」

「さつきからひとりでにやにやして。彼女でもできた？」

なんと鋭い。あつという間に顔が熱くなった。

「そ、そんなに僕にやにやしてました？」

「しーてーた。遠くから見てもわかったもの。あんまり浮かれちゃだめよ、夏だからって」

恵子先生はそういうとおしるしのように笑みを向け、僕の腕にそつと触れてから他の生徒に寄って行った。そのあまりに素敵なしぐさに、僕はぼうつとなってしまった。してはいけない妄想を繰り広げる頭に杭を打ち、いかんいかんと首を振る。恵子先生は恵子先生、

夕美は夕美。二人を天秤にかけるような真似をしてはいけなし、する権利もない。断じてない。

「えーというわけで、校長先生からお話がありましたように、みなさん各自ルールを守って夏休みを楽しんでください。それではさようなら」

東野担任の実にさりりとしたホームルームが終わり、生徒たちは一斉に夏休みという名の楽園へと解放された。この日ばかりはぐずぐずと学校に残っている生徒はいない。僕は思うところあって、アキタカにひとつ断りを告げる。

「今日と一緒に帰れないと思う。悪いけど」

「え、なんで？」

「ちよっと用あるんだよ。一年の教室に」

嘘はついてない、嘘はついていないはずだ。そう自らに思い込ませながらも、動揺を隠そうとする自分が情けない。

「なんで一年？」

「……だから、ちよっとね」

「ほほう。女か」

「ま、まーな」

僕がそう答えると、冷やかすような目線のあと、アキタカはにやりと笑った。それから僕の肩をぽんぽんと叩き、耳元でそっと囁く。

「あとで報告よろしく」

やめてくれないか……いちいちやらしい雰囲気をかもし出すのは。

夕美は中央廊下で僕を待っていた。二年の教室のすぐそばだ。僕が歩み寄ると、彼女は顔を心持ち赤くし、そっと笑みを浮かべた。

「先輩を待ってました」

「見れば分かるよ」

僕は笑った。

「一緒に帰ろうか」

「はい」

女の子と肩を並べて歩くというのは、何度体験しても新鮮な気持ちになれる。僕と夕美は人目を忍ぶために、裏門からそろって学校を出たのだが、周りを見渡してみるとカップルしかない。やはりみんな考えることは同じらしい。

「へー。あの二人付き合ってたんだ。先輩知ってました？」
「いや全然」

「へーへー。明日から毎日裏門で帰ろうかなあ」

「……明日は夏休みなんだけど」

「あ、そうでしたね。私ってバカなのかも」

「ていうか夕美ちゃん裏門から駅までの行き方わかる？」

「え、てっきり先輩が知ってるものかと……」

「いや、まったくもって知らないんだけど」

「前の人たちについていけば着けそうじゃないですか？」

「うん……だいいいんだけど」

しかし道を進むにつれ、一団だったはずのカップルが一組二組と道を外れて行く。気づけばいつの間にもやら見たことのない景色に四方八方を囲まれているし、太陽は容赦なく降り注いで体の水分を奪う。そしてとうとう頼りにしていた一組のカップルがどちらかの家らしいマンションのエントランスに入ってしまうと、僕は近くの公園でベンチに腰を下ろした。

「……ここはどこだろう」

汗を欠いたペットボトルを手に、僕はぼつりとつぶやいた。

「たぶん市内だとは思うんですけど」

「ごめん。おれがすっかりしてないからだね……」

「私がいけないんです。前の人たちについていこうなんて言うから」

深い沈黙とため息が重なる。しかし夕美はなにかを思いついたようにぱつと顔を上げ、僕に微笑んだ。どこか照れるように。

「あの、先輩」

「え、なにになに？」

「この前のキスのこと、覚えてますよね？」

これまた唐突にきた。この娘は本当に油断ならない。

「うん。覚えてるけど」

「あれってやつぱり……義理ですか？」

「義理……ではない」

「じゃあなんですか？」

油断ならない。本当に油断ならない。二秒でいい。答えを考えさ

せてくれ。ああ、こんなときにあのスタンドがいれば。

「正直な気持ちでいいんです。私のことは気にせず」

「わかった。正直に言う。それは夕美ちゃんと、キスが、したかったからだ」

瞬間湯沸かし器よろしく、僕の顔が真っ赤になると同時に、夕美は驚きの表情を浮かべた。

「え、嬉しい。本当ですか？」

僕はこくりと肯いた。それから気を落ち着けようと息を深く吐き、肩の力を抜いた。それが功を奏したのか、ぱつと頭の中が冴え渡ってきた。どうせいつか打ち明けるならと、僕は即座に覚悟を決めた。

「おれ、夕美ちゃんのこと好きだよ。少なくとも、好きになりかけてる」

そう言いながら、僕は夕美の方へ顔を向けた。まったく、このときばかりはどうしてこんな台詞が真顔で言えたものなのか、我ながらさっぱりとわからない。彼女のまっすぐな気持ちに、いくらか開き直っていたのかもしれない。

夕美の美しく澄んだ瞳に、かすかな動揺が見えた。焦点がブレ、僕の言葉を理解するのに少しのあいだ時間がかかる。

「最初はかわいい後輩っていう目でしか見てなかったけど、どんどん心が惹かれてるのが自分でもわかる。夕美ちゃんの明るさにぐいぐい引っ張られてる感じがする……ねえ、なにか言って欲しいんだけど。恥ずかしいから」

「嬉しい、です」

「もう敬語なんか使わなくていいよ」

「嬉しい」

僕は彼女の肩を抱いた。そつと、しかし力強く。やがて夕美が顔を押しつけた僕の胸に、じつとりと温かみが広がる。それにしても、どうして女の子はこんなに小さくて柔らかいのだろう。

「泣いてるの？」

「……だって、嬉しくて」

泣き顔が見たかったというのもある。彼女の顎にそつと手をあて、僕はキスをした。当然ながらしょっぱい味がする。

「先輩、愛してる」

「それは言いすぎだよ」

「ううん。そんなことない」

「明日うちに来るの？」

「……今日はだめ？」

「いいけど、門限があるでしょ」

まだ目に涙を溜めたまま、夕美がくすくすと笑う。

「え、どうしたの？」

「あのね、加奈子に協力してもらって、うちの親には今日からテニス部の合宿ってことにしてあるの。本当は部活入ってないんだけど……な、なるほど。君もなかなかやるね」

「あ、でも先輩の邪魔にならないようにするから安心して。ソファで寝るから」

「いやいや、おれがソファで寝るよ」

「大丈夫。夕美ちっちゃいから」

そう言っ
てにんまり笑う彼女を僕はもういちど抱きしめる。たぶ
ん僕は、いま宇宙で最も幸せなくそ野郎なのだろう。

&1t:電話を切る前にサヨナラを>t;.....第二十四話(前書き)

更新が遅れてばかりで申し訳ありません。

そしてまた性描写を書いてしまいました……が、まだまだ書くつもりです。

反省はしているが後悔はしていない。

と、止まらねーんだ……この右腕がorz

それからうちに着くまでのことを、僕はなんだかうまく思い出すことができない。道中も、頭の中にもやががかかっているような状態で、時おり夕美と話しながら彼女の顔をじっと見つめたり、突然激しい愛しさに襲われ、彼女の小さな体を抱きしめたくなったり……。たぶん幸せすぎて、そのことが自分でも信じられないのだろう。こんなに可愛い子が自分の彼女になるなんて、という驚きが、何度となく雷のように僕の体を打った。

僕はデニースで早めの夕食をとり、見知った道に出てからも、時間をかけて帰路についた。気づくと時刻は夜七時を過ぎ、僕は夕美を外で待たせ、一声母屋に声を掛けてから、自分の部屋に向かった。どういうわけだろう、家の中に入るときも、まるで誰か知らない人の部屋に上がるみたいな心境だった。

「怪しまれなかった？　大丈夫？」

「全然。どうぞ」

僕は照れ笑いしながら、彼女を部屋に招き入れた。夕美は辺りをきよろきよろと見回してから、得意気に笑った。

「先輩の部屋って感じ」

「そう？」

「うん。夕美そう思った」

「どこらへんが？」

「……んと、小ざっぱりしてるっていうか、綺麗に整頓されてるイメージ」

夕美をカウチソファに座らせ、僕は台所に立った。

「制服脱いだら？ なにか貸すよ」

「うん。バッグの中に着替え持ってきたから平気」

「コーヒーは飲める？」

「ミルクとお砂糖たっぷり入れてくれれば」

僕が湯を沸かし、準備を整えているあいだ、夕美はソファに後ろ向きに座り、両腕に顎をのせて、その様子を眺めていた。気がついて振り返ると、愛嬌のある笑顔を見せ、僕もついついそれにつられて笑ってしまう。

「もうすぐできるよ」

「うん。……ねえ、先輩のことなんて呼んだらいいかな？」

その問いかけは、僕に苦いものを思い起こさせた。そういえばひとつだけ、はつきりさせておくべき問題がある。

「先輩は夕美になんて呼ばれたい？」

「なんでもいいよ」

「夕美は夕美のまんまがいいな。先輩にそう呼ばれるの、好きだから」

僕はコーヒーを二つテーブルに置き、彼女の隣に座った。それかなるべく雰囲気壊さないよう心がけて、次の質問をぶつけた。

「その前にいつこ、いいかな？」

「うん？」

「あのさ……おれと雛子ちゃんのこと、なんだけど……」

それを聞くとさすがに、夕美の顔も強張った。あくまで笑顔を崩さずにはいるが、その奥に緊張が見て取れる。

「……うん、聞いてるよ」

「そうなんだ。そっか。ならいいんだけど」

「夕美もいつこ、訊いていいかな？」

悩むように間を置いて、彼女はそう言った。その言葉を発するに、かなり勇気がいったみたいだった。というのも夕美の目に明らかな怯えが映っていたからだ。目線を合わせようとせず、どこか後ろめたさを感じているみたいだった。

「いいよ」

僕はわけもなくはらはらし始めていた。新しい恋人の前で、かつての交際相手との関係を尋ねられる気分というのが、初めてわかったような気がする。

「……夕美はね、先輩がどうして雛子をフツっちゃったんだろうって思ってる」

「いや、それは間違ってるよ。フラれたのはおれの方だから」

気を使ってそんな言い方をしてくれたんだろうと思った。

「え？ でもじゃあどうして……」

「たしかに、悪いのはおれの方だったよ。完全に」

「違うの。そうじゃなくて」

夕美はそれから後の言葉をためらった。ハッとして表情をがらりと変え、大きな瞳に哀しみが浮かび上がった。彼女は怯えるように

僕のふところに身を寄せ、顔をうつむけた。

「……ヒナ、泣いてたから」

「え？」

「学校にも行ってないって聞いて、電話も繋がらなかったから、会いに行ったの。そしたらね、先輩のことまだ好きなんだけど、どうしていいかわからないって……」

夕美はそこまで話して、唐突に声を詰まらせ、泣き始めた。放つたらかしのコーヒーが、カップからゆらゆらと湯気を上げ続けている。

「どうして夕美が泣くんだよ」

「私ね、言えなかったの！ それ言ったら、もしそれを言ったら、先輩がまたヒナのものになっちゃうと思って！」

夕美は全身を震わせて、そう泣きじゃくった。僕はその姿に圧倒され、困惑し、物も言えなかった。体の奥底から、さそりの這い上がるような悪寒が上ってきた。心臓の音がなによりも激しく、連続して胸を打った。

「ずるいことしたの、先輩のこと好きだから……誰にもとられくなかったから……」

時間が必要だった。物事を落ち着けてくれる、ひとときの静寂が。僕はなんとか自制心を取り戻し、夕美の背中に両手を回した。でもその体は、半時間前とは打って変わり、よそよそしく強張っていた。しかしわかっていいる。距離を感じてるのは夕美ではなく、この僕自身なのだ。

「そんなの気にするこたないよ」

声を裏返すことなく言い切るには、かなりの集中力を要した。体の震えが、なによりの動揺を指し示している。

「……嫌いにならないで。先輩に嫌われたら、夕美もう生きていけない」

「嫌いになんかならないよ」

「キスして」

僕は口づけを交わした。熱を持つてうねる夕美の舌に対して、僕の下は無機的に動いた。自分が冷静であればあるほど、夕美の切々たる求めが、より哀しく胸に響いた。

「触つて。夕美の体、もっと」

彼女はそう言つて僕の手を取り、ためらいなく自分の胸に押し当てた。身から熱い求めが遠く離れていくのを感じながら、それでも僕は彼女のブラウスを脱がし、首筋に舌を這わせた。熱い吐息が夕美の唇から漏れ、僕はソファの上で彼女に覆いかぶさるように小ぶりの乳房を愛撫した。夕美は痕が残るくらい僕の背中にしがみつき、足をからませた。

「先輩も脱いで……」

皮膚と皮膚が合わさると、彼女の体がどれほど熱いかがわかる。僕は舌をからませあつたまま、互いの下着を取っ払った。夕美のアンダー・ヘアが僕のおなかに触れるのを感じた。

「ベッドに行こう」

そう言ってから、自分の声がおそろしく冷たいことに気がついた。それと共に、激しい罪悪感が身を襲った。でも今さらどうしろって言っただ？ 僕らはベッドで続きを始めた。けれど僕のペニスはずっと柔らかいままだった。

こんなことが実際に起こりうるなんて、信じられなかった。つむじまがりを相手にしているようなどうにもならない恨めしさ、ひしひしと胸に上った。

「……ごめん。今日はだめだ」

「夕美はいいよ。先輩とこうしていられば」

夕美は僕の体にぴったりと身を寄せ、何度も何度もキスを求めた。なにか会話するよりは、僕もそっちの方がずっと楽だった。いまなにか話題を振られても、まともな答えを返すことはできなかった。ただろっと思っからだ。

「シャワー浴びてきなよ」

「うん」

「早く寝て明日はどこかに出かけよう」

「うん」

夕美が僕の動揺に傷ついていないという確証はない。彼女はもちろんどこかで気がついていて。だから僕は風呂場のドアをノックし、「一緒に入ってもいい？」と訊いた。彼女は「いいよ」と言う。嫌われたくないのは僕の方かもしれない。自分でも時おりわからなくなる。僕は一体なにに遠慮し、なにを恐れているんだろう、と。

&1t・電話を切る前にサヨナラを>t;……第二十五話（前書き）

元々このシーンが描きたくて始めたような物語だったのですが、当初の構想からはずいぶんかけ離れたものになってしまいました。

……プロット通りに書き進めるって難しいです、ほんと。

長いあいだ、眠れなかった。なにも考えられなかった。

時は長針と短針を失い、僕は永遠にも思える寂寞の中にいた。これほどの幸せに浸りながら、虚しさを感じていた。それは完全に失敗と終わったヒナとの恋であり、それをほとんど全て相手のせいにしてごまかした自分への不甲斐なさから来るものだった。

深夜、僕は静かにベッドを抜け出し、部屋を出た。夏の夜風がさつと頬を撫で、ざわつという不安気な音を遠くで鳴らせた。僕は格子に寄りかかり、無人のアパート共用部

と眼下に広がる空き地を眺めた。つらいというわけじゃない。どちらかと言えば、無気力に近い放心状態が身を包んでいた。

僕は結局、家族に頼った。姉の部屋を静かにノックし、戸が開くのを待った。でもまさにそのとき、ポケットの中の携帯電話が激しい振動を訴えた。

「もしもし?」

僕は動転していたのだろう、相手の名前も見ずにそう答えた。反射的にドアの前を離れ、アパートの階段を下りた。

「もしもし?」

答えはなかった。画面を確認すると、公衆電話から掛けられたものだった。

「……………ヒナ？」

自分でそう口にしながら、胸が動悸を訴えた。

「……………君だろ？　ねえ、ヒナなんだろ？」

深い沈黙の中に、かすかな息づかいが聞こえた。耳を澄ますと、それがやがて小さな嗚咽に変わっていくのがわかった。

「わかってるよ、どうして電話してきたのか……………加奈子ちゃんから聞いたんだろ？」

それから長い沈黙があった。

「……………」
「……………」

そして突然、これまでに溜め込んできたものが、悔しさとなって僕の目に溢れた。Ｔシャツで涙を拭い、僕は言葉をつづった。

「どうして、どうして正直な気持ちを言ってくれなかったんだよ！
どうしてそんなに不器用なんだよ！　馬鹿！」

そんなことを言いたいはずじゃなかったのに、どうしても抑えられなかった。謝るべきは自分だとわかりながら、駄々っ子のように僕は語気を強めた。

「好きだったんだよ！　むちゃくちゃ好きだったんだよ！　だから
どうしていいかわからなかったんだ！」

そこまで言い切ると、穴にストンと落ちたように、頭の中が空っぽになった。後に横たわっていたのは、深い静寂だった。僕は荒ぶった息を落ち着け、深呼吸した。

「……ごめん。怒鳴ったりして。もう切るよ。でも電話を切る前に、なにか言っべきことがあるはずだ」

「……さよなら」

その声を聞いて、僕の心はかつてないほどに痛んだ。再びあふれ出す涙をこらえ、僕は言った。

「さよなら、ヒナ……さよなら」

電話を切り、僕はアパートの壁を背にしてずるずると地面に座り込んだ。涙が止めどなく溢れ、壮絶な哀しみが身を覆った。目に見えぬ大雨に打たれ、僕は赤子のように泣きじゃくった。あまりに自分が哀れだった。だから外の大声に気づいて朝子が下りてきたときも、僕は井戸の底にいて、姉の声は遥か遠くからしか届かなかった。

………

気づくと僕は朝子の部屋のベッドに座らされ、温かいトマトスープの入ったマグカップを手に使っていた。テーブルの上の手鏡に顔が映ると、その目は腫れ上がり、鼻の下が赤く染まっていた。

「どう？　少しは落ち着いた？」

僕は涙をすすりながら肯いた。

「まったく……あんた抱えて部屋まで上るの大変だったんだから」

「……わりい」

「わりいじゃ済まされません。一体なにがあつたの？　話したくなきゃそれでもいいけど」

「……今度話すよ」

朝子は腕組みしてため息をつき、僕の髪を意味もなくくしゃくしゃにした。

「ほら、落ち着いたんなら部屋戻んなさいよ。女の子がいるんですよ」

「……その前に煙草一本くれよ」

「はあ？」

「隠し持ってたんの知ってただから」

朝子にはめずらしくぎくりとした顔を見せ、しぶしぶと化粧箱の中からセーラム・ライトを取り出し、僕に向かって一本投げた。

「ベランダで吸つてよ。匂い残るとお母さんにバレるから」

僕はよろけながらベランダに出て、煙草に火を点けた。一口吸うと喉に苦味が広がり、めまいがした。隣の僕の部屋に電気は点いていない。あの騒ぎが夕美に気づかれなかったことは、僕をほっとさせた。

明かりのこぼれるベランダの戸口に立ち、朝子は僕を見据えた。姉は隣に寝ているのが夕美だということは知らない。

「……あんた、ちょっと抱え込みすぎじゃないの？」

「なにが」

「ニンゲンカンケイ」

「別に」

「ませたことするから。がきんちよのくせして」

僕は答えなかった。煙を深く吸い、夜空に向かって吐き出した。

「ほーら、また迷ってる」

「なにがだよ。何も言っていないだろ」

「そのくらいなーんにも聞かなくなっただけであたしにはわかん。言つとくけど、迷ったまんまじゃどっちも取り逃がすよ？」

「迷ってねーよ。心は決まってる」

「あつそ。ならしいけど」

そう言つと手をはらはら振り、朝子は部屋の中に戻った。僕はフイルターのぎりぎりまで煙草を吸い、ぐずぐずとベランダに残つて、とりとめのない考えを夜空に描いていた。部屋に戻ったときには、時計は二時半を回っていた。

二日目、眠い目をこすりながら支度を整え、僕らは都心まで電車を乗り継いだ。夏休みというだけあって、街は歳若い人間で溢れかえっている。僕と夕美ではやはり釣り合わないのではというネガティブな自意識からか、時々振り返る通行人の目が、なんだか痛々しく思えてならない。

街と同様に、水族館も混み合っていた。夕美はマンボウの泳ぐ水槽に顔を近づけ、感嘆の息を漏らした。僕はクラゲだ。互いにゆったりとした動きの生き物に心惹かれるらしいことがわかり、なかそのことが笑えて仕方がなかった。僕らは始めから終わりまで手をつなぎ、水族館を出たあとはモス・バーガーで昼食をとった。午後すぎにはカラオケ・ボックスに入った。それは必然的に前回の件

に触れてしまうことになったけれど、僕らは自分たちでも不思議なくらい、そのことについてぎこちなくなったりはしなかった。

帰りがけに、人目から離れる隙をうかがってはキスをした。昨晚失われた僕の心は、再び熱く鼓動を打ち始めていた。夕美に対する恋慕の情が、入れ物からこぼれ落ちそうなほどに湧き出している。

「好き」

そう言ったあとの彼女の照れ笑いが、僕の胸にぐつとなにか愛しいものを惹き付けた。とてもシンプルに、僕は夕美に恋していた。

夕方、僕らは近所のスーパーで食材を買い求め、せせこましい台所に肩を並べて料理を作った。まるで同棲を始めたみたいない気分だった。彼女もそう思っていたと思う。ニンジンの皮を剥きながら、僕らは様々な話をした。家族のように異性と接するなんてことは、朝子以外に体験したことのない出来事だった。

「じゃあもし生まれ変わったら、先輩はなにになるの？」

「もし選べるとしたら？」

「うん」

「ええっと……うーん……」

「はい、時間切れ。次は夕美の聞いてくれる？」

「なに？」

「先輩の奥さん。子供は二人で、男の子と女の子がいいな」

「……なんかずるくない？」

「ええ、どうして？」

「まあいいけど。子供の名前はなんてつけるの？」

「それはまだ考え中。でも二人の名前から一文字ずつとりたいたって」

料理を始めてから一時間半ほど経つと、カレーの香ばしい匂いが部屋を漂った。いつぞやのお詫びにと、夕美は朝子にカレーのおすそ分けを提案したが、姉は不在だった。奴のことだから、最近始めたとかいう出会い系サイトのサクラのバイトにでもいそしんでいるのだろう。諦めて部屋に戻り、僕は山盛りに持ったカレーライスを頬張った。

「おいしい」

「うん。間違いなくうまい」

「あ、マヨネーズある？」

「あるけど……まさかカレーにかけるの？」

「ダメ？」

潤んだ瞳でそんな風に訊かれて、ダメと言える人間はまずいない。

「いいけど、ガチでうまいの？」

「うん。夕美んちではそれが普通。先輩もかける？」

やめといた。せつかくの努力が水の泡になっただけでは大変である。

夕食を終えてからは、帰りがけに借りたDVDを見て過ごした。しかし疲れてしまったのか、夕美は映画の途中からうつらうつらと始めた。

「もう寝る？」

「……うん。お風呂入らなきゃ」

「明日の朝入りだよ」

「うん。じゃあそつする」

僕は彼女をベッドに寝かせ、部屋の電気を消してひとりで映画の続きを見た。でもどういうわけだろう、内容はとても面白いはずなのに、隣に夕美がいないというだけで、そわそわと落ち着かない気持ちになり、僕は結局テレビを消してしまった。それからシャワーを浴び、僕も彼女の隣で横になった。体はしっかりと疲れていたのだろう、僕もすぐに眠ってしまった。

&1t・電話を切る前にサヨナラを> ; 第二十六話

.....夜道を歩いていた。自分がどこに向かっているのか思い出せずにいた。しかしそれでも足は動いている。僕の知っている、そして知らないどこかへ向かってたしかに歩いている。どこへ？ 森のひんやりとした空気が、裾をくぐって足元を撫でつける。

踏みごたえのない柔らかい土の上で、僕は懸命に坂を登っている。谷崎潤一郎の小説にこんな話があったな、と僕は思う。そしてゆつくりと、まるで現像される写真の中に人の顔の印象が少しずつ浮かび上がってくるみたいに、僕は僕を待っている人間が誰であるかを悟った。

ヒナ！

僕は肝をつぶして叫んだ。でも実際にはほんの小さな声でしかない。なにかから追われるように、僕は山を登った。ひどくひどく疲れている。でも草木のあいだに神社が見えると、とたんに体の中が活気付いた。

あと少しだ！ もう少し！

鬼気迫る笑みを浮かべながら、僕は斜面を這い上がるように社のそばに飛び出した。まさかないんじゃ.....そんな不安に怯えながら社の正面に向かって走り、胸が割れそうなほどの恐怖に息が乱れた。

いた！

ヒナは賽銭箱の前に、いつものようにうずくまっていた。僕は安堵し、駆け寄って彼女の体を抱きしめた。疑い深い僕は、それでも別人なんじゃ……という気になったが、彼女が顔を上げて本人だとわかると、思わずうれし涙がこぼれた。

「ああ、よかった……よかった。ごめんね、ひとりぼっちにさせて」

ヒナは首を振り、ショートのを髪を揺らして笑みを浮かべた。よくよく見ると、彼女は一糸纏わぬ姿だった。

「中に入ろう。それじゃ寒いよ」

そのときハツとして僕は周囲を見渡した。誰かが見ているような気がしたからだ。そして振り返ると、ヒナの姿はそこから消えていた。僕は絶望した。

ああ、そんなまさか！ そんな！ 嘘だ！

……………目を開けたときも、その絶望はまだ心に残っていた。朝の光がまぶしく、僕はまぶたを手で覆った。気持ちのいいシャワーの音が聞こえる。隣にはしわの残ったベッドシートと、へこんだ枕がわりのクッション。僕はゆっくりとベッドを抜け出てシャワールームの方に歩み寄った。

「おはよう」

蛇口を閉めるキュツという音がして扉が少しだけ開き、そこから濡れた髪のスミが首を出した。すりガラスに映る肌色を見ないように僕は努めた。

「おはよ。まだ寝ててよかったのに」

「コーヒー入れるよ」

「すぐ出るからちよっと待っててね」

夢の意味なんて、考え始めたらキリがない。僕は湯を沸かし、カップを二杯並べて一方に半分ミルクを注いだ。そこまでの準備を整えると歯を磨き、沸騰する直前で火を止めた。それとほとんど時を同じくして夕美が風呂から上がり、体と髪にタオルを巻いてソファに腰を下ろした。

「二人してけっこう寝ちゃったね。今日はどうする？」

「どうしようか」

僕はそう言いながら、彼女の濡れた体を後ろから覆い、石鹸の優しい匂いをかいだ。夕美はくすくす笑いながら、僕の手の手を重ねた。

「夕美の裸、見たいな」

「いいよ」

僕の希望に夕美はあっさりそう答え、するするとバスタオルを脱いで立ち上がった。彼女の体は小さかったけれど、決して均整が取れていないわけではない。小さな顎に合わせて小さな口が出来上がり、小さな両肩に合わせて小さな乳房が出来上がっている。じっと見られていることにさすがに恥ずかしさを感じたのか、夕美は僕の体に文字どおり抱きついた。

「恥ずかしくなってきた」

僕は彼女の背中と小さなお尻に手をやり、そのままベッドに運ん

だ。部屋の中はさんさんと明るい。唇を重ね合わせ、乳首に触れ、太ももの奥に手を伸ばした。もはや体のどこに触れても、彼女は小さく喘いだ。

「……ねえ、コーヒーは？」

「後にしよう」

でも初めてのセックスは簡単なものじゃなかった。その手のことに僕はほとんど無知だったし、二人の思っている以上にその痛みは激しいものだった。夕美は歯を食いしばり、片方の目からは涙がこぼれた。僕は興奮していたのか、自分を見失いかけ、途中からなにをしているのか自分でもよくわからなくなっていた。だから初めてのセックスは、正直なところなんだかよくわからないうちに終わってしまったという印象が強い。

シートには血が染みていた。僕は行為が終わると体を重ね合わせたまま、言葉も交わさずにじっと互いの体を抱いていた。

「……嬉しい」

「え？」

「先輩の初めて、夕美が奪っちゃった」

「逆だよ、普通」

僕は笑った。それからペニスを抜き、ティッシュで拭き取った。

「ごめん。中に出しちゃって。次はちゃんとゴムしよう」

「ううん。先輩の赤ちゃんなら出来てもいい」

「いら」

「冗談。シート汚れちゃったね」

「いいよ。新しいのあるから」

下着を履いてベッドから下り、僕はもういちど湯を沸かした。それから熱いコーヒーを入れ、二人でカウチに並んでそれを飲んだ。クーラーのスイッチを入れ、火照った体を冷やす。夕美は僕のぶかぶかのＴシャツを着て、下はショーツ一枚という格好。

「帰りたくないなあ。もつとずっと一緒にいたいのに」

「30日ならバイトは休みだよ」

「じゃあまたママに嘘つかなくちゃ」

僕はそろって笑い、そのあとでなにかのしるしのようにキスをする。まだそのときは知らないが、僕らはその夏、計23回セックスをすることになる。

「言っとくけど、ハンパじゃねえから」

というジョースケの忠告どおり、夏休みの駐車場は大忙しだった。車は朝の六時からひっきりなしにやって来て、ようやくひと段落ついたと思うと、今度は帰りの人で大賑わい。もはや駐車場そのものがテemapパークといった体だ。このかきいれどきに駐車場は常時二人を配備し、ヨシくんも石田さんもフル回転である。

「参っちゃうなあ。メシ食う暇もないんじゃない」

窓口に並ぶ客を前に、石田さんはぼそつとそんなことを漏らす。その点、ヨシくんは意外にもこの行列を淡々とこなす。疲れた、とも、だるい、とも言わない。ひたすら駐車券を発行し、発行し、発行する。時間ができると煙草に火を点け、客が来るとまた駐車券を

発行する。

「あー疲れた」

とさすがの僕もそんなばやきを漏らすのだが、ヨシくんはなんとも答えない。表情という表情もない。強いて言えば、いや強いて言っ
つて、いつもどおりなのである。

「そういえば昨日さ、妹が来たよ」

「あ、見たかったっす」

「うん。それで南の友だちも来たよ」

「え、誰だろう」

「佐野とか佐川とか言ったかな。うちの妹と出かけていったみたい」

アキタカだ。間違いない。

「ちょっと待った。えっと……大分混乱してるんですけど、ヨシく
んの妹さんてどこの学校に通ってます？」

「カワ高だよ」

「それ、おれの通ってる高校なんすけど」

「え、マジ？」

「リアルにマジです。でもヨシくんの名字は山岸だし、そんな上級
生いたかな……」

「うちの妹は名字ちがうよ。母方の姓を名乗ってるから」

「それでなんていう名字なんすか？」

「クサカベ。日下部京子」

……あいつ、とうとうやりやがった。

バイトが終わるなり、すぐさまアキタカに電話を掛けた。夏休み

が始まって一向に連絡がないのでおかしいとは思っていたが、おそらく奴は着々と日下部京子攻略の準備を進めていたに違いない。

電話が繋がると、まず周囲の雑音が耳についた。辺りが賑わっているのが目にしないででもよくわかる。

「おいこらボケカス」

「いきなりなんだよ。チンカス」

「聞いたぞ。おまえが昨日誰といたのか」

「はて。なんのことやら」

「うそぶくなかれ。日下部先輩と出かけてったらしいじゃんか」

「っーか今も一緒にいるけどね」

思わず言葉を失った。一泊旅行？

「……で、どこにいんの？」

「ネズミがいる夢の国」

「亀山ダム？」

「阿呆。TDLじゃ」

「えーと、トワイライト……デンジヤラス……」

「無理すんな。ともかくおれは夏休みをエンジョイしてるから、くれぐれも邪魔せんでくれ」

その背後から「誰なの？」という日下部先輩の声が聞こえ、アキタ力は「童貞ボーイ」という説明を付与した。だがそれはもはや間違っている。といって説明する気もないが。

「ま、頑張つて一億回目指せよ。そんじゃな」

としまいにはおざなりな文句で電話が切れてしまう。なんだろう、

この説明しがたい悔しさのようなものは。

&1t・電話を切る前にサヨナラを>、……第二十六話（後書き）

第四章もこれで終わりです。

なんだか思ったより長くなってしまいました……。

それでも少しずつ完結に近づいている気がします。

ってそんなの当たり前か（汗）

<夏夜のあやまち>;……第二十七話

夏の風物詩の中に必ず上がるものと言えば　そう、花火だ。もちろん中には人ごみが嫌だとか、ろくに見物もできないしという声もあるだろう。しかし恋愛ゲームもとい三次元でも、隣に彼女がいれば話は別である。

……はずなのだが、どういうわけか、僕はアキタカと肩を並べて昨晚の雨に濡れた路面を、花火会場に向かい歩いていた。道を進むにしたがって浴衣やじんべいを着た人たちがそこかしこに姿を見せる。そして駅前に出た途端、それまで抑えつけられていた人声、笛や太鼓の音が、巨大なひとまとまりの旋律となつて、わっと広がつた。

「すげええ」

そう感嘆の声をもらしながら、アキタカは首を伸ばして辺りを見回す。視線は胸にさらしを巻いた女の子たちの前でぴたりと止まり、その目はひとりひとりをじっくりと見分した。

「真ん中の子がいちばんかわいいな。化粧けがなくていい」

「指差すなつて。恥ずかしいから」

まさにそのとき、視線に気づいたひとりの女の子がこちらを向いてそつと微笑んだ。アキタカは小さく手を挙げてそれに答えた。

「知ってる子なの？」

「いや、知らないよ。だから要するにおれがもてるということだ」

「自意識過剰なことこの上ないな。相変わらず」

「負け惜しみはやめたまえ」

アキタ力はそう言っただけで、わざわざこちらを向き、両眉を得意気に上げる。それにしてもなんと腹の立つ顔だろうか。

そもそもなぜこんな奴と花火大会に行くことになってしまったのか。その理由を説明するためには、一週間ほど過去に遡らなければならぬ。

元々、僕と夕美は花火大会に行くつもりはなかった。というのも、夕美は近ごろの外泊つづきで母親から疑惑の目を向けられていたし、花火大会には大勢の人が来るわけだから、もし二人の姿を親類に見られてしまうと、ややこしいことにもなりかねない。そんなわけで、自分のあいだは僕の部屋か、あまり人目につかないところで逢おうということになっていた。でも要するに逢うのが夜でなければかまわなかったのだから、花火大会に行けないことくらいは瑣末な問題でしかなかった。

そこにアキタ力からの、この真意のわからない誘いがあったわけだ。僕が電話を取るなり、奴は開口一番こう言った。

「おい、花火大会行こうぜ」

「は？」

僕は思わずそう言った。もしこのとき以上に「は？」という言葉の適当な使い道があるのなら、ぜひ教えていただきたい。

「だから花火大会に行こうぜって」

「誰と？ おまえと？」

僕は二度びつくりしてそう訊いた。

「そつだよ。なんか文句あるか？」

「ありすぎて一口には言えん。ていうかなんでおれなんだよ。自分なんか、よっぽど誘う相手いるじゃんか」

「まあまあいいじゃないの。たまには水入らずで」

「気持ち悪いな……どうした？」

「とりあえず行くのかよ。行かないのかよ」

「いや、別に行ってもいいけどさ……」

「じゃあ決まりね。当日電話するわ」

「あ、ちよつ」

そしてまた唐突に電話を切る。これがその理由なのだが、考えてみると理由でもなんでもない。まあいいかと納得してしまった僕も僕なのだが、とにかく勝手な奴である。

男二人で花火見物なんていかにも気が滅入りそうなものだが、アキタ力は奇妙なほど上機嫌だった。なにか興味をそえられるものを見つけては、隣から肘で小突いて「あれ、ちよつと見に行こうぜ」なんて言ってくる。人の気分などおかまいなしというところだ。

駅から花火会場までの広い一本道には、ずらりと夜店が並んでいる。綿あめ、水風船、金魚すくいはもちろんのこと、クジ引き、射的、型抜き、たこ焼き……数え上げたらキリがないが、どれも法外な値段である。しかしまあ人の心理とは不思議なもので、祭りとなると財布の紐も緩みがちである。かくいう僕も頭の横にカーネル・サンダースのお面を付け、左手にたこ焼きを持っているわけ。

最初の花火が上がるのは七時ちょうどだ。花火の上がる地点から最短距離となる対岸の岸辺では、熾烈な場所取り合戦が繰り広げら

れる。ある者は前夜からシートを広げ、今日を通して二晩飲み続けることになる。もちろんそんな絶好の場所を僕らが取れるはずもない。よって狙いは必然的にもうひとつのスポットに当てられる。

こちらはテトラポットに囲まれた湾沿いで、半月に一度くらいコンテナ船が寄港する外は閑散としている。花火の打ち上げられる地点からはいささか距離があるが、視界を遮るものがなにもないと、辺りが静かなので、カップルにも人気を博している。花火通の味わいとも言うべきものがそこにはあるのだらう。

僕らは焼きそばやかき氷を買い込み、一路その地点へと足を向けた。でもまだ僕としてはなんとなくしっくりこない。というのはアキタカが花火に対してそれほど思い入れがあるとはどうしても思えなかったからだ。

「あのさあ、ひとつ訊いていい？」

辺りからじよじよにひとけがなくなり、静かになったところで僕はそう切り出した。

「なに？」

「花火がよく見えるのはいいんだけど、どうしてそんなにこだわるわけ？ そんなに花火好きだったっけ」

「いや、別に好きじゃないよ。嫌いでもないけど」

「じゃあなんで？」

そこでアキタカは、にわかには信じられない言葉を発した。

「そりやおまえ、恵子先生が来るからだよ」

「……は？」

「言つてなかつたつけ。今日恵子先生が来るんだよ」

しれつとした顔で、アキタカはそう言った。僕は思わず足を止めた。容器から氷菓子の一角が零れ落ちた。

「え、マジ？」

「マジだよ」

「嘘」

「嘘じゃねーって」

「マジ？ 本当？ どうやって誘つたの？」

僕が思わず興奮して続けざまにそう尋ねると、アキタカはいつもの憎らしい笑みを浮かべた。

「それを訊くか？ なら答えてやろう。先生は彼氏と別れたんだよ」

僕は言葉を失った。

&l t・夏の夜のあやまち&g t;・……第二十八話（前書き）

ユニークアクセス100000突破！

PVアクセス40000突破！

本当に本当にありがとうございますっ！

<夏夜のあやまち>;……第二十八話

「……ま、おれは彼氏がいることも知らなかったわけだが。ともかく別れたんだったら問題はない」

頭の中を整理するのにえらく時間がかかった。なんでなんで、どうしてだ？ これ以上ないほどに幸せなカップルだと思ってたのに、恵子先生は誰か別の人を好きになってしまったのだろうか。それとも東野先生の浮気？ あんな素敵な恋人がいるのに、そんなまさか。

妄想がひとりでにふくらみ、もはや収集のつかなくなるところで、僕は現実に立ち返った。ちょうど風船を空に放すみたいに。

「いやいや問題はあるだろ。教師と生徒なんだし」

「それは学校での話。今はプライベート。おまえ恵子先生が歳いくつか知ってんのか？ まだ24だぜ？ 女の華ざかりよ。ひと夏の情事くらい欲しいもんだろ」

毎度のことながら理解しがたい思考回路をためらいもなく発揮するアキタ力ではあるが、僕の凡庸な脳みそはそこに待ったをかけるべく、あわてて動き出した。

「ちょっと待った。おまえ日下部先輩はいいのかよ？」

「ああ、京子はまた別の話だな。あっちはあっち、こっちはこっち」

僕は啞然としながら、急いで頭の中を整理し、言葉を組み立てた。

「ひとつ言わせてくれ。おれは今誰よりおまえが恐ろしい。ていうか、恵子先生は他の女みたいにほいほいついては来ないと思うぞ」

アキタ力は不敵な笑みを浮かべ、人差し指を振る。

「ちゅちゅちゅ……甘いねえ。だったら彼氏と別れたことをわざわざおれに報告する必要はない」

僕の想像はアキタ力が誘導する地点に向かおうとしていた。それをなんとしても食い止めるべく、僕は踏みとどまった。

「じゃあなにか？ 恵子先生はおまえが来るのを今待ってるのか？」

「そのとおり」

「誘ったのか？ 誘われたのか？」

「無論誘われたわけだが」

「ちよつと待て。じゃあなぜおれがいる？」

そこで初めて考えるような間が置かれる。アキタ力はやりと片方の口を上げた。

「やはりそこにたどり着いたか。工藤新一くん」

「バーロー。……ってふざけてる場合じゃなくて、なぜおれを誘った？」

アキタ力は僕の背に手を回し、肩を叩いた。僕らはふたたび歩き始めた。狡猾な笑みが奴の口元に浮かぶ。ひそひそとした話し声で奴は続けた。

「そこで、おまえに協力を求めたいというわけだ……恵子先生はなぜか南を高く買ってるからな」

「つまり引き立て役になれってことかよ」

「いや、そういうわけじゃないな。なんつーか、おれの疑惑を払拭

してほしい」

「だって……その疑惑ってほぼ事実じゃん」

「うっせ。ともかくおれのイメージアップをおまえに頼みたいのだ」

「……嫌だと言ったら？」

アキタ力はそこで僕の体からすつと手を離れた。

「別に嫌ならいいさ。強要はしない」

これはなにかあると見た僕は、さらに突っ込んだ質問をした。

「それはつまり、協力すれば見返りがあるってことなのか？」

フッフ、とアキタ力はまるでべたな悪役を思わせる笑い声を上げる。

「少しは知恵をつけたようだな、少年よ。つまりはもしかすると、君も童貞を捨てられるかもしれんのだよ」

僕は言葉に詰まった。が、あまり喋らないでいると勘づかれかねないので、急いで言葉を探した。

「じゃあ恵子先生は今ひとりじゃないってことか。そういうことだろう？」

「ご明察。他に女子生徒が二人いるはずだ」

「向こうは三人？」

「たぶんね」

頭の隅でなにかが引っかった。でもそれが意味する本当のところまで、僕はそのときたどり着くことができなかった。

「……ふーん。まあ別に協力してやらないこともないけどさ、なんかおかしくない？」

「なにが」

「いや、恵子先生がおまえを誘うとはやっぱりどうしても思えなくて」

アキタ力はそれまでの笑いを引つ込めて、今度は無表情で歩き続けた。なにか頭の中で考えている風でもある。それから諦めたようにフウツとため息をついて、口を開いた。

「今日はめずらしく冴えてるな。それだけは認めてやろう。花火に誘われたことは誘われたが、誘ったのは恵子先生じゃない」

「ほら、やつぱり」

「……が、恵子先生もおれが来ることは知っている。ま、同じことだな」

「え、同じじゃないでしょ。それじゃあ辻褃合わないじゃん」

僕は回転し始めた頭を使って鋭く突っ込みを入れた。

「おまえは恵子先生が彼氏と別れたことをわざわざ自分に報告したって言ってたんだぜ。要するにその事実だって、その誘われた女子生徒から聞いたんだろ」

「うっ……まあ、そうなるな。しかしチャンスに変わりはない。おまえは金田一かよ」

それを聞いて、僕はようやくほっとすることができた。協力するという条件はいちおう飲んだことにしておこう。けれど奴がまた品のない行動に出ようとしたときは全力を持って止めようと思う。じつちゃんの名にかけて。

幅のある一本道が、入り江に向かって長く延びていた。照明がひとつもないせいで、道は死に絶えたように暗かったが、目をこらすと闇の中にいくつかの車両と動く人影が見えた。風に乗って聞こえてくる声は闇をくぐり抜け、耳元で蠱惑的に響いた。先ほど歩き過ぎた賑わう通りの明かりが、あたかも静止した巨大客船のように、海上にぼっかりと浮かび上がっている。

「どこで待ちあせてるの？」

そう尋ねると、アキタカは腕を伸ばして道の先を指差した。棧橋に灯る白い明かりのそばで、長い髪が揺れるのがさっと見えた。さらに五メートルばかり歩いたところで、誰かが立ち上がって手を振っていることに気づいた。

「あれって……池西加奈子？」

僕はぎよつとしながら、続いてアキタカの顔を見た。

「仕方ねーだろ」

「……別にまだなにも言ってないぞ」

「恵子先生とお近づきになれるんだ。多少の犠牲は止むをえん」

「もうひとり誰？」

「さあな。加奈子の友だちとかじゃないか？」

会場のアナウンスが風に乗って届き、途切れ途切れに耳をかすめていった。そろそろ時間だ。池西加奈子はこちらに走り寄ると、真っ先にアキタカの腕を取った。が、あっさりと払いのけられる。

「やめろ」

なんとまあ底冷えした声だろう。

「どうしてえ？ いいじゃん」

「明日してやる。だから今日はやめろ」

加奈子はむずがるような顔をして、それから隣に立つ僕が存在に気づいた。

「あれ、どなた様？」

「おまえ知らなかったつけ。南だよ。友だち」

「えっ、南先輩って……」

声を失ったように、加奈子はそのあとの言葉をつぐんだ。体がぴくりと震え、眉間に困惑するようなしわが浮かんだ。

「なんか問題あんのかよ」

「別にないけど……ただ……」

「ないなら行こうぜ」

アキタカはいつもの強引さで、ひとりスタスタと歩いて行く。取り残された僕があわてて歩き出すと、意味ありげに加奈子が僕を呼び止めた。

「……あの、ちょっと」

池西加奈子と直接言葉を交わすのは、それが初めてだったと思う。何度かアキタカに接する態度を見ている分、そのしおらしさは意外だった。

「え、なに？」

「なんていうか、すみません」

「え……な、なにが？」

加奈子は迷うように沈黙を置いた。それからぼそとした声でつぶやいた。

「きつとすぐ、わかりますよ」

それだけ言い残すと、加奈子はアキタカの元へと走っていった。

坂になった芝生の暗がりには、恵子先生はすらりとした脚を伸ばして寝転んでいた。もうひとりには三角座りをしながら、上空を見上げているようだ。アキタカがすべりこむように恵子先生の隣に座ると、加奈子がさらにその隣に腰を下ろす。僕は四人の背後に立って、いたいどこに座ったらいいものかと腕組みした。

そのとき、恵子先生がぱっとこちらを向いて、にっこり笑みを浮かべた。大人っぽい紺の浴衣に身を包んだ先生の姿は、いつもより素朴な美しさをもし出している。うちわを持った手が、小さくゆっくり上下している。

「あら、こんばんは。やっぱりあなたが来たのね」

「こんばんは、先生」

「なーに？　もしかして気使ってるの？　どこでもいいから座ったら。いまちょうど花火が始まるところだから」

加奈子は振り返ってじつと僕の目を見据えると、人差し指を横にまっすぐ向けた。少し離れた芝生の上に、もうひとりの女の子の姿

が見える。

「先輩、あっち空いてます」

「いや、知ってるけど……」

眼力というやつは本当にあるらしい。というのも僕の足は勝手にそっちの方に歩き出したからだ。

柔らかな芝生の上を歩くとき、夏草の青くさい匂いが胸をなつかしくさせた。僕は意味ありげにならないよう、隣の女の子と少しだけ距離を取ってそこに座った。近寄って見ると女の子が髪を茶色く染めていて、花柄模様の黄色い浴衣を着ていることがわかる。浴衣の上からでも、体の線の細さがわかった。

彼女は、これから打ち上げられる花火に全集中をかたむけているのか、隣に座った僕のことなど一切気にかけていないらしい。しかしあとで驚かれて変質者あつかいされても困るから、僕は思い切って自分から声をかけた。

「こんにちは。南といいます」

それから数秒の沈黙が訪れた。彼女はもぎ離すように海上から視線を落とすと、僕とまっすぐ見つめ合った。薄闇の中で、まるでパズルをはめこんでいくように相手の輪郭が浮かび上がってくる。僕は頭で理解するよりも先に、なにかを口にしかけていた。

そう、なにかをだ。言葉の意味を理解したのは、ずいぶんあとのような気がする。

「ヒナ？」

でもそれは声にはならず、衝動的な反応として、またためらいの息として外に吐き出された。無意識のあと、ふわっとした感触が胸元を通りすぎた。鼻先をシャンプーの香りがかすめ、柔らかな人のぬくもりが身に覆いかぶさった。

「……ずっと、逢いたかった」

ヒナは僕に向かって両手を伸ばし、しがみつくように胸の中におさまった。まさにそのとき、一発目の花火が打ちあがった。

&l t・夏の夜のあやまち&g t;・……第二十九話（前書き）

更新に一月かかってしまいました。待っていた方、本当にすみませ
ん。

<夏の夜のあやまち>;.....第二十九話

腹に響くドン、という音のあと、関のような歓声が上がった。間髪入れずに、次から次へと花火が上がり、僕らは光の中に投げ出された。

.....ドン、パラパラパラ.....ドン、ドン、パラパラ.....ドン、ドン、パラパラパラ.....

恵子先生は少女のように嬉々とした笑みを浮かべ、隣の二人に向かい海上を指差してなにかを叫んでいた。加奈子はアキタカの腰に腕を回し、そのアキタカはと言えば、恵子先生にぐつと身を寄せている。僕らだけが夏の宵から取り残され、かたい沈黙の中にいた。顔半分影を負ったヒナ表情は、哀しみともあきらめともとれる、無機的な表情に見えた。

こんなとき、なにを言えばいい？ 心臓は激しく鼓動し、胃にキリでえぐられるような痛みを感じた。

「.....どいてよ。重いから」

結局僕の口から出たのは、心ないその一声だった。僕はヒナの両肩をつかんで自分の体から引き離し、ため息をついた。正面から見つめ合うと、彼女らしからぬ弱さみたいなものが、目に浮かんでいた。

「久しぶり。.....でも、もうそういう関係じゃないから」
「.....ごめん」

今にも消え入りそうな、震える声でヒナは言った。

「おれが来ること、知ってたの？」

彼女は迷うように視線を逸らした。花火が打ちあがるたび、そのクールに整った顔が、光の加減で彫刻のように闇に浮き上がる。その芸術的な一瞬のいくつかは、ハッと息を呑むほどに白く美しかった。少しして、さらに僕は責めるように問いただした。

「ねえ、答えてよ。どっちなの？」

「……君が来るかもしれないっていうのは聞いた……でも、本当に来ると思ってなかったから……」

「ええ、なに？」

耳が遠くなつたふりをしながら、僕はそう怒鳴った。自分でも、どうしてヒナにこれほどつらく当たるのかよくわからなかった。心臓の音が、うるさいくらい耳に響いた。

「……少しでも話したくて……謝りたかったから……」

「花火の音で聞こえないよ、全然」

僕はただ、ヒナを困らせたかっただけなのかもしれない。仕返しみたいな気でいたのかもしれない。相手のこれまでの気持ちえ、考えようともせずに。

ヒナの頬を涙が筋となって流れ、彼女はそれを隠すようにもって顔を逸らした。

「こっち見ろよ」

なにかに急き立てられるように、僕は強い口調で続けた。

「謝りたいんだろ？ ちゃんとこっち見て謝れよ」

「……ごめんなさい」

「だからこっち見ろって！」

僕はヒナの腕をつかみ、ひねり上げるように力ずくで引き寄せた。彼女は小さな悲鳴を上げたが、抵抗はしなかった。僕はさらに、彼女の顎を手でつかみ、無理やり正面を向かせた。

「ごめん、なさい……」

数秒間、目と目を合わせ、それからパツッと手を離れた。ヒナは力尽きるように、その場にうなだれた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

そのとき初めて、心臓を打ち抜かれるような罪悪感が胸につのった。次に自分へのはつきりとした軽蔑を覚えた。こんなの絶対にしちゃいけないということを、たった今僕はしたのだ。

「ごめん……」

僕のその声は届かなかったと思う。もうそんな小さな声を耳に入るには、ヒナはあまりにも涙を流すことにすべてを捧げていたからだ。僕はあわてて彼女を助け起こした。でもどうやっても彼女は首を振るだけだった。

僕はそつと辺りを見回してみた。三人はまだ花火に見とれていて、こちらに気づく様子もない。そのうち徐々に、この場を立ち去りた

いという思いが強くなってきた。いったい僕はなにをやっているんだ？ そう考えたとき、思わず気味の悪い笑みが口元に浮かんだ。それは図らずも、ほんの少しだけ気を楽しませてくれた。

「夏休みだから、髪染めたんだね」

僕の言葉にヒナはかすかにうなずいた。少しずつではあるが、自制心を取り戻しつつあるみたいだった。

「……ごめんなさい」

「もういいよ。おれの方こそ……ほら、ちゃんと座って」

ヒナの腕を今度は優しくつかみ、助け起こした。

「大丈夫？」

「……少し、散歩してくる」

「おれも行くよ」

てつきり断られると思ったけど、ヒナがなにも言わずに立ち上がって歩き出したので、僕もそのあとをついていった。後ろを振り向いたそのとき、加奈子がじっとこちらに視線を注いでいるのが見えた。

それからずいぶん歩いたような気がする。

沿岸には松の木がどこどこまでも並び、僕らは同じような風景の中を無言のままひたすらに歩んでいた。その異様な雰囲気を見て取ったのか、木陰に腰掛けたカップルは僕らの姿を不思議そうに目で追った。なにか話しかけなくちゃ、とそう思いながら、ずんずん

と進んでいくヒナの後姿が僕を突き放すようで、どうにも声が掛けられなかった。十五分ばかり歩いたところで、もう一方の栈橋がすぐ鼻の先まで近づいてきた。

「あそこで休もうよ」

僕がそう言うと、ヒナは少しだけ歩みを遅らせて、こくりと頷いた。

栈橋には小屋があり、屋根は古ぼけた緑色の灯火に照らされていた。そばに一艘のボートがつかないであり、小屋はあたかも水面に浮かんでいるかのように見える。花火の明かりもここでは弱まり、かすかに栈橋を白く照らすことで、その存在をかるうじて保っている。

栈橋を渡る二三歩手前で、ヒナは唐突に立ち止まった。それから僕の顔を振り返り、言葉を紡ごうと努力した。でもなにを言いたいのか、まだうまく考えがまとまっていないうでもあった。

「どうしたの？」

「……なんでもない」

彼女は首を振り、ふたたび歩き出したが、まだどこかしら迷いがあるようにも見えた。それは必然的に、僕に彼女の心境をあれこれと想像させる一因にもなったわけだが、夕美の顔をふと思い出すことで、それらの雑念はあっさりと消し飛んでしまった。

そう、なんといつても僕には夕美がいるのだ。今そばにいる少女はかつて恋した相手であり、過去でしかない。そう考えることで、気持ちは楽になった。

「あの先っぽに座ろうよ。おれも少し話したいしさ」

僕はそう言つて棧橋の先端部分に腰掛けた。ボートの揺れるちやぷちやぷという音が耳をくすぐるように絶え間なく鳴っている。それから夕美がおずおずと僕の隣に腰掛けた。足をぶらぶらさせると、つま先が水面を小さく切り裂いた。

しんとした空気が辺りを覆っていた。まるで闇全体が僕らの言葉を待っているみたいに。

「あの電話……覚えてる？」

夕美は少しだけ僕の方に顔を向けた。

「……電話？」

「あの日の夜に掛けてきた電話」

その言葉で思い当たったようだ。ヒナは静かにうつむいた。

「ごめんなさい」

「俺の方こそきついこと言つてごめん。それとさっきも……ごめん。あんなこと言つつもり、本当はなかったんだけど……」

「……いい。悪いのは私だから」

しばらくのあいだ沈黙が下りた。僕は両手を後ろにつき、時おり閃光の走る夜空を仰ぎ見た。

「どこでどう間違つちやっただんたろうね……たぶんおれがいけないんだってのはわかつてたよ。なのに心の中でヒナのせいにはかりしってた。そういう自分が嫌だつて思いながら、そう思いながらも、逃

げてた……好きだったから、悔しかったから……」

話しながら、胸が高鳴り始めた。それがどういふ類の高鳴りなのか察したのは、もう少しあとになってからだった。

わずかな沈黙を置いて、ヒナも語り始めた。慎重にひとつひとつの言葉をまとめながら、彼女らしい静かな声で。

「私も君のことが好きだったから。嫌われなくなかったから。君の求めること、全部してあげたいと思った。お兄ちゃんが反対しても関係ない。私は私だから。君のこと好きだから」

わけもなく息が上がり始めていた。求めを欲するように、僕の唇は震えた。どうしてだろう、僕の彼女は夕美なのに。

「ずっと、君と話したかった。毎晩毎晩、君のことをずっと考えてた。こんなに苦しい気持ちになるの、初めてだったから。大切にしたいと思ったから」

ぼろぼろと言葉は崩れていき、彼女の顔も涙によって切なげに歪んでいった。その姿は、僕の心の奥深いところで眠っていたなにかを呼び起こした。震える手で彼女の体に腕を回し、そっと、しかし力強く抱きしめた。シャンプーのふわつとした香りがふたたび鼻先をかすめていった。

「だめだよ……君の彼女は夕美なんだから……君の好きな人、夕美なんだから……」

「いいんだ。おれが好きなのは……」

「……好きなのは、誰？」

パツと顔を離し、目を見開きながらヒナは僕を見た。そのとき、僕にはもうヒナしか見えなかった。どうして今まで気づかなかったんだろうと、そう思った。僕が本当に好きだったのは白石雛子なんだ、と。

「……おれは君のことが、ヒナが好きなんだ」

<夏夜のあやまち>……第三十話

その次の瞬間、柔らかいものが僕の唇に触れた。そしてそろそろと、まるで様子をうかがうみたいに、ヒナの舌が口の中に入り込んできた。僕は彼女の体から少しだけ離れてうつむいた。

「だめだ……おれ、どうしようもない奴だ……」

「どうして？」

言えなかった。言いたくなかった。でもこれだけは言わなきゃいけない。

「おれ、夕美とセックスしたんだよ」

僕の瞳は怯えていたと思う。あるいは悲しんでいたかもしれない。それでも僕は顔を上げて、ヒナの目を見つめた。

「だからもう、こういうことしちゃいけない。もうヒナが想ってるような人間じゃないから」

その言葉にヒナはうつむき、瞳からは光が失われた。でも僕の予想とはまるで違うことを、彼女は口にした。

「……私は、それでもいい」

「えっ？」

「君の初めての相手が夕美でもかまわない。そんなこと、どうだっていい。南くんが私のことを好きだって言ってくれるなら、それだけいい……もう迷わないって、そう決めたから」

その一瞬、気づくと僕は静寂の中に取り残されていた。そこでは花火の音も、沿岸の騒ぎ声も、すべてがどこかへと遠のいていく。相手の顔が、死者のように現実味なく闇の中に浮かび上がる。運命という一言では足りないなにかが、そこにはたしかにあった。

「……初めて呼んでくれたね、名前」

ヒナは立ち上がり、僕の手を取った。

「来て」

「……どこに？」

ヒナは後ろを少しだけ振り返った。それから小屋のドアに向かって手を伸ばした。

「鍵、開いてるみたいだから」

「いや、でも」

彼女は僕の胸にそつと顔をうずめた。小さな手の感触を背中に感じた。

「もう少しだけ一緒にいて。今日だけでいいから」

僕は頷き、小屋の中に入って鍵を閉めた。小屋には束ねられた網が置かれ、無造作に道具の並んだ棚の下に古びた長椅子が置かれていた。僕らはそこに腰掛け、ただじつと互いの体を抱き合っていた。携帯電話の電源を切り、やがて僕は服を脱いだ。

事を終えたとき、僕はもう、なにもわからなくなっていた。好きとか嫌いとかって、本当のところはいつたいなんだらう？ 恋

してるとか、愛してるとか、よくわからない。そんなのはただの言葉なんじゃないかという気もする。実際にこうして、二人の相手に好きだと言ったり、セックスしたりしている。こうなっては、もうアキタ力を責めることもできない。

僕が考えていた本物の恋とはなにかが違う。どちらかが違うのだ。あるいは。

「あら、あなただけ？」

元いた場所に戻ると、そこには恵子先生の姿しかなかった。芝生に伸びた二本のすわりとした脚は、僕がやっていると、持ち主によって三角にたたまれた。とても上品に、可憐に。

「もうひとりの子、気分が悪いらしいんで帰らせました。あの二人は？」

「さあ、どうしちゃったのかしらね、ほんと」

恵子先生は困ったような顔をして、自分の隣をぽんぽんと手で叩いた。僕はそこに腰を下ろした。

「突然ケンカ始めちゃったのよ、あの子たち。いまたぶん、なにか深刻な話をしてるんじゃないのかな。……私は来るべきじゃなかったみたいね。加奈子ちゃんを傷つけてしまったから」

「先生も知ってたんですか」

「察しはついてたの。だって加奈子ちゃん、佐野くんの話ばかりするから」

「もしかしたら先生をライバルだと思ってるのかも」

それを聞くと、先生の表情はかすかに歪んだ。自分が軽率な発言

をしてしまったことに、僕はそこで気がついた。

「……それは少しショックかな。そんなことで嫌われちゃったら哀しいから」

「いや、「冗談ですよ」

僕があわててそうとりなすと、先生はようやく淡い笑みを浮かべた。

「ところであなたはどんなの？　なんだかよからぬ噂が流れてるみたいけど」

「やっぱり……先生の耳にも入ってましたか」

「多少はね。あんまり女の子を泣かしちゃだめだぞ、南くん」

そこで僕は例のことについて思い出した。

「その、なんていうか……先生はケンカしたりしないんですか？　その、あの人は」

恵子先生はぱつと上空を見上げ、それから目をきよきよと動かした。まるで星の数を勘定するみたいに。でもそれはいわばフェイクで、彼女の唇は言葉を探すようにかすかに震えていた。長い睫毛が大きくしばいた。

「そうね、ケンカは一度だけ……うん、あった」

「その原因は？」

そこで先生は距離を置くように僕に向かって微笑んだ。

「なかなか勇気のある質問ね。授業でもそれくらい質問してくれる

といいんだけどな。どうしてそんなに知りたいの？」

「実は、その……アキタカから聞いたんです。恵子先生は彼氏とうまくいってないって」

僕は静かな海を前に、じっと押し黙った。沈黙は一秒一秒、胸にのしかかるようだった。

「東野先生は今年いっぱいで転勤するの。栃木の学校に」

恵子先生はあつさりとした声でそう言った。でも無理に明るく振る舞っていることは明白だった。

「一時期は結婚も考えてたけど、もういいかなって。たぶん、離れ離れになっちゃったら、向こうの心も動いちゃうと思うんだ。私の心も動いちゃうだろうし。だったらここできれいに別れておいた方がいいんじゃないかって、そういうお話をしたの。でも結局、ケン力になっちゃった」

言い終えると、先生は僕に向かってわざとにつこり微笑んだ。それを見ると、僕の胸は痛んだ。これまで恵子先生になにか悩み事があるなんて、考えもしなかった。そんな話をされて、いったい僕になんて言える？

でも彼女がひとつだけ嘘をついたことを、僕は見逃さなかった。先生は『私の心も動いちゃうだろうし』と言ったとき、舌がもつれ、あるいは言葉を飲み込みそうにさえたのだ。

「残念です、なんか」

「あら、どうしてあなたが残念がるの？」

先生は声を上げて笑ったけど、僕の方はうまく笑えなかった。

「正直言つて、始めはなんかちょっとやきもち焼いてたんです。本人を前にしてこんなこと言うのも変ですけど。先生は僕らの憧れだし、それをうちの担任にあつさり取られちゃうなんて、悔しいなつて。でも、なんていうか、そのうち東野先生も良い人なんだから、これが恵子先生のいちばんの幸せなんだろうなって、そんな風に思えるようになってたんですよ」

「ありがとう」

「だからこんなことになっちゃって……なんていうか、残念です」
「先生もなんていうか残念です」

うなだれる僕を真似るように、先生もおどけてうなだれた。それからゆつくりと親密な表情が浮かび上がる。いつもの恵子先生の顔だ。

「先生も南くんのこと、好きだよ」

「あ、え、本当ですか？」

「もちろん生徒として」

「やっぱり」

「……だけど、それはさっきまで」

先生はそう言つと、少し屈みこんで僕の唇にキスした。一瞬の出来事だ。

「これはちゃんと秘密を守っていてくれたお返し」

僕は呆然としながら、じつと恵子先生を見つめていた。

「……これは夢だ。間違いない」

「そうよ。だから誰にも話しちゃだめだからね。夢の内容なんて、みんな信じてないから」

雨が降り続いていた。ざあつという雨音の中で、軒下に垂れる水滴だけがぼたぼたと耳にひつつく。携帯電話は、昨晚から何度も同じメロディーを奏でている。そして必ず、いつも同じ箇所であつと途切れる。すぐに電話を掛けなすか、メールを送り返すべきなんだと思う。でも僕にはそれができない。ただ時間が経てば経つほど、胸が重く苦しくなってくる。

僕は朝子の部屋をノックした。

「いないの？」

僕がそう尋ねると、くぐもったうまく聞き取れない声が返ってきた。

「ねえ、朝子」

「……ちよつと待って」

トタトタと廊下を歩く音が聞こえて、ドアが少しだけ開いた。朝子はいつもの赤いフレームのメガネをかけて、レンズ越しに眠そうな目をのぞかせた。髪は寝癖でボサボサだ。

「なに？」

「入れてよ」

朝子はなにも言わずにドアを押さえて部屋に戻った。僕も部屋に入る。

「今何時よ？」

「10時半」

朝子はハアっとため息をつき、ベッドに倒れかかった。もぞもぞと体を動かし、大儀そうに首を僕の方に回した。

「昨日ね、夜中の2時までバイト残業だったの。祭りのせいですごく忙しかった」

「またバイト変えたのかよ。コーヒー飲んでもいい？」

好きにして、というように朝子は力なく手をひらひらさせた。僕はヤカンに水を入れて火をかけ、カップを用意した。

「どうしてそんなに金が要るんだよ」

「年頃の女の子は色々とお金がかかるの」

「ふーん。で、まだあの人とは付き合ってないの？」

「この前また改めて告白された。でも今は付き合えないって説明したんだけど……」

朝子はそこまで話して、押し黙った。

「……したんだけど、なに？」

「結局押し切られちゃった。若さって怖いね」

「え、じゃあもう付き合ってるの？」

「そうということ」

僕は思わずにやにや笑った。自分の姉に彼氏ができるというのは妙な気分で、嬉しさと恥ずかしさのようなものが同時に胸に込み上げる。しかも姉がこの姉であるだけに、なおさらである。

「なにひとりで笑ってんのよ。気持ち悪い」
「だってなんかおもしろいから」

朝子はため息をつき、ベッドの上で寝返りをうつた。

「あたしにもコーヒー入れてくれる？」
「いいよ」

ちょうど湯が沸いたので僕は二杯分のコーヒーを入れた。朝子は匂いをかいでから、ゆっくりと口をつけた。

「ありがと……でもね、あの子やっぱりちょっと強引かも」
「どうして？」

「あたしがオーケーした日にね、キスしたいって言われたの」

「うん。それで？」

「笑ってごまかした。でも何度もお願ひするから、また今度って言ったんだけど……無理やり肩をこうガシって掴まれて……」

「見事に唇を奪われてしまったと」

朝子はそこで三度ため息をついた。

「ほんと疲れちゃう。なんていうか、あたしそういうの慣れてないのよ」

「別にいいじゃん。キスくらい」

「よくない」

「気持ちはわかるよ、おれだって」

「あたしだってわかる。少しはね」

そこで僕らは、お互いがまるで別々の話をしていたような錯覚に陥った。朝子は煙草に火を点けると、改めて言葉をついだ。

「あたしのことを好きっていう気持ちはすごく伝わってくるわけ。でもその表現方法がちよっと子供すぎるの。ストレートすぎるっていうか、一方通行っていうか……そういうのって、女の子としてはなんかがっかりしちゃうのよ」

「さいですか」

「ま、あなたに話してもわかりっこないか」

「わかるよ。つまりどっちも大人じゃないってことだろ」

「は？ それどういう意味？」

機嫌を損ねるように、朝子は僕に向かって目を細める。

「だってそうだろ。どっちかが相手を許してやらなきゃ、進歩しないじゃん」

「これでもね、一生懸命押しとどめてんの。これ以上一步でも引いたら、もうむちゃくちゃになっちゃうんだから」

「じゃあ好きは好きなんだ。朝子も」

不意をつかれたように朝子はちよつと顔を赤らめる。

「そりゃ好きだよ。どっちかって言えばね」

「意外とはつきりしないんだな。人にはその辺つつこむくせに」

「うるさいな。しょうがないでしょ、あたしだって人間なんだから」

僕は立ち上がり、コーヒーを飲み干して台所に持っていった。

「そろそろ戻るわ。多少気も晴れたし」

「で、あんたはどんな感じなの？」

「今はこんがらがってる。だからもう少ししたら話すよ」

僕は朝子に向かって手の平を向ける。朝子もそれと察して、煙草を一本放り投げた。

「ライターは自分で持ってる」

「この悪ガキめ」

外に出ると雨音はいっそう激しさを増し、アパートの共用部から見える景色は、雨によってくまなく灰色に染められていた。灰色の樹木、灰色の屋根、灰色の犬小屋の中でうずくまる灰色の犬。煙草に火を点すと、煙は雨の中をのろしのようにゆらゆらと上がっていた。手すりに煙草の先端を押しつけ、部屋に戻ろうとしたとき、誰かが階段を上がってくる音が聞こえた。

「あ、先輩」

夕美は縞柄の入った傘を差し、髪をいつものように無数のピンで止めて、僕のアパートに姿を見せた。屋根のあるところまで来ると傘を閉じ、くるくる回して水滴を払った。

「え、どうしたの？」

「電話したんだけど、出なかったから……心配で来ちゃった」

夕美は気まずそうな笑みを浮かべながらそう言っ、傘のホックを留めた。彼女はぴったりのTシャツにショートパンツという格好で、ヒールのついたサンダルは底の方が雨で黒ずんでいた。薄化粧をした顔は、雨が生み出す灰色の世界にあっても、いやそのような世界の中にあってこそ、いつも以上にまぶしく光り輝いていた。

「ごめん……ずっと朝子の部屋にいたんだ」

「そうなんだ」

「とにかく入ってよ」

僕は夕美をカウチに座らせ、なにか飲むかと訊いた。彼女は知らないと言って、首を振った。

「どうかしたの？」

僕がそう訊いても、夕美は首を振るだけだった。僕の心臓は不吉に胸を打ち始める。彼女の隣に腰を下ろし、僕は相手の言葉を待った。

「……突然来ちゃって、ごめん」

「いいよ。それは全然かまわない」

そして沈黙。こういった場面では、あらゆるささいな仕草や呼吸ひとつでさえもが、当人たちにすら計り知れない深い意味合いを持つことになる。僕はふたたび、静かに息をしながら、相手の言葉を待った。自分からなにか言葉を発したら、大事なものを失ってしまう予感がしたのだ。

「メール、見てくれた？」

夕美の声は薄っぺらくて感情がうかがえなかった。そう思うのは、それが多分作られた声であるせいだろう。

「いや、見てない」

「昨日はなにしてたの？」

「前に言ったとおり、アキタカと一緒に花火大会に行ってたよ」

「誰と？」

「いや、だからアキタカ……」

気づくと夕美はまっすぐに僕の目を見据えていた。透き通った円い一對の両眼は、責めるようでもあり怯えているようでもあった。僕が口をつぐんでいると、夕美はきつい声で、問い詰めるように繰り返した。

「昨日は、誰と、花火大会に行ったの？」

「ねえ、ちよっと待って」

「嘘つかないで！ 加奈子から聞いたんだよ。先輩は雛子と一緒に」

言い終える前に夕美は泣き始めた。カウチに座りながら、くずおれるように僕の胸に倒れこんだ。

「ねえ、こんなの嫌だよ！ 夕美の先輩を取られたくない！」

「違うよ、ねえ。落ち着いて」

「どうして電話に出てくれないの？ 夕美だけ見てよ。もう雛子と会ったりしないで！」

夕美はそこでぱっと顔を上げ、潤んだ瞳を僕に向けると、震える声で言った。

「……ねえ、先輩の彼女は夕美でしょ？」

僕はなにとも言えなかった。

「ねえ、なにがあつたのか教えて」

「なにもないよ……たまたま会っただけで……」

「そんなの絶対に嘘！」

「嘘じゃない。それは本当だよ。元々アキタカと二人で花火大会に

行くはずだったんだ。でも高校の先生がいて、加奈子ちゃんが出て……そこにヒナがいた」

「どうして……どうしてそこに雛子がいるの？」

「おれだって知らないよ。恵子先生が来ることだって、その少し前に聞いたんだから　だから元々会うつもりなんてなかったんだよ」

僕がそう説明すると、夕美はゆっくりと呼吸を整え、かすれた声で言った。

「本当に？」

「うん」

「なにか……話したの？」

「いや、話してない」

「なにも？」

僕は頷いた。夕美はまっすぐな目でずっと僕を見つめていたが、安心するように肩の力を抜くと、僕の体に抱きついた。

「なにも心配ないよ。電話に出なかったのもわざとじゃない」

「ごめんね……おっきい声だして」

「いいよ。しょうがない」

「……夕美のこと、嫌いになった？」

「なるはずないよ」

「よかった。先輩に嫌われたら、夕美もう生きていけない」

雨足は徐々に弱まりをみせていた。外に出たくてたまらない子供たちの甲高い声が、アパートを抜けて路地裏に消えていく。これほど恋人に思われていながら、僕の心はどうしても満たされなかった。

「……ねえ、そっちはダメ。今日はあの日だから」

そしてそんな気持ちを埋めようと、僕は彼女の体を求めた。

「別にいいよ。生理だって」

「よう、アキ」

「なんだよこんな時間に。どした？」

「いや、なんか突然おまえの声が聞きたくなった」

「気持ち悪っ。なんだよ、マジで」

「ちよつと、おまえに告白しようと思ってさ」

「は？ 告白？」

「おれさ、実はもう彼女いるんだ」

「え、マジで？」

「うん、一年の子。あともう、おれ童貞じゃねーんだ」

「……は、嘘っしょ？」

「いや、マジで。しかも二股かけてる」

「……そうか、とうとうきたか。だからあんまり妄想しすぎるなつて言ったのに」

「なんつーか、女つてめんどくせーのな。おまえの言ってたことが今さらになってわかった気がするよ」

「いやいや、わかってねーだろ。悪いことは言わないから目を覚まして現実の女を」

「誰かい子いない？ ひとりふたり紹介してよ。今のおれなら誰でもいける気がする」

「わかったよ。いくらでも貸してやる。麻美ゆまでも美竹涼子でも好きなものを持ってけ。それともエロゲがいいか？ そっち方面はあんまり持ってねーけど」

「……いや、やっぱりいいや。多分誰が相手でも同じだろうから。」

恋とか愛とかってなんなんだろうな、ホント。なあ、アキタカ？」

「本当に気持ち悪いな、おまえ。いいからもう寝ろって」

「やっぱ大事なのは友達だよな。男と女なんていずれ別れるんだし」

「……おい。もう寝るぞ、おれは」

「そういえばこの前さ、恵子先生ともキスしたんだ。柔らかい唇だったなあ」

「だめだこいつ。もう寝てやがる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560d/>

スベテ恋スル少年少女

2010年10月14日00時31分発行